

1998年度（平成10年度）修了

1999年1月14日提出

修士論文

「趣味的サークル」のもたらす満足度とその存在意義について

—集团的余暇活動と生活充実感との関係から—

指導教授 間々田孝夫教授

立教大学大学院

社会学研究科社会学専攻博士課程前期課程

97MB005J 中溝一仁

目次

序論

I部 文献研究

I部 はじめに

第一章 小集団研究について

第一節 小集団としての趣味的サークル

第二節 小集団論の簡潔な考察と研究の意義について

第三節 小集団論分類

第四節 集団の規模による差異

第二章 自発的参加型集団としてのサークル

第一節 自発的参加型集団

第二節 「クラブ」と「サークル」の歴史的考察

第三節 サークルを研究する意義について

第四節 「自発的参加型集団」としての趣味的サークルに所属するまでの過程

第三章 余暇論について

第一節 「余暇」と「レジャー」について

第二節 余暇論と余暇の定義

第三節 ホイジンガとカイヨワ

第四節 余暇と余暇研究の意義

I部 おわりに

II部 社会調査

II部 はじめに

第四章 社会調査の方法と仮説

第一節 調査の概要

第二節 調査対象とするジャンルの選択について

第三節 質問設置の理由について

第四節 今回の調査の信頼性について

第五節 調査のための仮説

第五章 調査結果1－仮説の検証

第一節 総理府調査との比較1－フェイス・シート

第二節 仮説の検証

仮説1 趣味的サークルの参加者は、参加していない人よりも生活の充実感が高い。

仮説2 参加する趣味の選択は学生時代のサークルの影響を強く受ける。

仮説3 男性と女性では趣味的サークルへの参加目的が異なる。

仮説4 集団の公式度によって参加者の目的や満足度が異なる。 <類型化1>

仮説5 「個人的趣味」の集団よりも「集合的趣味」の集団の方が、満足度が高い。
<類型化2>

仮説6 集団的余暇活動は市民社会の形成に影響する。

第六章 調査結果2－調査結果の概要

第一節 総理府調査との比較2－調査項目

第二節 フェイス・シートと調査項目とのクロス集計

第三節 調査項目同士のクロス集計

第七章 調査結果3－類型化による分析と調査結果のまとめ

第一節 集団の非公式活動 <類型化3>

第二節 男女混合サークルと単一性サークル <類型化4>

第三節 音楽サークルと集合的スポーツサークルとの比較 <類型化5>

第四節 調査結果からみた趣味的サークル

II部 おわりに

結論

参考文献一覧

巻末付録

序論

戦後の日本において、地域社会の崩壊が叫ばれて久しい。私たちは高度経済成長を経て、物質的には非常に豊かになった。しかし、町内や近所の人との関係は次第に希薄になっていき、「隣の人は何する人ぞ」という言葉が表すように都市は非常に匿名性の高い社会になっている。もちろん、地方によってはまだまだ伝統的な地域社会が残っているところもある。しかし、日本全体で捉えると、それは縮小の一途をたどっているといっても過言ではない。人間が社会的動物であるとするならば、何らかの集団に所属したいと思うことはまったく不思議なことではない。そして、実際に人は家族や学校や会社など様々な集団に属している。しかし、現代に生きる人々にとって、伝統的な地域社会という一つの帰属集団を失いつつあることは間違いない。ここで伝統的な地域社会の是非を論じることはしないが、この帰属集団は様々な機能を有していた。このような地域社会が再びこの日本で復活を遂げることがあるだろうか。それは、望む、望まないに関わらず、現実的には起こり得ないであろう。なぜならば、個人主義的なライフスタイルを好む現代の人々にとって、所属の自由がないそれは非常に堅苦しいものであるからだ。また、そのような考え方自体が、伝統的な地域社会を衰退の道に追いやった大きな原因の一つでもある。つまり、ある種の機能を果たしていた地域社会が崩壊し、それが同じ形で復活し得ないとなると、人々は何かを失ったことになる。マーソンの言葉を用いれば、それは「準拠集団(reference group)」が与えていた「準拠枠 (frame of reference)」の喪失ということになるだろうか。準拠集団はその成員に基準となる行動規範を与えるのだが、これが現代社会において失われつつあるように思う。

そうはいっても、これに代わる新たな集団の発生は想像しがたい。今後、どんなに電子ネットワークが発達したところで、それが地域社会の機能を代替するとは思えない。そこで私が期待したのが「趣味的サークル」である。この集団は必然的に地域に密着しており、また所属に関しても個人の自由である。これが現代人のニーズに答えていると私は考える。趣味的サークルは、伝統的な地域社会のように人に準拠枠を与えるようなものではない。しかし、準拠枠を形成する一助となる可能性はあるだろう。

「集団」は社会学の主要なテーマなので、この分野の研究は数多く存在する。例えばジンメルの小集団論、テンニースのゲマインシャフトとゲゼルシャフト、クーリーの第一次集団、高田保馬の基礎集団と機能集団など、枚挙に遑がない。社会学だけではなく、他の

社会科学（経済学や政治学、心理学など）においても集団は重要なテーマとして取りあげられる。それは人間が人間として社会生活を行えば、何らかの集団を形成せざるを得ないからである。そして、マクロレベルでは「国家」、ミクロレベルでは「家族」というように人は意識しなくとも複数の集団に属しているのである。

「集団」へのアプローチは、機能、目的、形態、規範、地位と役割、相互作用、紐帯、など様々なものがあるが、基本的にはすべて「集団」の機能と意味を解明するために存在する。社会学のアプローチとして、私は集団の目に見えない秩序を明らかにしたいと考える。したがって、本稿では趣味的サークルにおける何らかの秩序——成員間にある暗黙のルールのことではなく、集団としての法則など——を見出すことも一つのポイントにしたいと思う。

ここで、趣味的サークルを取りあげる理由についてまとめておく。第一は今日の経済状況である。我が国は戦後、高度経済成長を経てGDP世界第2位の地位を確保している。バブルが崩壊したとはいえ、日々の食料に困るという状況は一般には考え難い。とはいうものの右肩上がりの経済成長を期待することもできず、ゼロ成長の中でいかに豊かな生活を送ることができるのかという点に人々の関心に移りつつある¹。こうした中で、物質的な消費のみで心を満たそうとする姿勢が限界にきていると私は考える。つまり、ただ単にお金を使って物を買うという行動ではなく、これからは人とのふれあいによって豊かさを感じようという方向にベクトルが向くと予想するのである。

第二は労働時間の短縮である。現在の日本は欧米に比べまだ著しく労働時間が長い。リストラや経済低迷の中、若干、時短の動きは鈍っているが、全体的な流れとしてこの動きが後退することはないだろう。こうして獲得された可処分時間は何に使われるのだろうか。第一の理由とも関係するが、経済状況が不透明な現代において、人々が経済的に負担のかかる時間の使い方をするとは思えない。したがって、この時間が比較的小金のかからない趣味的サークルに向けられると考えるのである。また、潜在的に趣味を行いたいと考えていた人にとって、労働時間の短縮は活動時間の確保につながる。

第三には、個人主義化と価値観の多様化を挙げる。今日では個人主義の台頭により、単一の大集団が成員の幅広いニーズに応えられなくなってきた。また、人々の価値観の多様化や家族のもつ様々な機能（消費の共同、食事、教育など）の外在化は、家族そろって同じ趣味を行う可能性を減少させている。このような状況は、趣味の個人主義化を招くと考えられる。つまり、無理をしてまで人に合わせることはなく、各個人が自分にあった

趣味を選択し、職場や家族から解放された自由な集団に参加する。そのような機会を趣味的サークルは与えてくれるのである。

第四の理由は、すでに取りあげた「準拠枠」の喪失である。現代の社会は自分の行動の規範となるような「準拠集団」が失われている、もしくは弱体化しているのではないだろうか。個人主義化とも関係するが、個人に強力な影響を与える集団も、予期的社会化を起こすような集団も今日では減少している。ここに現代社会の問題を感じる。例えばオウム事件である。なぜ多くの高学歴の若者が新興のカルト集団に身を投じたのだろうか。彼らは自分の行動を決定する規範をもっておらず、また自分の居場所としての集団や、教祖に対する無条件の信奉によって自己決定の回避を求めているのではないのか。もちろんマーソンの想定する準拠集団と私を取りあげる「自発的参加型」の趣味的サークルとは根本的に異なる。なぜなら、趣味的サークルは自発的な参加を前提としているため、成員の行動に準拠枠を与えるほどの影響力をもっていないのである。しかし、人々が集団の活動への参加を通して、より豊かな人間関係を構築し、それが準拠枠を形成する一助となることはあり得るだろう。

最後は、趣味的サークル自体の特性である。それは次の3点に要約される。第一に集団の参加に拘束力がないこと、第二に個人のプライバシーが確保されること、第三に集団への所属に際して参加者の主体性が存在すること、である。これらの特徴が現代の日本人を取り巻く状況と性質に適していると思われる。なぜならば、参加の自由はその気楽さゆえに、集団への所属が精神的負担とならずにすむのである。また、現代人はプライバシーに立ち入られることを好まないが、参加者が平等である趣味的サークルにおいてはそのような行為を拒絶することができる。所属に際して個人の自由意志が存在すること——伝統的な地域社会と異なって——も、強制を嫌う現代人の考え方に適っている。

以上のような理由により、趣味的サークルを取りあげることが現代の社会において意義のあることだと考えるのである。

「自発的参加型」集団の一つである趣味的サークルは人生の生き方を指し示すような、いわゆる哲学的な意味は持っていない。したがって、自らの生活世界（家庭や職場など）で自己実現を果たせなかった人にそれを与えることはできないかもしれない。人生を豊かなものにするためには、豊かな人間関係や人との絆などのいわゆる「愛情欲求」が満たされることも重要であるし、社会的な役割や地位を確保することも大切である。それらの上に趣味的サークルがきて、初めて人生を豊かにすることができるであろう。マズローの欲

求段階説²ではないが、低次の欲求が満たされていることも必要なのである。しかし、これには逆説的な仮説も成り立つ。つまり、日常生活では満たされない「何か」を求めて趣味的なサークルに参加するという可能性である。この要求に対して趣味的サークル³はそれなりに応えることができるはずだ。

私がすでに用いた「自発的参加型」集団は、趣味的サークルの上位概念である。それは6つの集団を想定している。第一は今回の研究対象となる「趣味的サークル」、第二に先生がいて月謝等を納める「お稽古ごと」、第三に人間性の回復や対人関係の改善・発達を目的とした「エンカウンター・グループ」、第四に「ボランティア・グループ」、第五に「NGO及びNPO」、第六に「宗教」である。第二の「お稽古ごと」について、当初は研究対象として含めようと考えていた。しかし、活動人口の多い「茶道」と「華道」について調べてみると、集団的な活動をすることもあるが、団体としての連帯感はなく、基本的には個人的な習い事であることが分かった。したがって、今回の対象からは外している。第三以下の集団を除外している理由は、目的に娯楽性が含まれないからである。つまり、それらは自分や他人や環境（広い意味での）などを改善しようという明確な目的の下に結集されているのである。また、職場における趣味・娯楽のサークル活動及びQCサークルは今回の研究から除外している。前者は必ずしも純粋な「自発性」が保証されておらず、また後者には娯楽性が含まれていないからである。なお、本稿では趣味的サークルの活動内容に言及する場合、それを「集団的余暇活動」と呼んでいる。

以上の分類を念頭におき、ここでは暫定的に趣味的サークルの定義づけを行っておく。「娯楽が一義的な目的で、個人の自発的な参加による、共通の趣味をもった人々の集まり」を趣味的サークルとする。本稿ではこの趣味的サークルについて、Ⅰ部では先行研究や文献から間接的にアプローチを行い、Ⅱ部では集団的余暇活動を行う団体を対象に社会調査を実施し、分析する。私が問題にするのは、趣味的サークルの存在意義と、その集団の機能である。前者については現代における意味と将来的な展望を考察し、後者は、集団の「紐帯(solidarity)」（「集団の凝集性」と言い換えてもよいだろう）が成員の満足度とどのように関係しているのか、という点を検証する。また、趣味的サークルの参加者とそうでない者の間に生活満足度の違いを見出すことができれば、その存在意義を示すことができると考える。本稿では理論的な研究と社会調査という2つのアプローチを車の両輪として、趣味的サークルの研究を進めていく。

¹ 総理府調査「国民生活に関する世論調査」（平成9年5月実施、詳細は第五章の脚注を参照）において、次のような結果がある。「今後の生活の仕方として、次のような2つの考え方のうち、あなたの考え方に近いのはどちらでしょうか。」

(56.3) 物質的にある程度豊かになったので、これからは心の豊かさやゆとりのある生活をすることに重きをおきたい

(30.1) まだまだ物質的な面で生活を豊かにすることに重きをおきたい

以上の結果は、人々が物質的な豊かさよりも相対的に心の豊かさを求めていることを表わしている。

² マズローによると、「愛情欲求」は「生理的欲求」、「安全の欲求」に次ぐ第3の欲求であり、「他者からの承認」は第4の欲求である。そして最上位に「自己実現の欲求」がくるのである。F.ゴープル著、小口忠彦監訳『マズローの心理学』産能大学出版部、1972年を参照。Frank G. Goble, *The Third Force: Psychology of Abraham Maslow*, Grossman Publishers, Inc., 1970.

³ 「表出的集団 (expressive group)」という術語がある。これは成員の欲求を直接的に満たす集団のことを指すが、これからみていく趣味的サークルの多様な機能を表すことはできない。したがって、本稿ではこの術語を用いていない。

I 部 文献研究

I部 はじめに

趣味的サークルに対する文献的なアプローチは3つの側面から行う。第一は趣味的サークルを社会集団の一形態として位置づける方法で、第二は自発的参加型集団の一つとしてサークルについて考え、第三は趣味的サークルに対して余暇活動の側面からアプローチする。私が提示した趣味的サークルを集団の一形態として位置づけ、それを中心に取り扱った研究はあまり見られない。また、自発的参加型集団の研究は存在するが、それが趣味的サークルの視点から行われたものは少ない。この2つのアプローチによって集団としての趣味的サークルを捉え、さらに余暇活動の要素を加えてその全体像を浮き彫りにする。これらの文献研究によって、趣味的サークルの存在意義も自然と明らかになるものと考えられる。

第一章 小集団研究について

第一節 小集団としての趣味的サークル

最初に小集団の定義について試みる。「成員相互の間に、①対面的関係があり、②相互作用がとりむすばれ、③互いに『個人としての印象や知覚』をもっているような集団」¹を小集団と呼ぶという。趣味的サークルは社会集団の一つではあるが、以上の定義に従うならば多くの場合、それは結果的に小集団となる。なぜなら、紐帯の緩い集団でその成員が快適さを感じる人数は、条件にもよるが比較的少数だからである。公式な下位の小集団をもたずに集団の規模が大きくなると、内部にインフォーマルな形で派閥ができてしまう可能性が高い。そのメカニズムを証明することは困難であるが、今回、調査を行う過程で、集団の成員数についてある一定の規則が成り立つことに気づいた。これについては第七章において詳しく取りあげることにする。また、集団の規模はリーダーの統率力によっても影響されるが、これについては本論の趣旨と離れるので取り扱わないこととする。

第二節 小集団論の簡潔な考察と研究の意義について

ここでは「趣味的サークルは小集団である」という前提の下に、既存の小集団論の簡潔な考察を行い、またにその研究の意義についても随時取りあげていく。

社会学の古典として、まずテンニースを取りあげる。彼を有名にしたのは「ゲマインシャフトとゲゼルシャフト」という概念であるが、前者を彼は有機的連帯、後者を機械的連帯と分類した。この類型のポイントは「共同性」の質の違いである。結果的に前者が「小集団」にあたる。前者のポイントは人々の「本質意志」、すなわち「心」である。つまり、ここでの人々は本質的に結びついているのである。彼はその源泉を次の三つに求めている。①感情や気分の共有、②習慣や伝統の共有、③良心や信仰の共有²、である。テンニースは集団を結びつきという観点から考察したのである。

クーリーは「第一次集団(primary group)」という言葉を導入し、親密な小集団を捉えようとした。彼が唱えた第一次集団は、家族や近隣、子どもの遊び仲間などである。ここでは個人の社会性や「第一次的理想」が醸成されるという。彼によれば、社会の道徳的な統一は、第一次集団で形成された人間性と第一次的理想によって支えられているのである。クーリーは第一次集団について、「顔と顔とをつきあわせている親しい結びつきと、協力と

によって特徴づけられる集団」³であり、「それが個人にたいして社会の統一性についてのもっとも初期の、そしてもっとも完全な経験をあたえるという意味において」⁴第一次的であると述べている。また、子供の遊技集団について、「十二歳をすぎた少年はしばしば、家族のなかにいるばあいより、同情や野望、名誉などによりしばしばとらわれる仲間づきあいのなかで生活する」⁵。そして、「ヨーロッパ大陸のより制約的な文明の結果は、ほとんど類似の傾向として自主的な遊技集団を形成することを物語っているようにみえる」⁶という。クーリーの第一次集団が、テニースのゲマインシャフトと異なる点は、「凝集性の高い小集団の、社会の基礎的的局面としての重要性」に目を向け、「その人間形成機能を指摘した」⁷ところにある。第一次集団は機能によって規定されるが、結果としてその形態は小集団である。

『小集団の社会学』を著したオルムステッドは、集団研究を「集団としての社会」(societies-as-groups)に焦点をあてたものと、「社会としての集団」(groups-as-societies)に焦点をあてたものとに区別した⁸。前者は外部的アプローチであり、長く社会学の中で認められてきた方法であり、後者は実験的精神に基づき、その多くは心理学に負っている。また、彼はクーリー型のアプローチを類型として「一次的集団」と呼び、それを小集団と対比させている。「小集団という用語は中立的であり、事実、一方に偏してはいない。このことが、長所でもあり、短所ともなっている。すなわち、問題にしている集団が一次的集団として作用しているのか、あるいは二次的集団として作用しているかを先入感(原文のまま)としてはもたないという長所がある。短所は、成員であるということが個人にとって意義があるのか、それとも社会にとって意義があるのかをまったく示していないということである。一次的集団という用語は、これとは逆になっており、暗示的であるという長所と小さな集団内部の二次的関係の可能性を曖昧にしているという短所をもっている⁹」。またこの2つの用法について「大きな組織の中の小さい集団の成員間におけるある種の感情や関係の重要性を強調しようとする場合には、一次的という用語が望ましく、「相互作用の小規模な体系を研究し、その内部的な諸関係の特質をあらかじめ決定しようとする場合は、小さいという語が適当な用語なのである」。また、「大部分の一次的集団は小さいものであるが、すべての小集団がかならずしも一次的であるとはかぎらない」¹⁰のである。

「ホーソン実験」で有名なメイヨーは、合理的に作られた公式集団の内部に、成員の個人的な相互作用を通じてインフォーマル・グループが形成されることを発見した¹¹。これを「非公式集団」と呼ぶ。ホーソン実験はもともと、照明と生産性の関係についての調

査であったが、それ自体は失敗に終わっている。メイヨーは述べている。「一室だけ実験的に一定程度に照明を減少させ、もとのまま完全に照明を施した別の部屋と比較してみたところ、その生産記録にはなんら重要な相違が起こらなかつた。これは、互いに依存する多くの諸要素の複合体である人間の生体が、その均衡の水準を変えたためであつて、実験目的はまったくあてはずれとなつてしまつたのである」¹²。しかし、その後の面接を取り入れた実験で、人は社会的行動規範によって非論理的に反応することが指摘された¹³。彼の主張は、成員間の個人的な相互作用や感情を要件としている点で「小集団」の理論の一つとして考えられ、実験から導き出されたという意味では帰納的なアプローチといえよう。メイヨーの研究は、対人関係や感情に焦点が当てられている点で心理学的な面を多分に含んでいる。また、経営学の領域では能率や労働生産性という側面からメイヨーがよく取りあげられている。

ミルズは『小集団社会学』において複雑な人間関係の過程を、行動、情動、規範、集団の目標、集団の価値、という5つの次元に分類した。これは、人がある集団に所属し、「事態の進展にともなつて、他人を真似て一つの次元で作用することを学び、ついには集団全体にたいして責任をとるようになり、その権限によって五つの次元全部で同時的に作用するようになる」¹⁴場面であるという。彼は一瞬、パーソンズのAGIL図式を思い起こさせる説明を行うが、パーソンズを誇大理論として批判し、自身は事例研究など、より現実に近いところから理論を構築している。ミルズは小集団研究の意義を次の4点にまとめている。第一は実践的理由である。「小集団のダイナミックスは個人の日常生活の送り方に影響する」¹⁵からであり、また「集団力学の知識が多ければ多いほど個人がそのきわめて重要な集団生活をよりよく営んでいくのに役立つ」¹⁶からであるという。第二は社会心理学的理由である。ミルズは、社会的圧力と個人的圧力の相互作用を観察するのに小集団は適当であるという。そして、小集団の研究により「個人が社会的現実をどう処理するかについての一般的法則を生み出すことができる」と述べている。第三は社会学的理由である。「直接的な課題は小集団そのものを理解し」、「実証的に基礎づけられた理論をつくりだすこと」であるという。第四は小集団研究から導き出した理論を社会システムに応用しようとすることである。「小集団はたんに微視的体系であるだけでなく、本質的にはもっと大きい社会の縮図」であり、「小集団研究は、社会体系一般にかんして効果的な思考方法を発展させる一手段である」¹⁷としてその意義を述べている。

次にフェスティンガーのインフォーマル・グループについての考察を検討する。フェス

ティンガーは認知的不協和の理論で有名だが、彼の理論の原点は小集団の事例研究にあるといってもよいだろう。彼は小集団の研究について、「小集団がその成員に対して影響力を行使できる理由は、その集団の成員であることの結果によってのみ得られる満足感を私たちが調べるとき、明確になるのである」と述べている。また、「親交や仲間とのつきあい、親密な感情の結びつきによる暖かさや喜びなどは、他の人々とのある種の関係の結果としてのみ得られるものである」(執筆者訳)¹⁸という。フェスティンガーの指摘は私の研究にとって非常に心強いものである。なぜならば、今回行った調査は、趣味的サークルの存在意義を参加者の満足度によって測ろうとしているからである。また、私は人々の生活の満足感にとって豊かな人間関係が重要なメルクマルと考えているので、彼の言及は大変納得のいくものである。

また、フェスティンガーによると、対面的集団 (face-to-face group) の構成は「社会学の変数 (sociological variables)」によってある程度決まるといふ。「社会学の変数」とは、ソシオメトリックの水準や、教育水準、年齢、性別、職業などを指している。そして、「対面的集団の重要性を理解することは、『社会学の変数』の重要性をより適切に理解するために必要不可欠である」(執筆者訳)¹⁹と主張する。彼はコミュニケーションの過程を考察することによって小集団の機能を解明しようとした。

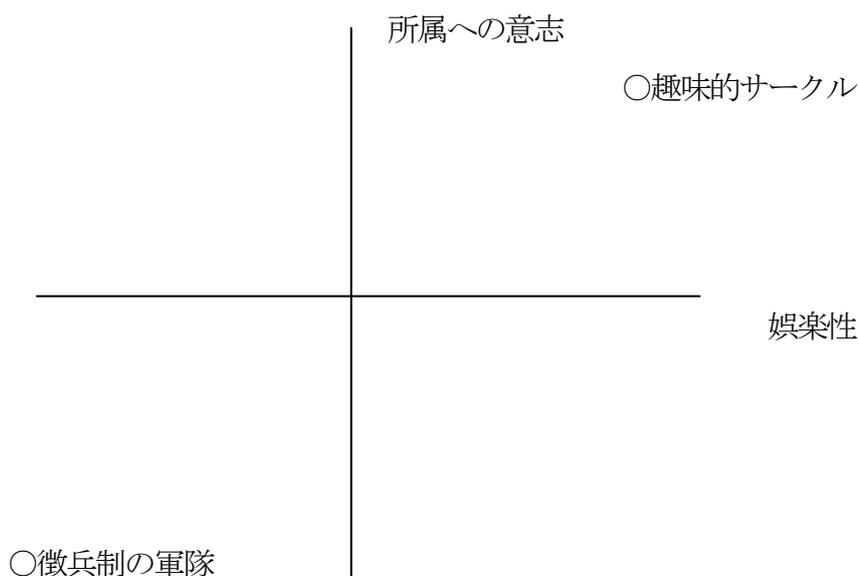
第三節 小集団論分類

以上、小集団研究と呼ばれるものを中心にいくつか取りあげてきた。大雑把ではあるがこれまでの研究を新たな切り口で分類すると、第一次集団のように形態や人の結びつきによって分類を行っているものと、メイヨーやフェスティンガーのように調査を行ったものとに二分できる。前者の「形態型」の研究は、何らかの対立概念を示し二元論的に扱ったものが多く、アプローチとしては理論的である。後者は実験や調査を複合的に取り入れたフィールド型といえる。結論として、私が本稿で取りあげた「趣味的サークル」を主要なテーマとした小集団研究はみられなかった。第三章でみる「余暇論」のアプローチから集団を考察したものは若干見受けられるが、小集団としての趣味的サークルを考察したり、小集団と余暇に深い関係を持たせた研究はあまり行われていないようである。

ここで、小集団としての「趣味的サークル」の位置づけについて考えてみる。まず「趣味的サークル」という概念は、「娯楽」もしくは「余暇活動」という目的によって規定され

ている。そしてそれはまた、参加者の自立的な意志を必要としている。これに対して、クーリーのいう第一次集団やテニースのゲマインシャフトは、成員の意志と関係のない帰属を前提としている。また、職業集団は所属に際し個人の意志が存在するが、その内部のインフォーマルグループへの参入は個人の意志と関係がない。さらに趣味的サークルは、circleという言葉が示すように、それ自体の循環で完結する独立体である。したがって、例えば家族に対して国家、職場内のインフォーマル・グループに対して企業、というように上位集団（または上部組織）の存在を前提としていない。もちろん、「全国…協会」や「全日本…連盟」というものに加盟している趣味的サークルは多い。しかし、ここでも「自発的参加」が前提であり、上部組織に対して趣味的サークルは出入りが自由なのである。つまり、国家や企業から切り離すことができない家族や職場内のインフォーマル・グループとは異なり、趣味的サークルは単独で存在可能なのである。

さらに、娯楽性と所属への意志という観点から趣味的サークルと他の小集団を比較する。趣味的サークルは目的が娯楽である以上、当然、娯楽性はもっとも高くなる。所属への意志に関しても、その個人にやる気がなければ所属することはないので、所属への意志は絶対条件となる。以上のような特徴をもつ趣味的サークルに、対立概念を与えたとしたらどのような集団が想定されるだろうか。目的に娯楽性を持たず、所属に際して個人の意志を必要としない集団。「徴兵制による軍隊」が対極に位置づけられるのと考えられる。ここでは特に軍隊を取りあげることにはしないが、「娯楽性」と「所属への意志」の関係を図示すると次のようになる。



軍隊は比較的取りあげられやすいテーマである。例えばマートンも「アメリカ兵」の研究

究から準拠集団理論²⁰を導き出している。しかし、その対極にある「趣味的サークル」の研究はあまり行われていない。現代社会において、いずれが人々にとって重要かは明白である。繰り返しになるが、趣味活動や余暇、サークルを取りあげた研究は数多く存在するが、小集団からアプローチした「趣味的サークル」の研究はみられないのである。そこに本稿の意義の一つがあると考えられる。

第四節 集団の規模による差異

ある集団を小集団たらしめる条件の中に、具体的な人数の規定はない。すでに見たように、集団の機能や成員同士の認知などによって、それが小集団であったり、そうでなかったりする。しかし、一般の社会集団に対して、それを「小」集団と呼ぶ以上、量的にも違いがなければならない。例えば、100人の集団を指してそれを「小集団」と呼ぶのにはためらいがある。それがたとえ1000人の集団を10の下位集団に分割したものであったとしても、である。なぜならば、「成員相互の知覚可能な人数」という条件に当てはまり難くなるからである。だからといって、具体的な上限を挙げることは極めて困難である。まずは、集団の規模による違いについて考察を行う必要があるだろう。

青井は小集団の規模について次のように述べている。「40名、50名になれば、個人的な認知も不可能になるだろうし、対面的な相互作用もむづかしくなる」²¹。「街頭を歩いている自発的な友人仲間の数は6名ないし7名以下が圧倒的に多く、それを越えるものはいたって少ないといわれている」²²。また、サークルの人数について、「15-20名のサークルがもっとも多くて、30名をこすものは少ない。サークル活動の多様性を保持し、資金を確保するには会員数の多いほど有利なわけであるが、結束を強め、質的向上をはかるためにはやはりあまり会員数を多くしない方が望ましい。事実、名目的な会員ではなく、同時に活動に参加している人数は、どのサークルでも15、16名が限度ではあるまいか」と述べている。さらに、実験的な小集団において、12名前後になると集団の機能が低下したり、サブ・グループに分かれてしまうという。そして青井は最後に「インフォーマルな小集団は大体6、7名以下であり、フォーマルな小集団でも20名を越えることは少ないといっている」²³としている。また、オルムステッドは小集団の人数について次のように述べている。「人数によって小集団を規定しようとする試みは効果のないものであるけれども、小集団の規模はおおよそ上の限度は20人、下の限度が2人といいうる」²⁴という。

ジンメルは、集団の規模の違いが与える影響について述べている。「集団のたんなる大きさの相違が構造上の相違をうみ出すのであるが、この構造的な相違がなおいっそう明らかとなるのは、影響力をもつ卓越した人びとの役割においてである。すなわち、一定数のそのような人びとは、大きな圏では小さな圏とは異なった意義をもつ。このようなことは自明の理であるが、たんにそれのみではなく、さらにそのような人びとの量が圏のそれと正確に比例して増減するばあいにもまた、圏の量的な変化にともなって、彼らの影響も変化する」²⁵。また、ジンメルは社交の場における具体的な数字についても言及している。彼はいう。「『社交』をなりたさせるには、どれだけの人びとを招待しなければならないのであろうか」という問いに対して、「われわれにもっとも親しい人間を15人ぐらい一緒に招待すれば、そのばあいはたしかに『社交』が生じるのである。たとえ個々のばあいの数の大きさが、諸要素のあいだの関係の性質と緊密さに依存していることももちろんであるにしても、つねに数は決定的なものであり続ける」²⁶。それが心理学的な手段によって確定できなくても、「特別な社会学的範疇への転換」²⁷について記述することができるという。

以上にみるように、集団の規模によってその機能や性格には差異が生じる。また、小集団と呼べるものの数は大まかに規定することができ、安定的な数はおよそ十数人であるという。これについては調査結果を踏まえたうえで再考する。

¹ 森岡清美ほか編『新社会学辞典』有斐閣、1993年、「小集団」参照。

² 前掲書、「ゲマインシャフト／ゲゼルシャフト」参照。

³ C.H.クーリー著、大橋幸ほか訳『社会組織論』青木書店、1970年、p.24。Charles Horton Cooley, *Social organization: a study of the larger mind*, Schocken Books, 1962.

⁴ 前掲書、p.27。

⁵ 前掲書、p.25。

⁶ 前掲書、p.26。

⁷ 森岡清美ほか編『新社会学辞典』有斐閣、1993年、「第一次集団／第二次集団」参照。

⁸ オルムステッド著、馬場明男ほか訳『小集団の社会学』誠信書房、1963、p.17参照。原書に関する記述なし。

⁹ 前掲書、p.15。

¹⁰ 前掲書、p.16。

¹¹ 森岡清美ほか編『新社会学辞典』有斐閣、1993年、「非公式集団」参照。

¹² E.メイヨー『産業文明における人間問題』日本能率協会、p.59-60。Elton Mayo, *The human problems of an industrial civilization*, The Macmillan company, 1933.

¹³ 森岡清美ほか編『新社会学辞典』有斐閣、1993年、「ホーソン実験」参照。

¹⁴ M.ミルズ著、片岡徳雄、森楸訳『小集団社会学』至誠堂、1971年、p.89。Theodore M.Mills, *The sociology of small groups*, Prentice-Hall, Inc., Englewood Cliffs, 1967.

¹⁵ 前掲書、p.2。

-
- 16 前掲書、p.3。
- 17 前掲書、p.3。
- 18 Leon Festinger, *Social pressures in informal groups*: a study of human factors in housing, Stanley Schachter and Kurt Back. : Stanford University Press, 1950, p.3.
- 19 前掲書、p.4。
- 20 R.K.マートン『社会理論と社会構造』みすず書房、1961年を参照。Robert K. Merton, *Social theory and social structure*: toward the codification of theory and research, The Free Press, 1949.
- 21 青井和夫『小集団の社会学』東京大学出版会、1980年、p.3。
- 22 前掲書、p.3-4。
- 23 前掲書、p.4。
- 24 オルムステッド著、馬場明男ほか訳『小集団の社会学』誠信書房、1963、p.15。
- 25 G.ジンメル著、堀喜望ほか訳『集団の社会学』ミネルヴァ書房、1972年、p.17。 Georg Simmel, *Soziologie*: Untersuchungen uber die Formen der Vergesellschaftung, Duncker & Humblot, 1968 から第二章と第四章を訳出。
- 26 前掲書、p.35。
- 27 前掲書、p.36。

第二章 自発的参加型集団としてのサークル

この章では「自発的参加型」集団について考察する。序章でも述べたが、趣味的サークルは、その条件として個人が自らの意思によって参加する形態の集団でなくてはならない。したがって、趣味的サークルは自発的参加型集団の一つであり、後者が前者の包括概念である。ここでは第一に、どのような集団を「自発的参加型」と呼ぶのかについて言及する。第二に、関係する文献中によく用いられる「クラブ」と「サークル」という似た意味の言葉の違いを歴史から明らかにし、娯楽を行う自発的参加型の集団を私が「趣味的サークル」と呼んだ理由について述べる。第三に趣味的サークルの存在意義を、またこの章の最後では文献研究から一歩進めて、自発的参加型集団である趣味的サークルに個人が所属する過程について考えてみることにする。

第一節 自発的参加型集団

1983年に経済企画庁国民生活局が『自主的社会参加活動の意義と役割』というものをまとめている。それによると「自主的社会参加活動」とは、1. 趣味・スポーツ・文化、2. 教育・学習、3. 健康・医療、4. 福祉、5. 生活環境、6. 消費生活¹、に分類される²。その意義として、「個々人の自主性に基づく活動であることから、参加する個々人の生活の満足度、とりわけ精神的充実感を高める」³ために重要であるという。同書はこの「精神的充実感」（充実感とは、元来、精神的なものであるからこの言葉の用法には矛盾を感じる）は、「活動欲求の充足」と「人間関係欲求の充足」という2つの機能に分類している。前者は、「人間は何らかの活動をしたいという欲求を生来的にもっており、何もしいではいられないもの」⁴であり、労働時間の減少により「労働を離れた面で多様な活動欲求を満たす場として、自主的社会参加活動は重要な位置を占めるものである」⁵という。後者については、「物質的には一応の生活水準が達成されている現代においても、他人との人間関係がなければ精神的安定は得られず」、また「集団の中であって自らの存在を他の構成員から認識されているということ意識してはじめて自らの存在意義を見いだすことができる」としている。さらに興味深い点は、その活動が社会の安定に寄与するものとして捉えられる点である。自発的な集団活動は「個人の精神的充実に加えて、活動の参加者全体の生活」を向上させ、「隣人の顔がみえる安心で暮らしやすい社会になる」。「こうした活動が多元的に行われるようになれば、社会全体の連帯意識が醸成され、さらには自主性、

創造性に富んだ活力ある社会となることが期待」⁶されるというのだ。ここでは「自発的な集団活動」を、社会全体にとって重要な機能をもったものとして肯定的に捉えている。

綾部は「約縁集団(クラブ)」という言葉を用いて自発的結社を考察している。その言葉の定義として「何らかの共通の目的・関心を充たすために、一定の約束の下に、基本的には平等な資格で、自発的に加入した成員によって運営される、生計を目的としない、パートタイムの私的な集団」と述べている。彼はその言葉を用いた理由として、「約縁集団にはソサエティ、ソロリティ、サロン、サークル、セクト、グループ、協会、会、講集団、組合などと呼ばれている集団が含まれる。これらの集団を代表する言葉としてクラブを用いたのは、この言葉が他の類似の言葉に比べてもっとも包括的なニュアンス」⁷を持っているからだと述べている。基本的に、この定義は私の提示した「自発的参加型集団」のことを指していると考えてよいだろう。彼は日本における自由結社の研究の遅れについて「血縁集団や地縁集団の研究に勢力をそがれ、広義の結社についての研究をとかく後回しにする傾向」⁸があり、また「平等主義的なヨコの関係を持って構成される集団の伝統が乏しいという既成概念が一般に普及していることが考えられる」⁹としている。綾部は日本の約縁集団を「講、座、株仲間、結い」、「年齢集団と秘密結社」、「明治前期の民権結社」、「札幌バンドと熊本バンド」、「サークル、クラブその他」に分類し、考察を行っている。

「自発的参加型集団」は、佐藤のいう「ヴォランタリー・アソシエーション」と共通するものがある。この概念は個人の参加の形態を問題にしたものである。彼は、ヴォランタリー・アソシエーションは目的のほかにも機能の面からも区別できると述べている。「変革志向的目標をもつヴォランタリー・アソシエーションは、社会運動型のそれに対応する。機能的ヴォランタリー・アソシエーションは、全体としての社会に対してじつに多様なサーヴィスを遂行する——宗教、科学、保健・福祉、社交、芸術、レクリエーション、教育、政治、そして経済領域において——」¹⁰。結果的に序論で示した「自発的参加型集団」と似たようなものを列挙しているが、私がそれを「ヴォランタリー・アソシエーション」と呼ばなかったのは、「アソシエーション」と呼べるほど組織化されていない集団も概念に含まれたからである。彼のいうヴォランタリー・アソシエーションは「変革志向的(運動型)」と「機能的」に分類されているが、彼の研究の中心は前者である。したがって、より公式度が高く、組織化されている集団が対象となっているのである。しかし、私の取りあげた「趣味的サークル」(自発的参加型集団の一つとして)は、最低限、名簿をもっている程度の集団、すなわち社会集団と呼ぶにはためらいがあるレベルの集団をも含んでいる

のである。そのため、私は自発的参加型集団をヴォランタリー・グループとして捉えている。

第二節 「クラブ」と「サークル」の歴史的考察

すでに「クラブ」と「サークル」という2つのキーワードが出てきたが、それらは一般にどのような使われ方をしているのだろうか。辞書によると「サークル」とは「1. 円周。周囲。範囲。2. 同じ主義・趣味の者の集まり。仲間。同好会。」で、「クラブ」とは「政治・社交・娯楽その他共通の目的によって集まった人々の団体。また、その集合所。」¹¹とある。この説明を読む限り、この2つを実質的に区別することは難しい。個人的なイメージとしては、第一に「クラブの方がサークルより組織化されている」というものである。その理由は、高校までのクラブ（部活動）と大学のサークル活動との違いを引きずっているようである。つまり、部活動という意味でのクラブは拘束的で、学校教育法に則った堅苦しいものであり、大学におけるサークル活動の方がより「趣味的サークル」に近い印象がするのである。2つ目のイメージとして、企業の介在化している可能性の違いを感じる。雑誌の名前に冠していたり、会員制であったりするのはいほとんどの場合、「クラブ」だからである。また、「フィットネス・クラブ」といったら、企業の営利活動が思い起こされる。しかし、これらの感覚は本質的な違いとはいえない。両者についての文献を繙いてみる必要がある。

まず、クラブについて考察する。「クラブ」といっても非常に幅広く、すでに述べたが、現実社会においては様々なものにその言葉が用いられている。欧米の上流階級だけが入会を許された非常に排他的な秘密クラブもあれば、日本の学校における部活動と同義のクラブもある。スポーツの世界では「クラブ・チーム」という言葉もあれば、接待などによく利用される「高級クラブ」と呼ばれるものもある。雑誌の名前に「クラブ（または倶楽部）」と名のつくものもあれば、特に意味もなく喫茶店の名前につけられていることもある。形態としては、会員制をとっているものもあれば、外部に対して全く自由に開かれているものもある。クラブという言葉が集団を指すこともあれば、場所を指すこともある。「クラブ」とは、一般にはかなり幅広く無節操に使われている言葉なのである。

FLK.シューが、クラブを「いかなる目的であれ、ある目的のために意識的に組織されたあらゆる種類の自由結社をさす」¹²と定義している。彼は参加者の自発性を定義のうえ

では問題にしておらず、その下位概念としてクラブを自発的か非自発的かによって区別している。「あらゆる種類の自由結社」ということは、利益を目的とした集団も含むことになる。つまり、会社組織も自由結社の一つであるという解釈も可能なのだ。したがって、シユアのクラブの定義は必ずしも自発的参加型集団とは一致しない。

実際のところ、現在のクラブの原型となっているのはイギリスのコーヒー・ハウスであろう。17世紀の後半から18世紀の初めにかけてロンドンでコーヒー・ハウスが流行した。当初は男性たちの社交場とされ、誰でも自由に参加できた。「18世紀後半から、19世紀になって、クラブという閉鎖的にかぎられた人間の集まり、あるいは趣味を同一にする人たち、思想を同一にする人たち」が組織化され、現在のクラブに至っている¹³。

クラブが日本に入ってきたのは明治維新以降といわれるが、はじめから「クラブ（倶楽部）」は排他的であったようである。小林によると、「これらは同時代の日本を背負って立つ上流階級の連中たちの社交場であり、彼らのネットワークの中心をなすもの」¹⁴であったという。日本の「倶楽部」について研究した橋爪は、日本における「クラブ」は欧米のそれと同一とはいえず、区別のために「倶楽部」と表現している。その理由として、「日本のクラブは欧米のクラブと比較した場合、『社交』の要素が希釈されている反面、『娯楽』的な要素が強調されている」ことを挙げている。彼の定義は、私の考える「趣味的サークル」にかなり近いといえる。また、日本の「倶楽部」は「親睦・趣味・運動などの共通する目的を持った人びとの組織」¹⁵であると同時に、社交場や遊技場などの場所性を表す言葉でもあるという。

確かに欧米のクラブより日本のクラブの方が、社交性より娯楽性に重きを置いているように感じられる。しかし、私が取りあげる「趣味的サークル」は、潜在的な役割として「豊かな人間関係や人とのふれあい」を提供する場としての機能を担っている。その側面から考えると、日本におけるクラブの活動も、人が交わるという意味での社交的要素は充分含んでいることになる。

次に「サークル」の歴史について、日本におけるその起源まで遡ってみていく。この言葉は我が国において、意外と早くから用いられていた。1931年に蔵原惟人がプロレタリア文学を広める手段として小グループの結成を呼びかけたことから使われるようになっていったという¹⁶。

戦後のサークルは、民主主義的な大衆組織運動としての役割を担った。「日本の近代化

のみちが、上からの解放のため、この与えられた条件を立体化するみちとして、サークル運動が 52 年以降労働者を中心に、やがて主婦や、農村の青年もまきこんで」いった。そして、その運動の特徴は「まず何よりも社会体制のもつ非人間的な面に対し、自己主体をとおしたあくまで自主的な抵抗組織として存在し、サークル員は体制悪、組織悪に流され、同調し、順応してゆこうとする自分自身の生活にひそむ内部的弱さを発見し、それに抵抗感をもつことから、自分自身を非民主的なもの、非人間的なものに追いやる一切のものと闘うなかで民主主義を学びあっていた」¹⁷という。同時に、この時期のサークルは企業内の活動が一つの大きな存在形態であり、労働運動の様相を呈していた一面がある。そのためサークルが「趣味集団」化するのには、サークルにとっての一種の墮落を意味した。高田は次のように述べている。「気持ちのいい仲良しクラブ的な存在となり、社会体制に対する抵抗感がうすれ、たんなる家族の延長となり、自己主体の変革意志もなくなってしまふ」¹⁸という。

学生もまた、戦争後すぐに活動を始めている。「1945 年 9 月の物理学校の学生 800 人による校長排撃のストライキをはじめ、学生たちの動きは活発で、ほとんどどこの大学や高校でも、社会科学研究会やマルクス主義研究会のような、学習＝行動サークル」¹⁹がつくられていった。

「杉の子会」は 1953 年 11 月に作られた。当初は杉並区の主婦たちの学習サークルであったが、ビキニの水爆実験が起こり、彼女らは原水爆禁止署名運動をはじめた。1955 年には、広島に「折り鶴の会」が誕生した。被爆した少女が白血病で亡くなったのをきっかけに生まれたサークルで、その主な活動は被爆者の世話と原水爆禁止運動への参加であった²⁰。

1958 年 9 月に『サークル村』が創刊された。それに先立ち、「創刊宣言」の草案を谷川雁が作成し、上野英信、森崎和江をあわせた 3 人が「サークル村」と命名した。この運動は『サークル村』を中心に、「共同体論と関連させつつ、文化運動の主体＝創造の主体として、個人ではなく集団を正面にすえて」²¹展開されていった。その主張は「日本文明の病識をはかる場所であり、病の深さを徹底的にひきうけるならば、それこそ健康のしるしだ」という。また、その意義は「縦の系列化した人間関係・社会関係に抗して横の平等な民主主義的な人間関係をつくりだす場であり、仲間づくりの場である」²²と考えられた。『サークル村』は 1960 年 6 月に休刊（そのままそれが最終号となる）し、その活動も翌 61 年に終わりを告げることになる。しかし、それが果たした役割と与えたインパクトは決して小

さくなかった。なぜなら、小集団内部にあるエネルギーを汲み取ろうという、従来のサークル活動ではなかった思想を「創刊宣言」で取り入れたからである²³。

1960年代に入り社会が豊かになると、余暇型のサークルが多数を占めるようになってきた²⁴。「旅行のサークルとか、ボウリング仲間とかいう形で、さまざまな余暇利用のサークルがあった」。しかし、同時期に「原爆の影響をうけた子どもをもつ親たちが助けあうサークル、きのこ会がうまれた。安いエネルギーを求める企業から見はなされた炭鉱から大正行動隊のようなサークルがうまれた。その時代のサークルの典型からはずれたところに、つよい自発性に支えられたこれらのサークルは育ってきた」²⁵。一方、政治的には、1960年に安保闘争や三池闘争がおこり、これらがサークル運動にも大きな影響を与えた側面がある。しかし、その後のサークル運動やその活動は政治的な色彩が薄れ、「サークル」という言葉自体も余暇活動中心の集団という、柔らかい雰囲気をもつに至っている。

以上、簡潔に日本におけるサークルについてみてきたが、サークルとは元来、一般民衆の草の根の活動で、社会運動に端を発している。そして、その運動の目的が達せられたり、権力の側に取り込まれたりするのに併せてサークル活動は退潮していき、社会運動の側面が抜け落ちた形で現在の言葉が意味する集団になっていったのだ。

クラブとサークルの違いについて綾部は次のように述べている。日本においてクラブは「高踏的、排他的、商業主義的方面」に発展していった。一方で、サークルは「文化活動を行う一つの仲間集団」²⁶であり、その特徴は「小集団であって、一般に統率力が弱い」²⁷としている。綾部のいうサークルの特徴は、まさに私が「趣味的サークル」をサークルと呼んだ理由そのものである。つまり、「サークル」という言葉は、その集団を表す他の言葉よりも「紐帯の緩い小集団である」という意味を含んでいると思われるのである。したがって、趣味活動を行う自発的参加型集団は、「趣味的サークル」となるのである。

第三節 サークルを研究する意義について

サークル研究の意義について考えてみたい。佐々木は次のように述べている。「これまでの思想史の主流は、各時代のオピニオン・リーダーの思想の稜線を連ねるかたちで書かれてきました。しかしこのスタイルでは、社会全体の波のうねりのもっともエネルギーに富んだ部分、つまり普通の人が落ちて、波頭のしぶきのような人たちだけが目立ちます。し

かし、思想史によく名の出る『学者』や『思想家』といったって、彼ら書いた本の話ではなくて、まるごとの実生活者としてのその生き方を思想として直視すると、他の生活者との間にどれ程の差があるでしょうか」²⁸。つまり、サークルを研究するという事は、集団を考察することと同時に、民衆や一般市民の生活に目を向けることでもあるのだ。確かに、社会にとって衝撃的な出来事や大きな影響を与えた人物に対しては、特別な注意を払わなくとも十分に焦点が当てられる一方で、小規模な人の集まりはその存在価値を見過ごされがちである。しかし、そういった小さな活動に光を当てることこそ重要な研究の一つである。なぜなら、現代社会が民主主義を謳うなら、市民活動こそがその最小単位だからである。社会をマクロレベルで捉えることももちろん大切であるが、底辺における人々の活動を把握し、理解することも現代社会にとって必要なことなのである。

第四節 「自発的参加型集団」としての趣味的サークルに所属するまでの過程

趣味的サークルの条件としてもっとも重要なことは、それが自発的参加型の集団であることである。「自発的参加型集団」という言葉は集団を指しているが、実際には参加者の意志を問題にしている。つまり、活動への参加に対し主体性を持った個人の存在が前提となっているのである。なぜ、趣味的サークルを規定するうえで参加者の自発的な意志が重要なメルクマルになるのか。趣味的サークルであるための他の条件、すなわち「小集団であること」と、「余暇活動を行う」は、「自発的な活動」から派生していると考えられるのだ。つまり、何にも拘束されないがゆえに、自分の好きな余暇活動を行うわけで、また、参加が自由であるがゆえにインフォーマルな小集団を形成するのである。この関係を参加者の側から考えてみよう。趣味的サークルへはじめて参加しようとする者は、何らかのきっかけや動機を必要とする。しかし、それらはいずれも差し迫ったものではない。人は今の自分の生活を何らかの形で変化させたいとき、趣味的サークルに参加する。ある集団に所属するまでのプロセスはいくつかあるだろうが、基本的には次のように考えられる。人はまず、何かを新しく始めたいと思い、その次にどんな活動（分野）をしたいのかを考える。そのときの選択が、学生時代のサークルの影響を受ける可能性については調査結果で述べるが、ここではじめて、具体的にどの集団に所属するかの検討に入るのである。所属までの過程をこのように考えると、まず、個人の主体的・自立的な意志が余暇の前に先立つことになる。また集団の具体的な選択が最後になるということは、趣味的サークル

が結果的に小集団になっている（個人が匿名化しそうな規模の集団は選択しないという意味で）ことに通じている。このことから、趣味的サークルを定義するとき、それが「自発的参加型」の集団であることがもっとも大切な条件であることが分かる。

¹ 経済企画庁国民生活局編『自主的社会参加活動の意義と役割』大蔵省印刷局、1983年、p.4。

² これは具体的な活動内容による分類なので、集団の目的を分類した「自発的参加型集団」とは異なる。しかし、実質的には「自発的参加型集団」の定義から宗教活動を除いたものであるといえよう。

³ 経済企画庁国民生活局編『自主的社会参加活動の意義と役割』大蔵省印刷局、1983年、p.41。

⁴ 前掲書、p.43。

⁵ 前掲書、p.44。

⁶ 前掲書、p.49。

⁷ 綾部恒雄『クラブの人類学』アカデミア出版会、1988年、p.19。

⁸ 前掲書、p.6。

⁹ 前掲書、p.205。

¹⁰ 佐藤慶幸『アソシエーションの社会学』早稲田大学出版部、1994年、p.49。

¹¹ 新村出編『広辞苑』岩波書店、1991年（第四版）。

¹² F.L.K.シュー著、作田啓一、浜口恵俊共訳『比較文明社会論』培風館、1971、p.208。

Francis L. K. Hsu, *Clan, Caste, and Club*, D. Van Nostrand Co., Inc., 1963.

¹³ 小林章夫ほか『クラブとサロン』NTT出版、1991、p.12。

¹⁴ 前掲書、p.14。

¹⁵ 橋爪紳也『倶楽部と日本人』学芸出版社、1989年、p.10。

¹⁶ 『新社会学辞典』有斐閣、『集団』平凡社を参照。

¹⁷ 「思想の科学」編集委員会『思想の科学7』中央公論社、1959年、p.20。

¹⁸ 前掲書、p.26。

¹⁹ 思想の科学研究会編『集団』平凡社、1976、p.74。

²⁰ 前掲書、p.80 参照。

²¹ 前掲書、p.315。

²² 前掲書、p.313。

²³ 前掲書、p.314 参照。

²⁴ 前掲書、p.6 参照。

²⁵ 前掲書、p.6 参照。

²⁶ 綾部恒雄『クラブの人類学』アカデミア出版会、1988年、p.224。

²⁷ 前掲書、p.225。

²⁸ 思想の科学研究会編『集団』平凡社、1976、p.24。

第三章 余暇論について

現在行われている余暇の研究は、大きく分けて2つのアプローチがある。一つは余暇活動を正面から捉え、その意義や機能を問うものと、もう一つは観光や地域経済と関連づけた研究である。後者についてはここでは取りあげない。なぜなら、経済的な観点から余暇を捉えようとするアプローチは、余暇活動を行う主体である個人や集団に焦点があまり当てられず、本稿の副題にもある「集団的余暇活動」から離れてしまうからである。必要なことは、より関係の深いテーマについての考察であり、ここでは余暇を正面から具体的に扱った研究を中心にまとめ、「余暇」の定義と意義について考えたい。また、本稿の主題である「趣味的サークル」に関連する記述も、その都度取りあげていく。

第一節 「余暇」と「レジャー」について

「余暇」と同義で用いられる言葉に「レジャー」というものがある。私たちはふだん、深く考えることなくこの言葉を用いている。ニュアンスの違いは若干感じられるが、基本的には同じ意味に捉えている。強いて違いを挙げるなら、「レジャー」は「レジャー産業」という言葉からも想像されるように、企業活動と関わりがある印象を抱く。一方、「余暇」にはわずかながら個人の主体的な活動が感じられる。実際、どの英和辞典を繙いても *leisure* の訳語に「余暇」があてられている。ヴェブレンの有名な『有閑階級の理論』。この原題は *The Theory of the Leisure Class* であるが、これは日本語に「余暇階級」ではなく「有閑階級」という言葉が存在したからである。総理府が毎年行っている「国民生活に関する世論調査」には、満足度を問う質問の中に「レジャー・余暇生活」という言葉が出てくる。これは「まったく同義ではないが、ほぼ同じ意味である」と捉えている証拠である。この章で取りあげる文献によっては、「余暇」を用いているものもあるし、また同じ意味で「レジャー」を使っているものもある。それを用いた著者にはそれなりの意図があったと思われる。また、時代によっても言葉の選択が異なったかもしれない。しかし、ニュアンスの違いはあるものの、本稿では *leisure* の訳語が「余暇」に対応したものとして、この2つを同義に扱う。

第二節 余暇論と余暇の定義

余暇活動については、わが国でも意外と早くから研究が始められている。生活科学調査会がまとめた『余暇～日本人の生活思想』は昭和 36 年に出版されている。「はしがきに代えて」の中で日高は次のように述べている。「いまアメリカの一部の『良心的な』社会学者たちは、アメリカ人民が、かつて人類が予想もしなかったような『敵』と対面していることを強調している。それは『貧困』の挑戦ではなく『豊富』の挑戦であり、『労働過重』の挑戦ではなく『余暇』の挑戦である」¹。アメリカはそうであったが、この時代の日本では「敵」は依然として「貧困」や「労働過重」である。しかし、一方で徐々に余暇活動や余暇時間が増えてきたことも事実であるのだ。だが、それらはレジャー産業や政府から押しつけられてきたものに過ぎない。日高は、余暇とは「民衆から彼らの手中に取りあげられなければならない時間」であると言い、この問題の第一次段階は、余暇を「民衆が自主的に使用」することで、第二段階は「余暇と労働とを矛盾なくひとつの円に結びつけること」²であると述べている。また、余暇活動は元来、自己の充実や自己実現のためのものであり、その意味で民衆の自発性、自立性が要求されるという。この点は多くの研究者が指摘しているところで、私の定義にも含まれている。しかし、この当時の余暇活動は企業によって組織されたものが中心で、それは「下から」の組織化とはいえなかった。そこで注目されたのが「サークル」活動である。サークルとは、「職場や地域や家庭の中にあるさまざまな矛盾から目をそむけず、それを克服し、人間らしく生きたいという願望に、その発生の基盤を持っているが、サークルという形態はいつ生まれいつ消滅したかわからない程、その存続がサークル成員の自発性にゆだねられている」³。これはサークルの特性をよく表している。なぜなら、サークルは結成から解散に至るまでまったく自由であるから純粋な「下から」の組織化である。一方で、その特性から全体の量的な把握は極めて困難である。

官公庁のものとしては、昭和 32 年に内閣総理大臣官房審議室が出した調査報告書『娯楽に関する世論調査』がある。「はしがき」が手書きなのがその古さを物語っているが、戦後 7 年目にしてこのような調査が公的機関によって実施されたことは意外である。この報告書は次のような一説から始まっている。「いかなる人間にもその人が率直に事実を認めるならば、種類、程度の差こそあれ、その人相応の趣味の生活があり、娯楽がある。少なくとも、娯楽は人生のあるところには普遍的に存在するものといえよう」⁴。当時としてはかなりリベラルな発想であるが、現代に生きる人々にとっては当たり前のことである。

それを「はしがき」で主張しなければならないところに時代背景を感じさせられる。

同じく官公庁のものとして、昭和 49 年に総理府青少年対策本部の『青少年の余暇に関する研究』が出されている。これは「青少年のレジャーランドに関する研究調査委員会」が各種の調査や文献をもとに作成したもので、ここではレジャーについて次のように述べている。「レジャーは、語源的には、第一に、残りの時間（全生活時間から生活必需時間と社会的に拘束されて働く時間とを差し引いた残りの時間）という意味で、多くは暇つぶしの対象となる場面、弛緩や怠惰を連想させるものに過ぎないが、その反対に、第二に自由に裁量で処分できる時間、自己の向上を図る機会と理解し、学問・訓練・陶冶ということを連想させるものとも考えられてきた」⁵。そして、日本は「欧米先進諸国が経験したような『近代的余暇』特に労働者階級のレクリエーション的性格の余暇の成熟」がないため、「まず生活基盤系における『ゆとり』があって、そのうえに生活創造系の『豊かさ』を目指す」⁶さねばならないと指摘している。

瀬沼は余暇に関する著書を多く書いている。彼もまた「余暇」という言葉には二つの意味があるという。一つは言葉通り「あまったヒマ」であり、もう一つは「個人の主体的な自由時間」と述べている⁷。基本的に彼のアプローチは帰納法である⁸。また彼によると、余暇活動は社会的要因と個人的要因という二つの側面によって規定されるという。前者は「価値観の多様化、社会経済の構造的変化、自由時間の増大といった要因」が、また後者は「性格、境遇、おいたち、学歴、社会的地位、収入程度、自由時間の量、人生感（原文のまま）」⁹などが構成要素であるという。これは、研究対象となる時や場が異なっても必ず考慮されるべき観点であるといえる。

生涯教育の観点からも瀬沼は余暇を論じている。余暇を人生という長いスパンの中で位置づけ、「主体的な時間の創造を考える場合には、それぞれのライフステージで課題となる事柄の学習をしなければ、不断の自己創造」はできないという。しかし、結論としては余暇活動が第二の天職につながることを理想として考えられている。「定年後の人生を第二の人生と呼ぶならば、二十代から出発したライフワークを第二の仕事に選べるくらいの実力を養っておきたい」¹⁰と述べている。余暇活動を生活設計と分離したものとは考えずに捉えていることが特徴的である。しかし、この問題点は余暇活動を仕事と結びつけた途端、それが「遊び」から「義務」に変わる危険を常に孕んでいることである。私は、余暇活動それ自身が目的として存在してよいと考えている。

加藤は余暇の義務化について述べている。一般に労働は拘束的で余暇は自由な活動であ

ると考えられているが、「現実的には余暇というのはますます拘束性をもちはじめている」¹¹という。加藤によると、休みの日は楽しまなければならないと考えた瞬間、「余暇は、あるいは遊びはあらたな道徳によって拘束される」¹²のである。彼はまた、余暇を研究する意義について次のように述べている。「余暇問題というのは、すなわち文明論でもあり、また人生論でもある。つきつめてかんがえてゆくと、われわれは、なぜこうして生きているのか、といったような哲学的問題にさえ、われわれはいざなわれてゆくのである」¹³。これは私も思うところである。余暇を小さく、または過小評価すると、「無駄」とか「浪費」と考えたり、また、せいぜい「疲れた身体や精神をリフレッシュして労働力の再生産を図る」という目的くらいにしか考えられないが、大きく捉えれば、豊かになった現代において「人はなぜ働くのか」といった考えや、「人は何のために生きているのか」といった哲学的問題に到達するはずである。

戦後の日本におけるレジャーの特徴について、石川は次の5つにまとめている。第一は「代理満足」¹⁴的なレジャーで、ここではドライブのことを指し示している。これは「当時の物価、政治その他もろもろについての不満を一時的にかつ擬似的に解消するための心理的装置」¹⁵であり、また同時に「住居条件の悪さに対する欲求不満」¹⁶をも解消しているという。第二に、日本人のレジャーに関する満足度はライフステージに大きく依存しているという。第三は「レジャーの社会資本と私的資本とのギャップ」¹⁷として公園の狭さを挙げ、第四にはレジャーにおける日本人の「同調性」の高さについて述べている。また、同時に「差別化型のレジャーのパターン」¹⁸をどのように展開していくかという問題を提起している。石川の指摘で興味深いのは、「人間関係もレジャーを構成する一要素」¹⁹であると主張する点である。これは私の考えとも共通するが、人とのつきあいに重要な地位を与えることは余暇活動を考えるうえで大切である。

石川はサークル活動についても触れている。戦後の比較的早い時期に、労音、労演、映サなどの鑑賞団体の活動が活発になる。他にも学習サークルや、文化サークル、政治的なサークルが盛んに輩出された。しかし、これらは「前提としての余暇があって、それが多様なサークルとして開花したのではなく、逆に、学習や文化に対する要求が、勤労のあとの時間をほとんど強引にまとめあわせて、一つのサークルを出現させた」²⁰という。

「レジャー」の定義について、岡田は次のような問題を表明している。一般にレジャーという概念に標準的な定義を与えることは困難であり、それは次のような障害によるものだという。第一は「レジャーの歴史性・社会性からくる障害」²¹である。「資本主義社会で

は、労働の場での人間の自己疎外を克服し、人間性を回復する場としてレジャーを位置づけ、そこでの活動はまったく個人の自由選択に任せることを原則としているのに対し、共産主義社会では、労働こそ人間に喜びと快楽を与えるテリトリーであり、レジャーは必然的に労働に還元されるべきものとして、とりわけ、モラル形成とイデオロギー形成を目指す活動領域として考えられ²²ているという。また歴史的には「少なくとも二十世紀に入るまでは、総体としての生活領域からレジャーを分離して、レジャーそのものに価値を与えるという観念は、事実上普及していない」²³。つまり、レジャーの概念はイデオロギーや歴史的状況によって大きく影響されてきたのである。そのため、「社会におけるレジャーの役割や、他の社会制度に与えるレジャーのインパクトは不定で、可変的」²⁴なものとなる。2つ目の理由に、「レジャーの定性要因の多元性からくる障害」²⁵を挙げている。これはレジャーが様々な要因から成り立つ行為概念であることに起因する。レジャーに関する定義で多くが共通するのは、仕事などの反対概念を想定することである。しかし、レジャーと仕事という対概念は「明晰かつ一元的な一対二カテゴリーではなく、まして、完全な背反的対峙スキームでもない」のである。つまり、レジャーと仕事の関係は「カテゴリーの異なる別々の行為概念であり、少なくとも二分法的関係ではない」。したがって、一般に「レジャー」の定義が困難なのは、「レジャーに含まれている要因の多元性にその原因を帰着させることができ、このような多元的要因の記述的分析の難しさ」²⁶を表しているという。第三の障害として、「理念型的概念構成」の難しさを述べている。レジャーの一般的特性として「自由」が挙げられる。しかし、第一に自由時間活動とレジャーとの区別をどこですればよいか、また第二に本人も気づかないうちに義務化したレジャーを本当の意味で「自由」と呼べるかどうかの問題がある。したがって、「レジャーの条件として『自由』を抽出することが果たして妥当なのかといった疑問」²⁷が生じて、単純に「自由」を一つの特性として採用できなくなるのである。レジャーが定義され難い最後の理由として、岡田はレジャーを行う行為者の主観的側面を取りあげている。レジャーの本質は、「主体のその活動への動機や目的に内在するものと考えられる。つまり、レジャーか非レジャーかの判別基準は、外在的活動そのものではなくて、その活動に従事している主体の動機・目的に帰属するわけで、レジャーの理念型的特性を活動内容によって演繹しようという発想が、そもそも非分析的・非科学的であるということになる」。したがって、「レジャーの本質はそれらの活動に従事している主体」の中に存在しており、「厳密な意味でのレジャーそのものに充当する活動が具体的には存在しえない」²⁸という。以上のように岡田はレジャーを

定義することの難しさを訴えている。そして最終的にレジャーを、「非仕事時間から社会的・生理的必需時間を除去した自由時間に、自立的に決定し、自由裁量に基づいて行う活動の中で、純快楽を意図・志向した活動」²⁹と定義している。

余暇を論じるうえで欠くことのできないのがフランスの研究者、デュマズディエである。彼の主著『余暇文明へ向かって』は上述の瀬沼や石川をはじめ、日本の余暇研究者に多大な影響を与えている。彼は、余暇とは「個人が職場や家庭、社会から課せられた義務から解放されたときに、休息のため、気晴らしのため、あるいは利得とは無関係な知識や能力の養成、自発的な社会的参加、自由な創造力の発揮のために、まったく随意に行う活動の総体である」³⁰と定義している。現在の余暇活動の研究者は、この定義を基本的な出発点としている。また、本論のテーマである趣味的サークルに関連して、「労働組合や業種別の協会と異なり、働くうえでの必要に結びついていないし、政党や教会に関係した集団と異なり、政治的もしくは宗教的实践と何の関係もない。それらの団体は何よりも余暇活動に関連しているのである」³¹と述べている。つまり、あくまでも余暇が目的であって、別な目的を持った集団が行う娯楽的行為とは一線を画している。さらにデュマズディエは余暇を研究する意義について、「(余暇は) 歴史外的価値であるかのような取扱いを受けて」いて、同時に余暇人間は市民として積極的でないという態度が広がっているため、「まさに余暇を歴史的視野のもとに、さらに技術的、経済的、社会的文脈のもとに、正しく位置づけなければならない」³²としている。

第三節 ホイジンガとカイヨワ

確かに、デュマズディエの指摘するとおり余暇活動に対する価値は低いものであったといえる。しかし、余暇の中にある「遊び」の要素について、それを人間存在の根源的なレベルにまで高めた研究がある。それがホイジンガの『ホモ・ルーデンス』である。彼は「人間の文化は遊びにおいて、遊びとして、成立し、発展した」と述べ、同書の目的を「遊びという概念を文化概念の中に組み入れることだ」³³と言い切っている。ホイジンガの「遊び」の概念は「趣味的サークル」の存在意義を示すうえで役に立つので、単なる「余暇論」と言い切れないが、少し詳しく見ていきたい。

ホイジンガは「遊び」は一つの「意味深長な機能」で、その中には「生活維持への直接的な欲求を越え」、「生の営みの中に一つの意味をつけ加える何ものかが、共に『遊んで』

いる」³⁴という。「遊び」は人間の中にも動物の中にも見出すことができる。したがって、「遊び」の成立は「ある文化段階やある世界観の形式に結びつけられるものでは決してない」³⁵のだ。ほとんどすべての抽象的なものは否定しうるが、「遊び」はできない。また、「動物は遊ぶことができる。だから、彼らはすでにその点で単なる機会仕掛け以上のものである。われわれは遊び、かつ、遊ぶことを知っている。だから、われわれは単なる理性的存在より以上のものである」³⁶。それは「(遊びが)非理性的なもの」³⁷であるからだという。

「遊び」の定義として、彼は5つの点を挙げている。これらは、調査結果をもとに「趣味的サークル」を再考するために大切である。第一に「遊び」は「自由な行為」であるという。「自由」の中には当然、参加する自由も含まれている。「命令された遊びは、もはや遊びでは」³⁸なく義務である。「遊び」は「肉体的要請によって課せられるものではなく、なおさら道徳的義務によって課せられるものでもない」³⁹。「遊び」は仕事ではないから「自由時間」に行われる。それが遊びの本質なのである。第二に、ホイジンガは「遊び」の非日常性について述べている。「『ありきたりの』生活でもなく、『本来の』生活でもない。そこから一步踏み出して独自の性格をもった活動の仮構の世界に入る」ことが「遊び」であるという。第三に、利害関係のなさを挙げている。「遊び」の目的は、「その場で役立つ物質的利益や個人的な生活上の必要を満足させるような領域を越えている」⁴⁰のである。第四に、「遊び」の限定的性格を挙げている。すなわち、「遊びはありきたりの生活から場所と継続期間によって区別され」、「この閉ざされた性格、つまり場所的、時間的限定性」⁴¹に特徴があるのである。第五に、秩序について述べている。「遊び」の中では独自の秩序が支配しているというのだ。「遊び」は秩序を創造するものであり、「遊びイコール秩序である」とホイジンガはいう。そして「不完全な世界と雑然とした生活の中で遊びは一時的で条件付きの完全さを実現する」のである。また同時に、「遊び」は「美しくあろうとする傾向」⁴²を秘めているという。

「遊び」の意義についても興味深い考察を行っている。「(遊びは)規則正しく繰り返す変化の特色をもっていた」ため、それは生活に欠くことのできないものとなっていたのである。「個人に対しては生物学的機能として欠くべからざるものであり、共同体に対しては遊びの中に含まれた意義、その重要性、その表現としての価値、それが生み出す精神的社会的きずな、つまり簡単にいえば文化機能のおかげで欠くべからざるものとなる。それは表現することと共同生活することの二つの理想を満足させる。それは食物摂取、繁

殖、保育といったような純生物学的過程の領域を越えたより高い世界に属している」⁴³。

ホイジンガのいう「遊び」を具体的に表現する集団であり、場が、まさに「趣味的サークル」なのである。つまり、そこは、ホイジンガの挙げた5つの定義、すなわち個人にとってまったく自由な行為であり、日常生活の外にあり、利害関係がなく、時間的・空間的に限定され、独自の秩序によって支配されている世界なのである。また、彼のいう通り、個人にとっても共同体にとっても欠くことのできない存在であるならば、それを研究する意義は大きいものとなる。

ホイジンガの後を受けて、カイヨワは『遊びと人間』を著した。同書を翻訳した多田によると、両者における「遊び」の定義の違いは、カイヨワが「未確定の活動」を加えた点であるという。この「未確定の活動」とは、「ゲーム展開が決定されていたり、先に結果が分かっていたりしてはならない」⁴⁴ことを指している。もう一つの違いは、ホイジンガが「賭けや偶然の遊び、たとえば、賭博場、カジノ、競馬場、富くじなどはあっさりしめ出」⁴⁵してしまったのに対して、カイヨワは「遊び」の中に物理的な利害関係を認めた点である。この他の違いとしては、「遊び」を「競争・偶然・模擬・眩暈」の4つに分類したこと、「聖なるもの」という概念を提示したことが挙げられる。前者は「遊び」の要素を述べたものである。また、後者はホイジンガにおける「聖と俗」の未分化を批判しながら、「聖・俗・遊」を一つのヒエラルキーとして捉えた。ホイジンガのアプローチが歴史・文化的であったのに対し、カイヨワのそれは近代における遊びを現実的に扱おうとした点に特徴がある。

カイヨワはホイジンガを批判することによって自らの理論を発展させているが、二人の「遊び」の定義はかなり近いものがある。いずれも、「遊び」は自由であり、非日常的であり、独自の秩序をもっていると指摘している。ただ、趣味的サークルを「遊び」と関連づけて考えるならば、ホイジンガの研究の方がより参考になる。なぜなら、「趣味的サークル」において、「競争・偶然・模擬・眩暈」や「ゲームの未確定性」などの概念は必要ないからである。

第四節 余暇と余暇研究の意義

現代における余暇とそれを研究することの意義について改めて検討したいと思う。序論で趣味的サークルを取りあげる意義については述べた。これと重なる部分が多いためここ

では重複を避けるが、余暇研究の意義としては、高齢社会⁴⁶の到来と価値観の変化によって余暇のニーズが高まることが挙げられる。高齢社会の到来は、労働から解放された時間を多くの人々に与える。この時間をどのように過ごすかは、個人にとっても社会にとっても大きな問題である。したがって、今後の余暇研究は、労働から解放された時間をいかに豊かに過ごすか重要なテーマとなる。

高齢社会の到来が物理的な側面だとしたら、価値観の変化は精神的な側面である。人々の価値観は常に変化するものである。現代において労働のみに生き甲斐を求める人は、高度成長期に比べて大幅に減少している。その原因についてここでは詳しく取りあげないが、生活が豊かになったことや労働時間の短縮、労働の専門化・細分化など、多くのことが考えられる。この変化によって、人々は労働とは別なところに人生の価値や生き甲斐を必要とするようになった。こうして労働以外の時間、すなわち余暇に焦点が当てられることになるのだ。瀬沼は5つの変化を挙げている。第一に金銭多消費から時間多消費への移行、第二に同調性から多様化への移行、第三に企業志向からコミュニティ志向への移行、第四に気ばらし型から自己開発型への移行、第五にさせられ型から自主性への移行、である。これらの変化は「多くの人々が、主体的な余暇を求めて活動をはじめていること」にその特徴があり、「大衆規模において、余暇を活用して生きがいを高める活動が動きはじめていく」⁴⁷という。つまり、現実の社会的な側面と人々の精神的な側面が同時進行的に変化し、余暇活動を求めるようになるのである。したがって、一時期停滞していた余暇研究は、再び時代の要請を受けることになるのだ。

最後に、余暇を研究する意義との関わりで、集团的余暇活動と地域社会の関係について考えてみたい。集团的余暇活動には地理的限界があり、その結果、それは地域との関わりを持つことになる。その活動を通して、人々が地域と関係を深めていくなれば、それは「新しい地域社会」という準拠集団に発展する可能性を秘めている。もちろん、昔と同様の閉鎖的、伝統的な社会の再来は想定できず、関係はより緩やかである。しかし、その活動への参加によって人々が地域に愛着を持つことができれば、今後、集团的余暇活動は十分にその役割を果たすことになるだろう。

-
- ¹ 生活科学調査会編『余暇—日本人の生活思想』ドメス出版、1961年、「はしがきに代えて」。
 - ² 前掲書、同。
 - ³ 前掲書、p.180。
 - ⁴ 内閣総理大臣官房審議室『娯楽に関する世論調査』大蔵省印刷局、1957年、「はしがき」。
 - ⁵ 総理府青少年対策本部『青少年の余暇に関する研究』、1974年、p.5、出版元に関する記述なし。
 - ⁶ 前掲書、p.8。
 - ⁷ 瀬沼克彰『余暇と生涯教育』学文社、1979年、p.3。
 - ⁸ 瀬沼克彰『余暇の社会学』文和書房、1977年、p.243参照。
 - ⁹ 瀬沼克彰『余暇とサラリーマン』学文社、1979年、p.20。
 - ¹⁰ 瀬沼克彰『余暇と生涯教育』学文社、1979年、p.243。
 - ¹¹ 加藤秀俊『余暇の社会学』PHP研究所、1984年、p.257。
 - ¹² 前掲書、p.258。
 - ¹³ 前掲書、「まえがき」。
 - ¹⁴ 石川弘義『余暇の戦後史』東京書籍、1979年、p.12。
 - ¹⁵ 前掲書、p.13。
 - ¹⁶ 前掲書、p.14。
 - ¹⁷ 前掲書、p.16。
 - ¹⁸ 前掲書、p.17。
 - ¹⁹ 前掲書、p.20。
 - ²⁰ 前掲書、p.92。
 - ²¹ 岡田至雄『レジャーの社会学』世界思想社、1982年、p.6。
 - ²² 前掲書、p.8-9。
 - ²³ 前掲書、p.9。
 - ²⁴ 前掲書、p.10。
 - ²⁵ 前掲書、p.11。
 - ²⁶ 前掲書、p.12。
 - ²⁷ 前掲書、p.14。
 - ²⁸ 前掲書、p.14。
 - ²⁹ 前掲書、p.46。
 - ³⁰ J.デュマズディエ著、中嶋巖訳『余暇文明へ向かって』東京創元社、1972年、p.19。Joffre Dumazedier, *Vers une civilisation du loisir?*, Éditions du Seuil, 1962.
 - ³¹ 前掲書、p.34。
 - ³² 前掲書、p.37。
 - ³³ J.ホイジンガ著、里見元一郎訳『ホモ・ルーデンス』河出書房新社、1989年、「まえがき」。J.Huizinga *Verzamelde Werken, Homo ludens, Proeve eener bepaling van het spel-element der cultuur*, 1938.
 - ³⁴ 前掲書、p.12。
 - ³⁵ 前掲書、p.15。

36 前掲書、p.15-16。

37 前掲書、p.16。

38 前掲書、p.21。

39 前掲書、p.22。

40 前掲書、p.23。

41 前掲書、p.25。

42 前掲書、p.26。

43 前掲書、p.24。

44 R.カイヨワ著、多田道太郎、塚崎幹夫訳『遊びと人間』講談社、1990年、p.349。Roger Caillois, *Les jeux et les hommes*, édition revue et augmentée. Gallimard, 1967.

45 前掲書、p.32。

46 高齢者の数が高止まりしている社会を指し、「高齢社会」に変化する過程にある「高齢化社会」とは区別したいと私は考える。

47 瀬沼克彰『現代余暇の構図』大明堂、1983年、p.22。

I部 おわりに

第一章から第三章までの考察を終えて

I部では小集団、自発的参加型集団、余暇活動について考察を行ってきた。これらは趣味的サークルを捉えるためのアプローチであるが、同時に、**すべて趣味的サークルを構成する重要な三要素を示している**。それぞれは各章で定義づけを行ってきた。したがって、ここではそれらをもとに改めて趣味的サークルを定義する。趣味的サークルとは「自発的な参加によって成り立つ、余暇活動を行う小集団」ということになる。確認になるが、純粋な余暇活動は営利を含まないし、「自発的な参加」とはその集団への所属も脱退も個人の自由であることを示している。

これら3つの特徴を本稿で取りあげた理由は、それが趣味的サークルにとって重要であるからというだけではない。小集団と自発的参加型集団、自発的参加型集団と余暇活動、余暇活動と小集団、という組み合わせによる研究がこれまであまり行われてこなかったからである。小集団研究は盛んに行われたが、非常にマクロ的なアプローチか、2、3人を被験者とした心理学的アプローチなどがそのほとんどである。余暇活動を自発的参加型集団という切り口から捉えたものもなければ、小集団と余暇活動とを直接関連づけた研究もみられない。したがって、趣味的サークルを小集団として、自発的参加型集団として、また余暇活動として複合的に理解しようとする点に、本稿の意義があると私は考えている。

個人的余暇活動と集団的余暇活動

ここで、個人の趣味活動と集団的余暇活動について触れておく。余暇活動は活動内容と人の集まり方によって「個人的な余暇活動」、「集団でないとできない余暇活動」、「個人と集団のいずれでも可能な余暇活動」の3つに類型化することができる。そのうち、後ろの2つが「集団的余暇活動」である。例えば、今日、映画鑑賞などは比較的個人的な余暇活動であるといえよう（かつて「映サ」と呼ばれるものが数多く存在していた時代もあったが）。ガーデニングなども基本的には個人の活動である。集団でないと行えない活動とは、「必要人数」が存在する余暇活動である。野球などの球技がこれに当てはまる。この概念については第七章で改めて検討する。個人でも集団でも可能な余暇活動とは、活動する上で「必要人数」の影響を受けず、また集団化することで何らかのメリットが生じる活動である。「何らかのメリット」とは、例えば規模の経済が働いたり、成員の満足度が上がった

り、活動上の安全性が高まったりすることが挙げられる。具体的な活動としては、エアロビクス（講師への謝礼におけるスケール・メリット）、登山（成員の安全性）、将棋（成員の満足度）、などが考えられる。今後の社会において、「集団でないとできない余暇活動」と「個人と集団のいずれでも可能な余暇活動」、すなわち「集団的余暇活動」に私が期待していることは言うまでもない。

集団的余暇活動と生活の満足度

これについてはⅡ部で趣味的サークルへの調査の結果として詳しく述べるが、ここでは、なぜ集団的余暇活動が生活の満足度を高めると考えられるのかについて触れておきたい。集団的余暇活動は趣味を行う活動であることと同時に、人とのふれあいの場でもある。敢えて集団で活動する以上、その中で満足感が得られなければその意味はない。では、どうして人とのふれあいの中で満足度が高まっていくのだろうか。それは「他人からの認知」に関係がある。これは自分のことを人から理解してもらうことでもあるし、またほめられることでもある。井原は人との交流について次のように述べている。「人間には『ふれあい欲求』があるが、『ふれあい』とは『人間同士の評価のしあっこ』といってよい。「人間が評価のしあっこをしていると感じられれば、この欲求は満たされるのである」¹。そして、人から認めてもらう場として集団的余暇活動が存在するのである。「生活者一万人アンケート調査」を実施した野村総合研究所社会・産業研究本部によると、「趣味は『認知欲求』を満たすための手段、すなわち、人との交流機会を持つための手段として重要」であり、この時の集団について、「交流の幅は必ずしも大きい必要はなく、必要最小限の大きさでよい。気の合う仲間同士でつきあうことができれば『認知欲求』は満たされるのである。趣味を通じて自分の好きな小集団が形成され、その中で『認知欲求』が満たされることが生活の満足度につながる」²という。つまり、集団的余暇活動が行われる理由は、人のもつ「認知欲求」を満たすためであり、そのために趣味活動を行う小集団が形成されるのである。そして、その「認知欲求」を満たすことができれば、生活の満足度も必然的に高まるものと考えられるのである。

¹ 井原哲夫『「豊かさ」人間の時代』講談社、1989年、p.27。

² 野村総合研究所社会・産業研究本部『変わりゆく日本人』野村総合研究所、1998年、p.206。

Ⅱ部 社会調査

Ⅱ部 はじめに

Ⅱ部では、趣味的サークルを対象とした社会調査の概要と分析結果についてみていく。仮説の検証を調査結果とは独立させた関係で、流れが一部複雑になっている。あらかじめ簡潔に整理しておく。Ⅱ部における各章は以下のような構成になっている。

第四章 社会調査の方法と仮説

第一節 調査の概要

第二節 調査対象とするジャンルの選択について

第三節 質問設置の理由について

第四節 今回の調査の信頼性について

第五節 調査のための仮説

第五章 調査結果1－仮説の検証

第一節 総理府調査との比較1－フェイス・シート

第二節 仮説の検証

仮説1 趣味的サークルの参加者は、参加していない人よりも生活の充実感が高い。

仮説2 参加する趣味の選択は学生時代のサークルの影響を強く受ける。

仮説3 男性と女性では趣味的サークルへの参加目的が異なる。

仮説4 集団の公式度によって参加者の目的や満足度が異なる。 <類型化1>

仮説5 「個人的趣味」の集団よりも「集合的趣味」の集団の方が、満足度が高い。
<類型化2>

仮説6 集団的余暇活動は市民社会の形成に影響する。

第六章 調査結果2－調査結果の概要

第一節 総理府調査との比較2－調査項目

第二節 フェイス・シートと調査項目とのクロス集計

第三節 調査項目同士のクロス集計

第七章 調査結果3－類型化による分析と調査結果のまとめ

第一節 集団の非公式活動 <類型化3>

第二節 男女混合サークルと単一性サークル <類型化4>

第三節 音楽サークルと集合的スポーツサークルとの比較 <類型化5>

第四節 調査結果からみた趣味的サークル

総理府調査とのフェイス・シートの比較は、仮説の検証を行う必要上、第五章の冒頭に置かれている。調査項目の比較は第六章の第一節に載せた。また、分析上、今回の調査対象の団体を5つに類型化したが、うち2つは第五章の「仮説の検証」で扱い、残りの3つは第七章で取りあげた。第五章で取りあげられなかった重要な結果は、第六章に「調査結果の概要」として載せた。なお、調査票とすべての調査結果は巻末に付した。

第四章 社会調査の方法と仮説

この章では、平成10年の8月から9月にかけて行った社会調査の概要と方法について提示する。また、調査を行う際に立てた仮説についても述べる。

第一節 調査の概要

- ・ 調査の目的 「趣味的サークルの参加者は生活の満足感が高い」という仮説をはじめ、ほか5つの仮説を証明する。また、同時に参加者の意識調査も行い、総理府広報室実施の「国民生活に関する世論調査」、及び同室実施の「社会意識に関する世論調査」と比較・検討する。さらに、趣味活動のジャンルと集団の公式度によって、成員の満足度がどのように異なるかを考察する。
- ・ 調査項目 所属するサークルについての現状や意識（オリジナルの質問項目）
生活一般に関する現状や意識（総理府調査と同一の質問項目）
- ・ 調査対象
 1. 娯楽、余暇活動を目的とする
 2. 営利目的でなく、また営利組織と関わりを持たない
 3. 集団の所属に関して強制力を持たない
 4. 中心メンバーが社会人であること（学生のサークルでないこと）
 5. 2桁以上の成員数で成り立っている
 6. 静岡市に定例の集会所をおく以上の条件を満たす社会集団
- ・ 調査時期 平成10年8月2日から平成10年9月28日まで
- ・ 調査方法 現地にて実施・回収、及び留置法
- ・ 調査者 中溝一仁
- ・ 対象団体数 25団体
- ・ 回答数 391
- ・ 有効回答数 378
- ・ 回収率 78.2%

第二節 調査対象とするジャンルの選択について

まず、調査対象とする集団を2つのカテゴリーに大別した。一つはスポーツ系の趣味で、もう一つは文化系の趣味である。その中で、いずれも集団的に行われる趣味活動であり、かつ活動人口の多いジャンルを基本的な抽出の基準とした。そして、それぞれから5つのジャンルを選択し、計10のジャンルを調査対象とした。活動人口の多少については総務庁統計局の「生活基本調査」¹を活用した。なお、各ジャンルからの抽出は3団体を基本としたが、諸事情により2、もしくは1団体になったジャンルもある。以下に選択した趣味的サークルのジャンルと選択理由を示した。

調査対象ジャンル 文化系 1. 将棋

総務庁の調査結果から文化系の集団として活動人口が多かったこと、また2人でもできる活動を集団で行うことに興味を抱き対象とした。静岡市の公民館で活動するすべての団体が入力されているオンライン端末機により抽出し、将棋団体5つのうち、活動人数が2桁ない1団体を除き、4団体より無作為抽出で3団体を選択した。

調査対象ジャンル 文化系 2. コーラス

「将棋」より活動人口は少ないが、必ず集団的に活動するので調査対象とした。調査対象の団体の選定にあたっては、「静岡市合唱連盟」のリストを入手し、男声合唱(2団体)、女声合唱(9団体)、混声合唱(8団体)の3つに分類し、学生と企業のサークルを除いたうえで、それぞれから無作為に1団体を抽出、計3団体を選んだ。

調査対象ジャンル 文化系 3. 器楽演奏

ここでの「器楽演奏」は「オーケストラ」と「吹奏楽」のことを指している。総務庁の活動人口表によると、「楽器の演奏」という項目の活動人口は非常に多い。しかし、この中でどのくらいの人が集団として楽器を演奏しているかは分からない。ただ、コーラスと同様、文化系の趣味としては必ず集団で活動し、また集団の凝集性も必要とされるので調査対象のジャンルとした。団体の選定は、このジャンルの活動団体が少なく、また全体として組織化していなかったため、独自に団体を探したうえで、4団体の中から「オーケストラ」と「吹奏楽」をそれぞれ一つずつ、計2団体を選択した。なお、「器楽演奏」は一つの団体の活動人数が多いため、他のジャンルとのバランス上、2団体とした。

調査対象ジャンル 文化系 4. バードウォッチング

このジャンルは、総務庁の数値からみると活動人口はあまり多くない。また「器楽演奏」と同様、その中でどのくらいの人が個人的に活動し、また集団で活動をしているのかも分からない。しかし、個人でできる趣味活動を敢えて集団で行っているため、調査対象とした。調査対象の団体は、「A会静岡支部」しか静岡市で活動していなかったため選択の余地がなく、その団体に協力を依頼した。

調査対象ジャンル 文化系 5. 社交ダンス

総務庁統計局の平成9年調査によると、社交ダンスの活動人口は「バードウォッチング」よりも若干少ないことになっている。しかし、映画の影響もあり近年の「社交ダンス」ブームは着実にその活動人口を延ばしている。したがって、この時の数字よりも現在はより多くなっていることが予想される。また、「バードウォッチング」と異なり、表れた数字のほとんどが何らかの集団に属していると考えられる。以上の理由により「社交ダンス」を調査対象のジャンルとした。具体的な抽出はオンライン末端を利用した。公民館で活動を行う団体は84あり、この中から無作為抽出で3団体を選んだ。

スポーツ系の抽出にあたっては、ジャンルによって男女の参加率の差異が大きいため、選択にあたり最終的にバランスがとれるように考慮した。基本的には文化と同様、活動人口が多く、集団で活動を行うジャンルを調査対象として選んでいる。

調査対象ジャンル スポーツ系 1. 野球

圧倒的な活動人口を持つ競技であるため調査対象とした。しかし、キャッチボールを含みソフトボールを除く、という総務庁の調査特性により、活動人口の大半は男性であった。具体的な抽出は、静岡県野球連盟、静岡市野球連盟と辿っていき、加盟チームのリストを入手。そこからレベル別に2チーム、またインターネット上に情報を公開していたチームから連盟に加盟していないチームを1つ抽出した。静岡市野球連盟に加盟するチームは6つのレベルをすべて合わせて130チームあった。その中で企業の名前を冠するチームを除外し、Aクラス（最強）から1チーム、Bクラス（中程度）から1チームを無作為抽出し、調査を行った。

調査対象ジャンル スポーツ系 2. バレーボール

球技の活動人口としては野球について2位の種目である。それだけでも取りあげるのに十分な理由であるが、野球が活動人口のほとんどを男性が占めるのに対し、バレーボールは男女の割合こそ拮抗しているが、他のスポーツに比べ女性の参加が非常に多い。したがって男女のバランスからしても取りあげる価値があった。また、実際に静岡市の加盟チーム数から見ると、圧倒的に女性のチーム数が男性のそれを上回る。したがって、対象団体は女性のチームから2団体、男性から1団体を調査対象として無作為抽出した。抽出用のリストは、静岡県バレー協会を経て静岡市バレー協会から入手した。バレー協会ではチームが3つのグループに分けられ、一般男子(19 チーム)、一般女子 (8 チーム)、家庭婦人 (136 チーム) から成っている。家庭婦人のグループはレベル別に9段階に分かれている。また学区制を取っており、基本的には参加者が自らの居住地区の学区を越えて他のチームに所属することが許されておらず (メンバー登録できない)、硬直的な仕組みといえよう。調査は企業の名を冠するもの (そのほとんどは一般男子である) を除き、各グループから1チームずつを選んだ。なお、一般男子と一般女子ではネットの高さが異なり、一般女子と家庭婦人ではボールの大きさが異なっている。

調査対象ジャンル スポーツ系 3. テニス

男女の参加の割合が等しいスポーツとしてテニスを選んだ。また少人数でも可能だが、敢えて集団を形成していることもその理由である。全国テニス協会、静岡県テニス協会を経て、静岡市テニス協会から加盟団体のリストを入手した。しかし、企業の名のついたチームを除き、無作為抽出を行い調査の依頼をしたところ、コートを持ったクラブチームやスポーツ用品店が運営主体の団体がほとんどで、そのリストからの抽出を断念した。調査対象は、自発的に設立され、営利行為が含まれない団体でなければならないため、静岡市内のクラブチームに所属する知人から、自発的な任意団体3つと、そのうち1団体の代表者1名の紹介を受けた。この結果、2団体を調査することができたが、残り1団体は協力してもらえなかった。

調査対象ジャンル スポーツ系 4. エアロビクス

球技でないスポーツを調査対象に含めたかったため、ボールを使わずに集団で行う可能性のあるものを検討した。その中でより活動人口が多かったものがエアロビクスである。

これはそのほとんどを女性が占めているが、次に挙げる登山が、比較的男性が多いので、それと対応させて考えた。登山にも共通するが、まったく一人でも活動できるのに集団化するのは何らかのメリットがあるからと予想された。結果からいうと、多くの場合、エアロビクスは「先生（講師）」のつくお稽古事であり、そのために集団化するという事情があった。調査対象の選定は公民館のオンライン端末機を利用した。12団体の中から人数が2桁に満たない3団体を除外し、無作為抽出を行った。最初の2団体には諸事情により断られたため再び無作為で選んだが、結果的に選択の余地が減ってしまった。

調査対象ジャンル スポーツ系 5. 登山

エアロビクスと同様、球技でなく、ある程度の活動人口を持つものとして登山を選んだ。これも個人でも集団でもできるマージナルなスポーツと考えたが、実際には「一人だと危険」という理由の存在が調査結果から分かった。団体の選定は日本山岳協会、静岡県山岳連盟を経て、静岡市山岳連盟から加盟団体のリストを入手した。団体数は18で、まずその中から企業の名を冠するものを除いた。その後、無作為に団体を選び代表者に連絡を取ったが、実質的な活動を行っていない団体、協力していただけない団体や私の調査対象に向いていない団体（定例の集会がない等）、また活動の特性から実際に調査を行うことが非常に困難な団体などにあたり、実質的には選択肢が全くなく、そのリストから2団体を調査するのがやっとであった。そこで、公民館の末端で調べたところ、集会所として公民館を利用している団体が2つあり、そこから1団体に協力を依頼した。その結果、計3団体を調査することができた。

第三節 質問設置の理由について

質問票は巻末付録に付す。

1. 各集団の成員個人に対する調査（個人用）

オリジナルの質問項目

Q1 この団体は入団、退団が容易ですか。

この質問はその集団の成員が、自らのグループの自由度についてどのような考えをもっているかを調べるものである。万一、この回答の結果、出入りの自由が著しく厳しい場合、

その集団は私の想定する「趣味的サークル」とは言い難いものとなる。

Q 2 この団体は、あなたに対して通常の活動への出席を促しますか。

これは集団規範に関する問いで、その集団が各成員に与えるプレッシャーを測るものである。その集団における公式度の指標の一つと考えることもできる。

Q 3 この団体は非公式（定例の集まりや練習以外、一部の人でも可）に集まって、何かをすること（例えば、飲み会やピクニック、旅行など）がありますか。

これは集団がどの程度、目的以外の活動を行っているかを問うものである。代表者の質問にも同様のものがあるが、これを各個人に問う意味はQ 4の質問を行うために必要だからである。

Q 4 あなたはその活動に参加しますか。(SQ)

この質問は、成員がその集団におけるインフォーマルな活動に、実際どの程度参加をしているかを尋ねるものである。その意義は、成員の目的以外の活動が満足度や集団に対する考え方にどのような影響を及ぼすかを知ることにある。

Q 5 具体的にはどのようなことをしますか。(SQ)

これは、全体でより多くの活動を正確に把握することにその目的がある。

Q 6 あなたはこの団体に連帯感があると思いますか。

この質問の目的は、成員が自ら所属する集団に対してどの程度、連帯感があると考えているかを捉えるためのものであり、結果的にその集団の紐帯の強さを知ることができる。つまり、この質問はその集団の連帯感の強さを調べるためのものである。

Q 7 それはなぜですか。自由にお書きください。(SQ)

これは、連帯感を感じる理由が何によるものなのか、またジャンルによっては特別な理由があるのか、などを探るためのものである。

Q 8 あなたはこの団体に入って何年になりますか。

Q 8からQ11までは集団帰属に関するフェイス・シートの項目である。Q 8は所属年数の長短によって、満足度や集団との関わり方に違いがあるかを調べるために使用する。

Q 9 この団体に入るきっかけとなったものは何ですか。(MA)

参加者の自由意志によって成り立つ集団への加入は、どのようなきっかけに基づくのかを知るためのものである。

Q10 あなたはこの団体の役職などに就いていますか。

Q11 具体的にはどのような役職に就いていますか。(SQ)

Q10 とQ11 は、役職に就くことが満足度や集団との関わりに影響があるかを調べるためのものである。

Q12 あなたはこの団体の活動に積極的に参加していますか。

この質問は、生活の満足度、及び集団の連帯感に関する考え方と関連があるかを調べるためのものである。

Q13 あなたはこの団体の集まりの前後によく団の人と話をしますか。

Q14 あなたはこの団体の中に個人的なつきあいのある人が何人いますか。

Q13 とQ14 は、第一にその集団の凝集性、第二に連帯感との関わり、第三に生活の満足度との関係を知ることを目的にしている。

Q15 あなたはこの団体に所属していて、どんなとき楽しいと思いますか。(MA)

これはその集団が全体としてどのような活動によって成員に満足感を与えているかを知ることや、その集団の活動の中心を知るうえで役に立つ。

Q16 あなたがこの団体に所属していて不満に思うことは何ですか。(MA)

成員の不満が満足度や連帯感に関する考え方とどのような影響を与えているのか、また与えていないのかを知ることとその目的がある。

Q17 この団体に参加することによって、あなたは生活全体の充実感が高まっていると思

いますか。

これは、今回調査における重要な質問項目の一つである。趣味的サークルへ所属する目的は、基本的に、生活の満足度を高めるためにあると考えられる。したがって、この回答が高くなることは容易に予想される。敢えて行う意義は、一つにはこの仮説を証明すること、二つには集団の公式度や、それ以外の何らかの要因によって違いが生じていないかを検証することにある。

Q18 あなたがこの団体に所属している目的として、次の項目はどれだけ重要ですか。

1. 豊かな人間関係・仲間との交流
2. 技術・能力の向上
3. 趣味に関する情報交換
4. 自由時間の有効活用
5. 生活に変化を与える
6. 異性との出会い
7. 同じ趣味を持つ仲間との出会い
8. 活動そのもの
9. その他の目的

以上の質問群は、人間関係（1, 6, 7）、趣味活動（2, 3, 8）、その他（4, 5, 9）の3つの領域について尋ねている。質問の順序はキャリアオーバー効果を考慮して並べてある。集団に所属する目的を尋ねることは、成員にとっての趣味的サークルの位置づけを知るうえで重要である。

Q19 あなたはなぜこの趣味を個人でなく、集団で行うのですか。(MA)

質問の言葉通り、集団化する意義を尋ねている。個人ではできない活動以外は、「集団で行うこと自体に意味がある」とする私の考えを検証するためのものである。

Q20 この団体で行っている趣味活動は、かつて学生時代にやっていたことがありましたか。(MA)

これは、趣味活動のジャンルの選択が学生時代の経験に因るという仮説を検証するための質問である。

Q21 この団体以外にも、あなたは趣味の団体に所属していますか。

Q22 あなたはこの団体以外で、いくつ趣味の団体に所属していますか。(SQ)

Q23 あなたの所属する趣味の団体をすべてあわせると、通常の集まりは週に何回、何時間くらいありますか。

Q24 それらの団体ををすべてあわせると、会費は月にいくらですか。ただし、定期的にかかる教材費、材料費などの実費は含め、ボールやユニホームなどの個人的な道具は除きます。

これらの質問は、趣味的サークルに所属する人のそれ以外の活動やコスト等を把握し、他の質問項目との関連を調べようとするものである。

Q37 あなたはもっとも最近行われた国政選挙（平成10年7月12日投票、参議院）の投票に行かれましたか。また、投票に行かれなかった方はその理由もお答えください。

質問の順番が異なるのは、内容的な整合性を取るためである。この質問は、趣味的サークルに所属する人が、どれだけ現実社会に関心を持っているかを知るためである。趣味に没頭していて社会問題にまったく関心を示さないのか、それとも趣味的サークルは市民社会形成の一助となるのかを考察することができるであろう。また、投票に行かなかった人に対してその理由を尋ねたのは、趣味活動を行っていたために投票に行けなかったり、用事で行けなかったなどの理由を区別するためである。

2. 総理府調査との比較用質問項目

質問の後に（社会意識）と記してあるものは総理府広報室の「社会意識に関する世論調査」から採用した質問項目である。その他は同室の「国民生活に関する世論調査」からのものである。

Q25 あなたは、全体として、現在の生活にどの程度満足していますか。

今回、比較を行ううえでもっとも重要な質問である。趣味的サークルが参加者の満足度を押し上げているかどうかを知ること、その役割を規定することができよう。

Q26 次の生活のそれぞれの面では、どの程度満足していますか。

(1) 所得・収入

(2) 自動車、電気製品、家具などの耐久消費財

(3) レジャー・余暇生活

上の質問と同様、満足度を尋ねた質問である。これらを比較することによって、具体的に生活のどの側面が生活一般の満足度を高めているか（もしくは、関連しているか）を知ることができる。

Q27 あなたは、日頃の生活の中で、どの程度充実感を感じていますか。

Q26 の質問に内容的に近い項目である。双方が似た結果を出せば、調査の信頼性が向上することになる。

Q28 あなたが日頃の生活の中で、充実感を感じるのは、主にどのような時ですか。(SQ)

趣味的サークルの参加者が、余暇によってどの程度充実感を得ているかを調べるための質問である。

Q29 あなたは、日頃の生活の中で、悩みや不安を感じていらっしゃいますか、それとも、悩みや不安を感じていませんか。

これにより、趣味的サークルへの参加が悩みや不安を感じることに影響するか否かを知ることができる。

Q30 あなたは、ふだん、仕事や家事、学業などに精一杯でゆとりがありませんか、それとも、休んだり、好きなことをしたりする時間的なゆとりがありますか。

余暇活動を行う客観的な第一の条件は「時間」である。これを主観的なレベルで総理府調査の結果と比較することにこの質問の目的がある。

Q31 お宅の生活の程度は、世間一般からみて、この中ではどれに入ると思いますか。

(上、中の上、中の中、中の下、下)

いわゆる「一億総中流意識」を導く質問である。意識を尋ねる質問であるが、フェイス・シートの世帯収入を補完する役割もある。

Q32 今後の生活の仕方として、次のような2つの考え方のうち、あなたの考え方に近い

のはどちらでしょうか。

(1) 物質的にある程度豊かになったので、これからは心の豊かさやゆとりのある生活をすることに重きをおきたい

(2) まだまだ物質的な面で生活を豊かにすることに重きをおきたい

「心の豊かさ・ものの豊かさ」について尋ねた質問である。余暇活動は心の豊かさに関連している。比較の結果、何らかの差異が生じることを予想してこの質問を取りあげた。

私はこれを重要な項目の一つと考えている。

Q33 あなたは、今後の生活の仕方として、貯蓄や投資など将来に備えることに力を入れたいと思いますか、それとも、毎日の生活を充実させて楽しむことに力を入れたいと思いますか。

(1) 貯蓄・投資など将来に備える

(2) 毎日の生活を充実させて楽しむ

余暇活動を行っている人が、そうでない人よりも「今を楽しむ」ことにより重きを置いていることは想像に難くない。この予想を検証する必要があるだろう。

Q34 あなたは、あなた自身の生き方、考え方についてどのように考えていますか。

(1) できるだけ新しいものを取り入れ、どんどん改革していく方だ

(2) 経済的に恵まれなくとも、気ままに楽しく暮らせればよい

(3) 妥協を排し、自分の信念はできる限り貫くよう努力する方だ

(4) 自分の願望にできるだけ忠実に生きたい

Q35 国民は、「国や社会のことにもっと目を向けるべきだ」という意見と、「個人生活の充実をもっと重視すべきだ」という意見がありますが、あなたのお考えは、このうちどちらの意見に近いですか。(社会意識)

(1) 国や社会のことにもっと目を向けるべきだ

(2) 個人生活の充実をもっと重視すべきだ

Q36 あなたは、日頃、社会の一員として、何か社会のために役立ちたいと思っていますか。それとも、あまりそのようなことは考えていませんか。(社会意識)

(1) 思っている

(2) あまり考えていない

Q38 あなたは、収入と自由時間との関係について、収入は現在のままでも、自由時間をもっと増やしたいと思いますか、それとも、自由時間は現在のままでも、収入をもっと増やしたいと思いますか。

- (1) 収入は現在のままでも、自由時間をもっと増やしたい
- (2) 自由時間は現在のままでも、収入をもっと増やしたい

Q39 人は何のために働くことが大切だと思いますか。

- (1) お金を得るために働く
- (2) 社会の一員として、務めを果たすために働く
- (3) 自分の才能や能力を発揮するために働く
- (4) 生きがいを見つけるために働く

Q40 仕事と余暇について、次のような考え方のうち、あなたの考え方に最も近いのはどれでしょうか。

- (1) 仕事より余暇に生きがいを求める
- (2) どちらかといえば、仕事より余暇を楽しむ
- (3) 仕事と余暇のどちらにも力を入れる
- (4) どちらかといえば、余暇より仕事に力を注ぐ
- (5) 仕事に生きがいを求めて、全力を傾ける

Q34 からQ40 は、趣味的サークルの参加者のパーソナリティを調べるためのものである。つまり、趣味的サークルに所属する者は、そうでない者と考え方のうえで差異があるのかを検証する。働く目的や仕事と余暇の関係などに、有為な差が認められることが予想される。

第四節 今回の調査の信頼性について

1. 調査対象の選出にあたって

本調査は「趣味的サークル」に所属している人を対象としたため、純粋な無作為抽出は不可能であった。しかし、調査の信頼性を高めるため、対象の団体を抽出するにあたっては、無作為抽出を旨として行った。したがって、選択肢のなかったバードウォッチングを除いて、基本的には無作為で団体を抽出している。つまり、本調査は個人を無作為で抽出していないが、団体は無作為に選ばれている。

2. 総理府調査との比較にあたって

本調査の項目の中に、総理府の調査結果と回答を比較するために用意した質問が多数ある。質問の内容はまったく同一であるが、方法上、異なる点がいくつかある。第一に、総理府が対面調査であるのに対し、本調査は集団調査と留置法の併用になっている。第二に、調査を行った時と場の違いである。比較に用いた総理府調査の結果は平成9年5月に行われたものであるが、本調査は平成10年8月から9月にかけて行ったものである。また、本調査は静岡市を中心とした一地域（団体の所在地は静岡市に限ったが、成員は静岡市に在住とは限らない）に限定して行われたものである。

第二の点について、この地域が全体の代表性をもつかは確定できないが、総理府調査の結果を見る限り、全国と東海ブロックとの間に明確な差はなく、「満足度」の結果についても高い項目とそうでないものがある。今回の比較に用いる項目について大きな違いは認められない。

3. 「満足度」の比較にあたって

本調査の仮説は次節で述べるが、基本的に「趣味的サークルに所属している人は、そうでない人よりも生活の満足度が高い」という立場に立っている。したがって、比較のポイントは「満足度」ということになるが、上述のように総理府の調査と本調査はプロセスにおいて異なる点がある。だが、この比較の有用性を高める2つの資料がある。

第一に、「生活の満足度」と経済状況との関連である。平成9年から10年にかけて経済の成長率やGDP、失業率、年間所得など、経済状況を示す指標で向上したものは何もない。「生活の満足度」はその世帯の収入にある程度、連動していることが考えられる。事実、本調査においても、「収入・所得」に満足している人のほとんどは「生活の満足度」にも満足と答えている。総理府調査の「生活の満足度」を年ごとに追っていても、経済状況に関連していることが窺える。例えば、第一次オイルショックの起こる前年、昭和48年1月調査では現在の生活に満足であると答えた人の割合は60.5%であったのに対し、昭和49年11月の結果では50.4%へと急激に満足度が落ち込んでいる。したがって、本調査における満足度は、前年より低くなっていることはあっても高くなっていることは考えられない。

第二に、他の類似調査を参考にすることができる。連合が組合員を対象に平成10年6月に行った生活実態に関する調査²がある。1988年から隔年で実施しているもので、平成

10年は加盟組合員44,000人を対象に行い、25,029人から回答を得ている。内容は、年収については不満が71.3%、満足が27.8%と前回96年調査に比べ不満が2.3%増えている。生活の満足度では「非常に不満」、「やや不満」の合計60.2%（前回は36.4%）に対し、「十分満足」、「まあまあ満足」の合計は38.8%（前回は62.7%）。この結果が示すように、2年前から生活の満足度が格段に低下している。2年前の結果について総理府のものと比較してみると、総理府調査における生活の満足度は69.9%だったのに対し、連合の調査結果は62.7%である。これは、連合の調査結果の方が満足度が低く出てくる可能性を示している。しかし、仮にその差（7.2%）を今回行われた連合の調査結果に加えたとしても、生活の満足度は46.0%で、比較に用いている平成9年調査の66.5%よりも大きく落ち込んでいゝる。したがって、仮に私が今回実施した調査と、平成9年の総理府の調査結果における満足度が同じだったとしても、仮説がある程度立証できることになる。

第五節 調査のための仮説

調査を行う前に、私は以下のような仮説を立てた。

【参加者に関する仮説】

仮説1 趣味的サークルの参加者は、参加していない人よりも生活の満足度が高い。

仮説2 参加する趣味の選択は学生時代のサークルの影響を強く受ける。

仮説3 男性と女性では趣味的サークルへの参加目的が異なる。

【集団に関する仮説】

仮説4 集団の公式度によって参加者の目的や満足度が異なる。

仮説5 「個人的趣味」の集団よりも「集会的趣味」の集団の方が、満足度が高い。

仮説6 集団的余暇活動は市民社会の形成に影響する。

「仮説1」は総理府の結果と比較することで証明が可能になる。「仮説2」、「仮説3」はオリジナルの質問項目の中で読みとれ、「仮説4」、「仮説5」は類型化と集団相互の比較によって測ることができる。「仮説6」に関しては、総理府調査との「考え方」に関する質問の比較と、直前の選挙の投票行動によって検証を行う。

¹ 総務庁統計局「平成8年社会生活基本調査」平成8年10月1日現在で実施。約9万9千世帯に居住する10歳以上の世帯員約27万人を対象とする。

² 連合の調査結果は「日本経済新聞」1998年10月29日朝刊を参照。

第五章 調査結果1－仮説の検証

この章では今回行った趣味的サークルに対する調査の結果に基づき、前章で提示した仮説の検証を行う。今回の調査では調査対象とする団体の選定にあたって無作為抽出を基本としたが、一都市における趣味的サークルを対象としているため純然たる無作為ではない。したがって、検定結果は「参考」ということになる。また、分析する上で「有為な差」とは検定による信頼度が95%以上のものをいうこととする。

第一節 総理府調査との比較1－フェイス・シートの比較

仮説の検証を行う前に、まず2つの調査結果のフェイス・シートの比較を行わなければならない。フェイス・シートは基本的に「国民生活に関する世論調査」¹と同じ項目を尋ねた。なお、ここでは仮説を検証する際に重要となるものだけを取りあげた。今回の調査の詳しい結果は巻末に付してある。

1. 性別

	今回調査	総理府調査
男性	52.4	46.3
女性	47.6	53.7

(数字は%、以下同じ)

2. 年齢²

	今回調査	総理府調査
20～24歳	7.3	5.1
25～29歳	13	6.4
30～34歳	9.8	7.7
35～39歳	8.2	9.3
40～44歳	9.5	9.8
45～49歳	6.5	12.6
50～54歳	9.5	10.4
55～59歳	13	9.8
60歳以上	23.1	28.7

3. 世帯収入（有効回答による再計算）

	今回調査	総理府調査
200万円未満	4.4	7.5
200～400万円未満	18.7	20.6
400～600万円未満	20.6	25
600～800万円未満	17.1	21.7
800～1,000万円未満	16.5	11.3
1,000～1,200万円未満	11.1	6.1
1,200万円以上	11.4	7.8

総理府の調査では1000万円を超える層が13.9%に対して、今回の調査では**22.5%**と高い数値を示している。したがって、単純に生活の満足度だけを比較する場合など、世帯収入の違いを考慮する必要がある。

4. 配偶者

	今回調査	総理府調査
既婚・配偶者あり	65.9	80
既婚・配偶者離死別	4.2	8.6
未婚	26.2	11.3

今回の調査対象とした趣味的サークルには、多くの未婚者が参加していることが分かる。一見すると子供の小さい「子育て層」の参加が少ないためかと思われがちだが、子どもが「いる」と答えた人の中で10.3%が未就学児をもつ人だった。

第二節 仮説の検証

この節では前章で掲げた6つの仮説について、一つひとつ検証を行っていく。

仮説1 趣味的サークルの参加者は、参加していない人よりも生活の満足度が高い。

この仮説を検証するために、まず生活の満足度について総理府の結果との比較を行う。

「あなたは、全体として、現在の生活にどの程度満足していますか。」(Q25)

	今回調査	総理府調査
満足している	21	9.8
まあ満足している	56.6	56.7
やや不満だ	11.3	22.8
不満だ	4.6	7.8
どちらともいえない	5.1	2.5
わからない	1.3	0.4

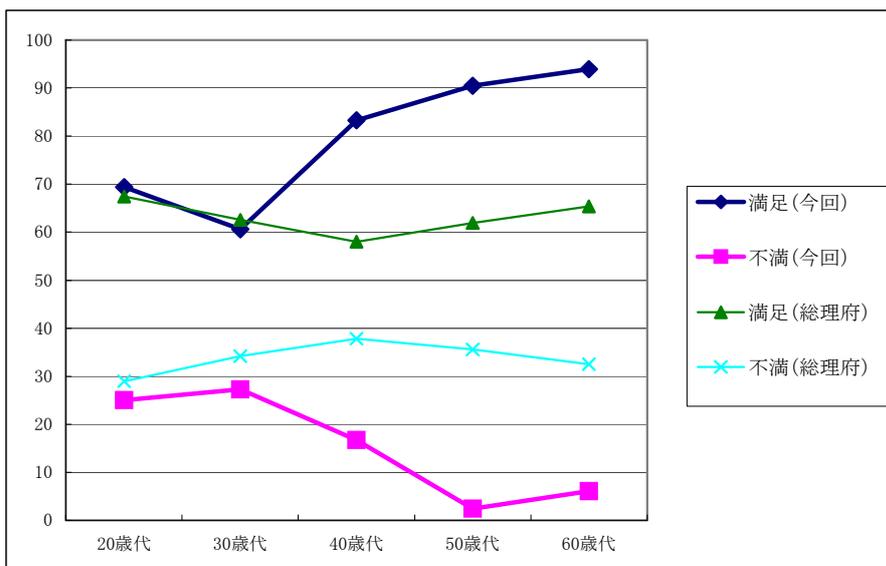
単純に比較すると、今回の調査では「満足している」の数値が非常に高いことが分かる。「不満だ」と答えた人も総理府調査の約半分である。また、総理府の調査対象は無作為抽出なので、当然、趣味的サークルへの参加者も一定割合で含まれるはずであるから、趣味的サークルに所属する人とそうでない人との差はより大きいものと予想される。したがって仮説は正しいと推定される。

生活の満足度と年齢をクロスさせると、興味深い結果が出る。総理府の結果と同様、生活の満足度は年齢によって異なる。しかし、その数値の動きは総理府のそれとはっきり異なっている。総理府の調査では男女とも30歳代から50歳代が満足度の底であるのに対し、今回の調査では年齢とともに満足度が上がっていくのである。特に男性では満足度の低い40歳代に対して、趣味的サークルへの参加が満足度の上昇に大きく寄与している。

男女別の比較

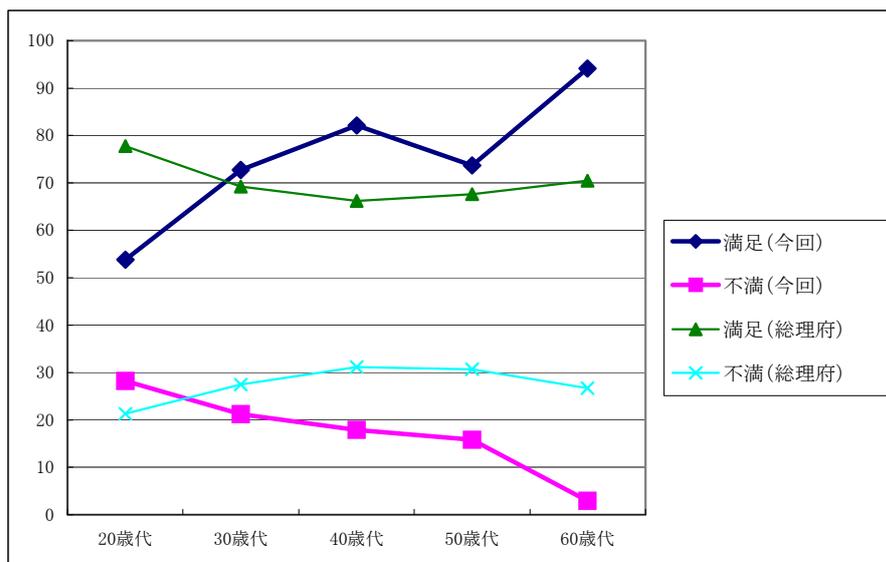
1. 男性

	満足(今回)	不満(今回)	満足(総理府)	不満(総理府)
20歳代	69.4	25	67.4	28.9
30歳代	60.6	27.3	62.6	34.2
40歳代	83.3	16.7	58	37.8
50歳代	90.5	2.4	61.9	35.6
60歳代	93.9	6.1	65.4	32.5



2. 女性

	満足(今回)	不満(今回)	満足(総理府)	不満(総理府)
20歳代	53.8	28.2	77.7	21.3
30歳代	72.7	21.2	69.2	27.5
40歳代	82.1	17.9	66.2	31.2
50歳代	73.7	15.8	67.6	30.7
60歳代	94.1	2.9	70.5	26.7



仮説2 参加する趣味の選択は学生時代のサークルの影響を強く受ける。

この仮説の検証は、今回の調査で行った次の質問の回答を検討する。

「この団体で行っている趣味活動は、かつて学生時代にやっていたことがありましたか。」

(Q20)

	Count	Responses	Cases
小学生の時、学校のクラブ活動でやっていた	29	5.4	8.8
小学生の時、学校以外でやっていた	35	6.6	10.6
中学生の時、学校のクラブ活動でやっていた	101	18.9	30.5
中学生の時、学校以外でやっていた	29	5.4	8.8
高校生の時、学校のクラブ活動でやっていた	110	20.6	33.2
高校生の時、学校以外でやっていた	19	3.6	5.7

大学生の時、大学のクラブ・サークル等でやっていた	56	10.5	16.9
大学生の時、大学関係以外でやっていた	15	2.8	4.5
学生時代にやったことはなかった	125	23.5	37.8
その他	14	2.6	4.2
Total responses	533	100.0	161.0

47 missing cases; 331 valid cases (表中の数字は%)

以上の結果から、予想された通り学校での活動経験の影響がある程度認められた。そのピークは高校であるが、「3人に1人(33.2%)が現在の趣味を高校のクラブ活動で行っていた」という結果はかなり高い割合だといえよう。

今回の調査の結果から、活動内容によってその数値に大きな開きがあることが分かった。ここでは詳しい数値は載せないが、高校におけるクラブ活動の経験率は、トップのバレーボールで70.0%、二番目の器楽演奏で68.9%、最下位のバードウォッチングの経験率は0%であった。もっとも、バードウォッチングについては高校にクラブがない以上経験のしようがないわけだが、学校のクラブ活動で行われなかったということは結果的に身近でないジャンルとなる。

「学生時代にやったことはなかった」のトップは当然、バードウォッチング(87.0%)で、二番目以下、エアロビクス(82.6%)、社交ダンス(71.0%)と学生時代にあまりなじみのなかったものが続いていく。社交ダンスについては、「その他」の回答が多かった(19.4%)ため正確にはわからないが、大学における経験率は0%だったことは意外である。

この反対に、「学生時代にやったことはなかった」の数値が低かったもの(つまり、学生時代を通した経験率が高いことを示す)は器楽演奏の1.6%(度数で1)がトップで、2位の野球が10%であることを考えると、器楽演奏のサークルに参加するためには学生時代の経験が必要であることが分かる。

以上の結果から、仮説で述べた学生時代の経験の影響を「強く影響を受ける」とまではいえないが、趣味活動の選択においてある一定の影響を見て取ることはできた。

仮説3 男性と女性では趣味的サークルへの参加目的が異なる。

団体に所属している目的を9つの項目に分けてその重要度を尋ねた質問がある（Q18）。その中で男女の回答で違いが認められたのは、「趣味に関する情報交換」と「異性との出会い」の2つである。

クロス表

			趣味に関する情報交換		合計
			重要である	重要でない	
性別	男性	度数	177	15	192
		性別の%	92.2%	7.8%	100.0%
	女性	度数	128	38	166
		性別の%	77.1%	22.9%	100.0%
合計		度数	305	53	358
		性別の%	85.2%	14.8%	100.0%

※ カイ2乗検定の連続修正による漸近有為確率は.000

クロス表

			異性との出会い		合計
			重要である	重要でない	
性別	男性	度数	69	120	189
		性別の%	36.5%	63.5%	100.0%
	女性	度数	43	122	165
		性別の%	26.1%	73.9%	100.0%
合計		度数	112	242	354
		性別の%	31.6%	68.4%	100.0%

※ カイ2乗検定の連続修正による漸近有為確率は.046

当初は男女による違いがより広範に表れると考えていたのだが、意に反して多くの項目でほとんど明確な差は認められなかった。「異性との出会い」についてはもっと大きな差異が表れると思われたが、それほどでもなかった。また、「趣味に関する情報交換」の項目に関しては、現代の情報化社会において男性が「情報」という単語に引きつけられた可能性は否定できない。したがって、これらのことは集団的余暇活動が日常世界の活動とは異なった非日常世界であり、多くの面で男女平等が成り立っている可能性を示唆している。

Q19（集団で趣味活動を行う理由）も集団所属に関する質問なので男女別に調べてみたが、結果はほとんど差がみられなかった。以上より、この仮説は証明されなかったことになる。

仮説4 集団の公式度によって参加者の目的や満足度が異なる。〈類型化1〉

まず、今回調査を行った各団体の公式度を測る基準を設けなければならない。第一に「代表者の決め方」、第二に「役職の数」、第三に「決算報告」、第四に「入団条件の有無」、第五に「退団基準の有無」、第六に「年間目標の有無」、第七に「会報の発行」、第八に「団体の規則の有無」、第九に「規則の周知度」、第十に「上部組織への加盟」を公式度の基準とした。この中に「団員名簿の有無」や「会費の徴収」を含まなかったのは、調査対象 25 団体すべてでそれが行われていたからである。各基準において、次の要件を満たした場合に得点が1加算され、公式度の高さは最大 10 ポイントとした。

1. 代表者の交代があり、新しい代表者を選ぶときに選挙、または話し合いが行われる
2. 役職の数が代表者を除き 3 つ以上ある場合
3. 決算報告が行われる
4. 入団するための条件がある、または入団テストが行われる
5. 明確な退団基準がある
6. 年間目標を立てている
7. 会報を発行している
8. その団体の規則がある
9. その規則が団員に周知されている
10. 何らかの上部組織に加盟している

上の項目はすべて、代表者用のアンケートに含まれているものである。なお、項目の9は団員がその規則を「よく知っている」と「ある程度知っている」と答えたものに得点を与えた。その結果が次の表である。なお、表中の調査番号は巻末付録「調査対象団体のプロフィール」に一致する。

調査番号	ジャンル	公式度	調査番号	ジャンル	公式度
1	将棋	4	14	野球	3
2	将棋	5	15	エアロビクス	4
3	コーラス	6	16	登山	8
4	登山	3	17	野球	1
5	エアロビクス	2	18	野球	4
6	将棋	4	19	テニス	8
7	社交ダンス	3	20	バレーボール	3
8	コーラス	5	21	器楽演奏	9
9	コーラス	7	22	バレーボール	5
10	バドミントン	7	23	バレーボール	2
11	エアロビクス	4	24	器楽演奏	10
12	社交ダンス	3	25	登山	8
13	社交ダンス	5			

以上の公式度をさらにその高さによって3つに分類する。公式度が0から3までのものを「低」、4から6までのものを「中」、7から10までのものを「高」とした。

表から、各ジャンルごとに公式度の傾向が表れていることが分かる。野球、社交ダンス、バレーボールの各ジャンルに属する団体の公式度は、いずれも「中」、「低」、「低」である。ジャンルによって公式度が異なるということは、次の「仮説5」でみる「個人的趣味」と「集会的趣味」によって公式度が左右される可能性を示している。そこで、「個人的趣味」の集団と「集会的趣味」の集団の公式度を比べてみた。前者に属する団体の公式度は、「高」が3、「中」が6、「低」が4で、後者は「高」が3、「中」が4、「低」が4で、両者の間に明確な差異はなかった。したがって、集団の公式度とはジャンルによる影響を受ける一方で、活動内容が「個人的」か「集会的」かによる違いでは影響されないことが分かった。

次に公式度と成員の関係において差異が表れたものについて考察する。構成上の違いは性別と年齢である。性別については女性の方がより公式度の高い集団に所属している。年齢では各セル同士の違いは認められるものの、明確な規則性は見出し難い。40歳代までは公式度が「高」の団体に所属している人の数が各世代の中で一番多い。50歳代以上は公式度の「中」と「低」の団体への所属が多くなる。年齢が高くなると公式度が低く、より気楽な集団を志向するのだろうか。

性別と集団の公式度のクロス表

		集団の公式度			合計
		低	中	高	
性別	男性	度数 58	63	73	194
		性別の % 29.9%	32.5%	37.6%	100.0%
	女性	度数 35	53	88	176
		性別の % 19.9%	30.1%	50.0%	100.0%
合計		度数 93	116	161	370
		性別の % 25.1%	31.4%	43.5%	100.0%

※ カイ 2 乗による漸近有為確率は.029

年齢と集団の公式度のクロス表

		集団の公式度			合計
		低	中	高	
年齢	20歳代	度数 23	7	45	75
		年齢の % 30.7%	9.3%	60.0%	100.0%
	30歳代	度数 19	20	27	66
		年齢の % 28.8%	30.3%	40.9%	100.0%
	40歳代	度数 4	17	38	59
		年齢の % 6.8%	28.8%	64.4%	100.0%
	50歳代	度数 28	27	28	83
		年齢の % 33.7%	32.5%	33.7%	100.0%
	60歳以上	度数 18	45	22	85
		年齢の % 21.2%	52.9%	25.9%	100.0%
合計		度数 92	116	160	368
		年齢の % 25.0%	31.5%	43.5%	100.0%

※ カイ 2 乗による漸近有為確率は.000

公式度と連帯感の関係では、若干の違いがみられた。なぜ公式度の低いグループの連帯感をもっとも高いのかはこのクロス表から読みとることはできないが、一つの仮説として次のように考えられる。多くの場合、公式度の高さはその集団の公式度の「必要性」によって決まる。つまり、ある程度まとまりがなくてはその活動が成り立たない場合、公式度が高くなるのである。しかし、公式度の高さは「締め付け」の強さでもある。これが連帯感にとってマイナスに作用したと考えることができよう。

(Q6とのクロス)

クロス表

			連帯感の有無		合計
			連帯感がある	連帯感がない	
集団の公式度	低	度数 集団の公式度の%	82 93.2%	6 6.8%	88 100.0%
	中	度数 集団の公式度の%	94 79.7%	24 20.3%	118 100.0%
	高	度数 集団の公式度の%	132 82.0%	29 18.0%	161 100.0%
合計		度数 集団の公式度の%	308 83.9%	59 16.1%	367 100.0%

※ カイ2乗による漸近有為確率は.022

次に公式度と「考え方」との関係について考察する。違いが表れたのは次の2つの項目である。

(Q35) とのクロス

クロス表

			社会か個人		合計
			社会に目を向けるべき	個人生活を充実すべき	
集団の公式度	低	度数 集団の公式度の%	15 31.3%	33 68.8%	48 100.0%
	中	度数 集団の公式度の%	38 51.4%	36 48.6%	74 100.0%
	高	度数 集団の公式度の%	60 63.2%	35 36.8%	95 100.0%
合計		度数 集団の公式度の%	113 52.1%	104 47.9%	217 100.0%

※ カイ2乗による漸近有為確率は.001

(Q38とのクロス)

クロス表

			収入か自由時間		合計
			自由時間を増やしたい	収入を増やしたい	
集団の公式度	低	度数 集団の公式度の%	20 29.4%	48 70.6%	68 100.0%
	中	度数 集団の公式度の%	31 38.3%	50 61.7%	81 100.0%
	高	度数 集団の公式度の%	61 49.2%	63 50.8%	124 100.0%
合計		度数 集団の公式度の%	112 41.0%	161 59.0%	273 100.0%

※ カイ 2 乗による漸近有為確率は.024

「個人か社会か」の質問では、公式度の違いがそのまま表れている。公式度が高くなるにつれ「社会に目を向けるべき」の回答も多くなっている。「収入か自由時間か」の質問では、公式度とともに自由時間への志向が高くなる。公式度と労働時間とのクロスで有為な違いが認められないため、この理由は分からない。

仮説の証明に入ることにする。まずは「参加の目的」である。Q18における9つの質問の中で差異が表れたのは次の3つの項目である。

(Q18-2とのクロス)

クロス表

			技術・能力の向上		合計
			重要である	重要でない	
集団の公式度	低	度数 集団の公式度の%	83 92.2%	7 7.8%	90 100.0%
	中	度数 集団の公式度の%	99 86.8%	15 13.2%	114 100.0%
	高	度数 集団の公式度の%	155 96.3%	6 3.7%	161 100.0%
合計		度数 集団の公式度の%	337 92.3%	28 7.7%	365 100.0%

※ カイ 2 乗による漸近有為確率は.015

(Q18-3とのクロス)

クロス表

			趣味に関する情報交換		合計
			重要である	重要でない	
集団の公式度	低	度数 集団の公式度の%	78 87.6%	11 12.4%	89 100.0%
	中	度数 集団の公式度の%	89 77.4%	26 22.6%	115 100.0%
	高	度数 集団の公式度の%	143 88.8%	18 11.2%	161 100.0%
合計		度数 集団の公式度の%	310 84.9%	55 15.1%	365 100.0%

※ カイ 2 乗による漸近有為確率は.023

(Q18-6とのクロス)

クロス表

			異性との出会い		合計
			重要である	重要でない	
集団の公式度	低	度数 集団の公式度の%	35 39.3%	54 60.7%	89 100.0%
	中	度数 集団の公式度の%	16 14.3%	96 85.7%	112 100.0%
	高	度数 集団の公式度の%	64 40.0%	96 60.0%	160 100.0%
合計		度数 集団の公式度の%	115 31.9%	246 68.1%	361 100.0%

※ カイ 2 乗による漸近有為確率は.000

「趣味に関する情報交換」については男女によって数値は異なるが、いずれも公式度の「中」の値がもっとも低いことで共通している。また、男女の構成比も「中」のグループは相対的に低くないので、この違いが性別によるものとはいえない。3つの項目いずれも、公式度による違いの原因を突き止めることは困難であるが、少なくとも差異が生じたことは事実である。

満足度による違いをみていくことにする。「活動への参加と生活の満足度は関係がある

か)、生活の満足度、余暇生活の満足度、「どの程度充実感を感じているか」の4つの質問が仮説の対象になるわけだが、いずれも意に反して明確な差異が表れなかった。前から順に、カイ2乗による漸近有為確率が.401、.799、.993、.488であった。

以上から、集団の公式度の違いは「満足度」や「充実感」には影響がなかったが、「参加者の目的」や「ものの考え方」にはその違いが表れていることが分かった。しかし、「ものの考え方」については、集団から与えられた影響というより、そのような「ものの考え方」をする人々が公式度の高い集団を選択していると考えた方が自然であろう。したがって、「参加者の目的や満足度」のうち「目的」では違いが認められたが、「満足度」に関しては公式度の高低によつての差異はなく、仮説のうち半分は証明され、半分は反証されたことになる。このような結果を招いた原因は、仮説において「目的」と「満足度」とひとまとめにしてしまったため、仮説の立て方に反省の余地がある。

仮説5 「個人的趣味」の集団よりも「集合的趣味」の集団の方が、満足度が高い。

<類型化2>

この仮説を検証するために、まず今回調査を行った10のジャンルを「個人的趣味」の集団と「集合的趣味」の集団に分類した。「個人的趣味」とは「一人、もしくはもう一人の相手がいれば活動可能な余暇活動」を指し、「集合的趣味」は「ある一定の人数がいなければ実質的な活動が行えない余暇活動」とした。この定義に従うと、前者の団体は、将棋、エアロビクス、テニス、社交ダンス、バードウォッチング、登山で、後者の団体は、野球、バレーボール、コーラス、器楽演奏となる。

ただし、調査結果から連帯感についてのみ登山は「集合的趣味」の集団に属する。なぜなら登山サークルの成員は「連帯感があるか」の質問において、すべての人が「強い連帯感がある」または「ある程度連帯感がある」と答えていたからである。その理由を考えるうえで参考になるのが、「この趣味を集団で行う理由」についての「その他」の回答である。そこでは「一人では危険だから」という回答がいくつかみられた。つまり、登山は個人での活動も可能だが、危険を回避するために集団で行動することが大切であり、したがって一旦山に登った以上、連帯感は生命に関わる重要な問題となるのである。

仮説の証明だが、まずは「生活の満足度」の比較を行う。

(Q25 とのクロス)

個人・集合 と 生活の満足度 のクロス表

			生活の満足度		合計
			満足	不満	
個人・集合	集合的趣味	度数	112	40	152
			73.7%	26.3%	100.0%
	個人的趣味	度数	175	19	194
			90.2%	9.8%	100.0%
合計		度数	287	59	346
			82.9%	17.1%	100.0%

※ カイ 2 乗検定の連続修正による漸近有為確率は.000

一見すると「個人的趣味」の集団に所属している人の方が、生活の満足度が高いように思われる。しかし、これは単純に捉えることはできなかった。なぜならば、以下にみるように「個人的趣味」の集団と「集合的趣味」の集団で成員の構成が異なるからである。具体的には、参加者の年齢が前者の方が明らかに高い（次のクロス表を参照）のである。そして、今回の調査においては、基本的に年齢とともに生活の満足度も上昇していくため、満足度の違いが活動内容の違いによるとは必ずしもいえないのである。

年齢 と 個人・集合 のクロス表

			個人・集合		合計
			集合的な趣味活動	個人的な趣味活動	
年齢	20歳代	度数	63	12	75
		年齢の%	84.0%	16.0%	100.0%
	30歳代	度数	41	25	66
		年齢の%	62.1%	37.9%	100.0%
	40歳代	度数	22	37	59
		年齢の%	37.3%	62.7%	100.0%
	50歳代	度数	17	66	83
		年齢の%	20.5%	79.5%	100.0%
	60歳以上	度数	23	62	85
		年齢の%	27.1%	72.9%	100.0%
合計		度数	166	202	368
		年齢の%	45.1%	54.9%	100.0%

以上の問題をクリアするために、「個人的趣味」の集団と「集合的趣味」の集団を別々に検討する必要がある。

「個人的趣味」の集団における満足度とフェイス・シートとのクロス

クロス表

			生活の満足度		合計
			満足	不満	
性別	男性	度数	92	8	100
		性別の%	92.0%	8.0%	100.0%
	女性	度数	79	10	89
		性別の%	88.8%	11.2%	100.0%
合計		度数	171	18	189
		性別の%	90.5%	9.5%	100.0%

クロス表

			生活の満足度		合計
			満足	不満	
年齢	20歳代	度数	9	2	11
		年齢の%	81.8%	18.2%	100.0%
	30歳代	度数	19	5	24
		年齢の%	79.2%	20.8%	100.0%
	40歳代	度数	31	5	36
		年齢の%	86.1%	13.9%	100.0%
	50歳代	度数	53	4	57
		年齢の%	93.0%	7.0%	100.0%
	60歳以上	度数	58	2	60
		年齢の%	96.7%	3.3%	100.0%
合計		度数	170	18	188
		年齢の%	90.4%	9.6%	100.0%

「集会的趣味」の集団における満足度とフェイス・シートとのクロス

クロス表

			生活の満足度		合計
			満足	不満	
性別	男性	度数	61	19	80
		性別の%	76.3%	23.8%	100.0%
	女性	度数	51	20	71
		性別の%	71.8%	28.2%	100.0%
合計		度数	112	39	151
		性別の%	74.2%	25.8%	100.0%

加表

			生活の満足度		合計
			満足	不満	
年齢	20歳代	度数	36	18	54
		年齢の%	66.7%	33.3%	100.0%
	30歳代	度数	25	11	36
		年齢の%	69.4%	30.6%	100.0%
	40歳代	度数	17	5	22
		年齢の%	77.3%	22.7%	100.0%
	50歳代	度数	13	3	16
		年齢の%	81.3%	18.8%	100.0%
	60歳以上	度数	20	2	22
		年齢の%	90.9%	9.1%	100.0%
合計		度数	111	39	150
		年齢の%	74.0%	26.0%	100.0%

以上から分かることは、両方のカテゴリとも満足度における男女の差がほぼ同じであること、すべての年齢層において「集合的趣味」の集団の参加者の方が生活の満足度が低いということである。つまり、両者の数値の違いは年齢による影響ではなく、実際に「個人的趣味」の集団の方が満足度を高めていることが考えられる。したがって、調査結果により先に挙げた仮説は覆されることになる。

当初、私は皆で一つのものを作り上げていく余暇活動の方が「個人的趣味」の集団よりも満足度が高いのではないかと考えていた。しかし、「所属していて不満に思うこと」の結果からみても、人間関係の不満は「集合的趣味」の集団の方が抱きやすい。それは、「集合的趣味」の集団では連帯感やまとまりを要求されるからである。もちろん人間関係が深刻な場合、その人はその集団を離れるだろう。しかし、そこまでに至らない場合に、それは「不満」として調査結果に反映される。また、仲間との共同作業では意見が合わないことも頻繁に起こりうる。したがって、「集合的趣味」の集団の方が、人間関係が高度で複雑なのである。そのために、生活の満足度において両者に有為な差が認められたものと考えられる。以下に、「所属して不満に思うこと」の結果を載せておく。

Q16	個人的趣味	集合的趣味	Row Total
自分の理想と団の目標が異なること	6.6	17.2	11.4
仲間との意見が合わないこと	3.1	12.9	7.5
団内の人間関係がうまくいかないこと	3.1	8.6	5.6
男女が不平等なこと	0.5	0.6	0.6

団の目標が達成できないこと	2.6	18.4	9.7
特に不満はない	81.6	49.7	67.1
その他	4.1	11.7	7.5
Total	54.6	45.4	100.0

359 valid cases; 19 missing cases (表中の数字は%)

もつとも、たとえ「個人的趣味」の集団がより生活の満足感を高めているとしても、そこでは仲間とともに味わう達成感を得ることはできない。実際、その趣味を集団で行う理由を尋ねた質問に対し、「仲間と喜びを共有したいから」の選択肢を答えた人の割合は、「集合的趣味」の集団の方が6.1%高かった。つまり、「個人的趣味」の集団はその成員に、コンスタントに満足感を与えるかもしれないが、大勢で一つの目的を果たしたときの感動は「集合的趣味」の集団でないと得られないのである。しかし、この満足感の水準を今回の調査から推し量ることはできない。

仮説6 集団的余暇活動は市民社会の形成に影響する。

デュマズディエは次のように述べている。「それでは余暇は民衆の新しい阿片なのだろうか。そうだとすれば労働者を『疎外から享楽へ』導こうとする運動は、余暇における享楽の埋め合わせに、労働の場における疎外を強化させようとする反対方向の力と衝突することになる」³。ここに彼は一つの懸念を表明している。つまり、余暇活動は市民社会にとってマイナスに作用するのではないだろうか、と。しかし、今回の調査結果を見る限り、それは的を射ていなかった。

まず、市民に与えられた権利としての選挙権の行使についてみる。平成10年7月に行われた参議院選挙の投票率は、趣味的サークルの参加者で79.7%（この中には試合で参加できなかった団体の数値も含まれていて、その団体を除外すると81.7%になる）あり、この時の静岡県（前にも述べたが調査対象者の中には静岡市以外に住んでいる人もいるので、比較の対象は県単位になる）の投票率、57.47%を大きく上回っている。年齢の上昇とともに投票率が上がる傾向は一般の投票行動と同じであるが、すでに30歳代から静岡県の投票率を上回っている。そして、50歳代を超えるとそれは9割を超えている。

この時の投票率そのものが前回と比べて高かったが、趣味的サークルの参加者の8割近い

投票率は驚きに値する。

(Q37 とのクロス)

年齢と投票行動のクロス表

		投票行動		合計	
		投票した	投票しなかった		
年齢	20歳代	度数	38	34	72
		年齢の%	52.8%	47.2%	100.0%
	30歳代	度数	46	20	66
		年齢の%	69.7%	30.3%	100.0%
	40歳代	度数	51	6	57
		年齢の%	89.5%	10.5%	100.0%
	50歳代	度数	75	5	80
		年齢の%	93.8%	6.3%	100.0%
	60歳以上	度数	75	8	83
		年齢の%	90.4%	9.6%	100.0%
合計		度数	285	73	358
		年齢の%	79.6%	20.4%	100.0%

投票率以外からも「市民」としての意識の違いを窺い知ることができる。「社会のために役立ちたいと考えているか」の回答で「わからない」を除いて比較⁴すると、「思っている」の回答は、総理府調査で66.3%、今回の調査で66.5%となっており、ほぼ同一と考えてよい。また、同様に、働く理由を尋ねた質問では、「社会の一員として、務めを果たすために働く」を選んだ回答者が、総理府調査で17.5%、今回の調査で25.4%（いずれの数値も「その他」、「わからない」を除外して計算）となっており、趣味的サークルの参加者の方がその数値は高くなっている。

唯一、趣味的サークルが市民社会の形成を阻害する可能性を示しているものが、「社会か、個人か」(Q35)を尋ねたものである。この質問の回答は、国民は「国や社会のことにもっと目を向けるべきだ」と「個人生活の充実をもっと重視すべきだ」の2つが用意されている（「一概に言えない」と「わからない」は除外）。前者の回答が総理府調査で60.6%、今回の調査で52.0%であった。しかし、投票という現実的な行動では趣味的サークルの参加者の方が上回っていたので、この結果によって趣味的サークルが市民社会の形成にとって阻害要因になるとは必ずしも考えられない。また、余暇活動をする人が個人主義的になることは、ある程度理解できる。

以上から、「集团的余暇活動は市民社会の形成に貢献する」とまではいえないが、「集団

的余暇活動に参加することによって、社会に対する意識を低下させることはない」とはいえそうである。したがって、今回の調査結果における限りでは、デュマズディエの懸念は払拭される。

¹ 総理府広報室「国民生活に関する世論調査」平成9年5月29日～6月11日実施、調査員による面接聴取。層化2段無作為抽出法。有効回収数7,293人、有効回収率72.9%。

² 総理府調査は5歳区切で80歳まで尋ねているが、今回調査において60歳以上は1つの選択肢にまとめられている。そのため、表中の総理府調査の数字は60歳以上を合計したものである。

³ J.デュマズディエ著、中嶋巖訳『余暇文明へ向かって』東京創元社、1972年、p.36。Joffre Dumazedier, *Vers une civilisation du loisir?*, Éditions du Seuil, 1962.

⁴ 今回の調査方法は、総理府の行った対面調査ではないので、比較に用いた質問項目のほとんどで「わからない」、「一概にいけない」、「どちらともいけない」、「その他」という曖昧な回答が多かったため、回答によってはそれらを除外せずに単純に比較することはできない。

第六章 調査結果2－調査結果の概要

この章では、総理府が実施した調査の結果との比較と、前章の仮説の証明で取りあげられなかった項目で重要なものについてその概要をみていく。

第一節 総理府調査との比較2－調査項目

今回の調査において、総理府広報室が毎年行っている「国民生活に関する世論調査」から質問を13（項目数では18）、同「社会意識に関する世論調査」¹から2つをそれぞれ選び、同じ質問を行った。

1. 「次の生活のそれぞれの面では、どの程度満足していますか。」(Q26)

	今回調査	総理府調査
「所得・収入」		
満足している	11.5	6.1
まあ満足している	39.5	40.6
やや不満だ	21.9	35.9
不満だ	17.3	14
どちらともいえない	6.8	2.6
わからない	3	0.9
「自動車、電気製品、家具などの耐久消費財」		
満足している	20.9	15.4
まあ満足している	53.8	59.9
やや不満だ	12.9	16.5
不満だ	4.7	4.6
どちらともいえない	5.5	2.8
わからない	2.2	0.8
「レジャー・余暇生活」		
満足している	19.3	10.1
まあ満足している	55	46.6
やや不満だ	15	28.3
不満だ	4.6	11.2
どちらともいえない	4.6	3.1
わからない	1.4	0.7

(数字は%、以下同じ)

以上を比較すると、総理府の調査と比べて今回の結果は「収入・所得」については「満足している」が高く、「自動車、電気製品、家具などの耐久消費財」は「満足している」と「まあ満足している」を合わせるとほぼ拮抗しており、「レジャー・余暇生活」は明らかに、

満足している人の多いことが読みとれる。原因として、「収入・所得」は「世帯収入」の違いが考えられる。たとえ個人所得が低くても、世帯収入が高ければ可処分所得が上がるということが容易に推測できる。「自動車、電気製品、家具などの耐久消費財」における満足度に違いが表れなかったのは、2つの調査対象の間に、生活一般に関する現実や意識に違いがなかったことが考えられる。また、「レジャー・余暇生活」の満足が高かったことは、総理府が行った調査の対象よりも豊かな余暇生活を送っていることに他ならない。

今回の調査はその性格上、個人の年間所得を尋ねていない。したがって、個人の所得について考察する場合、「収入・所得」に対する満足度を一応のメルクマルにすることになるが、これは年齢の影響を強く受けていることが分かる（下のクロス表を参照）。ちなみに満足度を尋ねた質問では、すべて年齢とのクロスではほぼ右肩あがりの結果が得られる。したがって、この結果もその文脈からは何らはずれたものではない。しかし、それは個人所得の満足度が生活の満足度に影響を与えていることを否定しない。事実、後にみる「生活の満足度」と「収入・所得」の満足度とのクロス集計において強い関連性を読みとることができる。要するに実際の収入に関係なく、年齢と共に生活の3つの側面で満足度が高まっていき、これが生活の満足度とも大きく関わっているのである。ここで特筆すべきは、この傾向が本調査における結果のみに表れていることである。総理府の結果では「生活の満足度」は年齢とともに高まっているが、それ以外の側面では年齢とのクロスで有為な違いは見受けられない。したがって、本調査の対象、すなわち趣味的サークルに所属する人々は生活の多くの側面において、年齢とともに満足度が高まっていくという特徴が指摘できるのである。

年齢と所得・収入のクロス表

		所得・収入		合計
		満足	不満	
年齢	20歳代	度数 29	39	68
		年齢の % 42.6%	57.4%	100.0%
	30歳代	度数 24	35	59
		年齢の % 40.7%	59.3%	100.0%
	40歳代	度数 25	27	52
		年齢の % 48.1%	51.9%	100.0%
	50歳代	度数 52	21	73
		年齢の % 71.2%	28.8%	100.0%
	60歳以上	度数 53	15	68
		年齢の % 77.9%	22.1%	100.0%
合計	度数	183	137	320
	年齢の %	57.2%	42.8%	100.0%

※ カイ2乗検定による漸近有為確率は.000

2. 「あなたは、日頃の生活の中で、どの程度充実感を感じていますか。」(Q27)

	今回調査	総理府調査
十分充実感を感じている	11.9	9.3
まあ充実感を感じている	64.7	58.3
あまり充実感を感じていない	14.3	21.2
ほとんど(全く)充実感を感じていない	2.4	7.3
どちらともいえない	4.9	2.7
わからない	1.9	1.2

生活の満足度を尋ねた質問と非常に近い内容のものである。したがって、同じような傾向が表れるのは当然である。「十分充実感を感じている」と「まあ充実感を感じている」の質問を合わせると、今回の調査対象者の方が充実感を得ている人の割合が9ポイント高い。ちなみに、「生活の満足」と「充実感」では、どのようなニュアンスの違いがあるのだろうか。生活に満足しているのに充実感が得られない場合、刺激の少ない退屈な生活が想像される。反対に、充実感を得られても生活は満足していない場合、住居や耐久消費財など、物質的に満たされていないことが考えられる。したがって、質問の内容は似ているが、回答者によっては違いが出てくる可能性がある。

3. 「あなたが日頃の生活の中で、充実感を感じるのは、主にどのような時ですか。」(Q28)

	今回調査	総理府調査
仕事にうちこんでいる時	42.2	33.3
勉強や教養などに身を入れている時	23.5	9.2
趣味やスポーツに熱中している時	82.4	34.1
ゆったりと休養している時	31.3	35.8
家族団らんの時	20.9	45.1
友人や知人と会合、雑談している時	28.5	35
社会奉仕や社会活動をしている時	3.4	5.2
その他	0.3	0.7
わからない	0.6	1.7

「家族団らんの時」を答えた人が非常に少ないのが目を引く。また、仕事、勉強、趣味などで総理府の数値を大きく上回っている。特に趣味に関しては、50%近い開きがある。充実感を感じている人の割合が違うとはいえ大きな差である。全体として、趣味的サークルの参加者の方が「夢中になれるもの」をもっているようである。

4. 「あなたは、日頃の生活の中で、悩みや不安を感じていらっしゃいますか、それとも、悩みや不安を感じていませんか。」(Q29)

	今回調査	総理府調査
悩みや不安を感じている	65.4	60.6
悩みや不安を感じていない	22.3	38.3
わからない	12.3	1.1

今回の調査対象の方が若干、不安を感じているようである。対象者に若年層が多かったことに帰すると思われる。

5. 「あなたは、ふだん、仕事や家事、学業などに精一杯でゆとりがありませんか、それとも、休んだり、好きなことをしたりする時間的なゆとりがありますか。」(Q30)

	今回調査	総理府調査
かなりゆとりがある	14.1	14.6
ある程度ゆとりがある	52	44.7
あまりゆとりがない	23.8	28.6
ほとんどゆとりがない	8.1	11.6
わからない	1.9	0.5

趣味活動を行っている以上、ある程度の時間的余裕があることは当然である。しかし、この質問は回答者の主観を尋ねたものである。したがって、実際の自由時間が異なっているという保証はない。例えば、趣味的サークルの参加者の方が仕事や用事を手早く片づけている可能性があるのだ。

6. 「お宅の生活の程度は、世間一般からみて、この中ではどれに入ると思われますか。」(Q31)

	今回調査	総理府調査
上	1.1	0.9
中の上	13	9.6
中の中	50.7	56.3
中の下	22.9	25.1
下	5.1	5.5
わからない	7	2.6

若干、「中の上」の回答が多く、「中の中」の回答が少ないが、両者の間にあまり大きな違いはみられない。世帯についての主観的な質問であるから、回答者の収入と直接的には関係していない。

7. 「今後の生活の仕方として、次のような2つの考え方のうち、あなたの考え方に近いのはどちらでしょうか。」(Q32)

- (1) 物質的にある程度豊かになったので、これからは心の豊かさやゆとりのある生活をするに重きをおきたい
- (2) まだまだ物質的な面で生活を豊かにすることに重きをおきたい

	今回調査	総理府調査
回答選択肢(1)	42.6	56.3
回答選択肢(2)	15.4	30.1
一概にいけない	35.2	12
わからない	6.9	1.5

この回答については、「一概にいけない」を選択した回答者が多すぎるため、単純に比較することはできない。そこで、「わからない」と「一概にいけない」を除いて比較する必要がある。回答選択肢(1)と(2)を合わせて計算し直すと、前者の「心の豊かさ」を選んだ人が今回調査で73.5%、総理府調査で65.2%、後者の「物の豊かさ」を選んだ人が今回調査で26.5%、総理府調査で34.8%であった。これは、一見すると、趣味的サークルの参加者の方が現在、物質的に豊かであると思われる。しかし、他の回答と合わせて考えると、趣味的サークルの参加者は「精神的な喜び」に対して貪欲であることが分かる。つまり、より楽しく、より心豊かに生活(人生)を送ろうとする姿勢が調査結果から読みとることができるのである。具体的には、後にみるQ33、Q34の(2)と(4)、Q38、Q40などの項目によって、それを窺い知ることができる。

8. 「あなたは、今後の生活の仕方として、貯蓄や投資など将来に備えることに力を入れたいと思いますか、それとも、毎日の生活を充実させて楽しむことに力を入れたいと思いますか。」(Q33)

	今回調査	総理府調査
(1) 貯蓄・投資など将来に備える	16.8	28.8
(2) 毎日の生活を充実させて楽しむ	53.6	53.4
どちらともいけない	27.2	16.4
わからない	2.5	1.3

この質問についても「どちらともいけない」と「わからない」を除外して試してみることにする。(1)を答えた人は今回調査が23.8%、総理府調査が35%、(2)を答えた人は今回調査が76.2%、総理府調査が65%であった。趣味的サークルの参加者の方が利他的とはいわないが、今を楽しもうとする姿勢は十分に感じられる。

9. 「あなたは、あなた自身の生き方、考え方についてどのように考えていますか。」

(Q34)

	今回調査	総理府調査
(1)できるだけ新しいものを取り入れ、どんどん改革していく方だ		
そうだと思う	16.3	18.8
まあそうだと思う	42.8	30.9
あまりそうだと思わない	27.8	38
そうだと思わない	8.2	10.1
わからない	4.9	2.3
(2)経済的に恵まれなくとも、気ままに楽しく暮らせればよい		
そうだと思う	17.9	21.9
まあそうだと思う	41.3	32.7
あまりそうだと思わない	20.1	31.5
そうだと思わない	16.8	11.7
わからない	3.8	2.2
(3)妥協を排し、自分の信念はできる限り貫くよう努力する方だ		
そうだと思う	13.4	21.4
まあそうだと思う	37.3	37
あまりそうだと思わない	31.9	32.2
そうだと思わない	12.8	6.2
わからない	4.6	3.1
(4)自分の願望にできるだけ忠実に生きたい		
そうだと思う	27.5	32
まあそうだと思う	53.7	46.8
あまりそうだと思わない	10.9	15.5
そうだと思わない	3.5	2.9
わからない	4.4	2.7

(1)からは、趣味的サークルの参加者が保守的でないことを示している。(2)と(4)からは、先にも述べたが、自らの希望する楽しい暮らし方への志向が感じられる。(3)について、「そうだと思う」と「まあそうだと思う」を足した回答が今回の調査では少なかった。詳しくみると、男性、女性、いずれも総理府の結果を下回っている。また、年齢別にみると男女とも30歳代が非常に低い数値になっていることが分かる。

Q34- (3) 「妥協を排し、自分の信念はできる限り貫くよう努力する方だ」

総理府調査

男性	そうだと思う	そうだと思わない	わからない
20歳代	75.1	22.5	2.5
30歳代	64.5	34.3	1.1

40歳代	64.6	34.1	1.3
50歳代	63.3	33.9	2.7
60歳代	63.8	33.9	2.3
70歳以上	55.5	39.1	5.4
男性合計	64.4	33.2	2.3

女性	そうだと思う	そうだと思わない	わからない
20歳代	59.9	38.1	2.1
30歳代	56.9	40.2	2.9
40歳代	53.3	44.2	2.5
50歳代	52.8	44.9	2.3
60歳代	52.3	42.9	4.9
70歳以上	41.8	47.2	11.1
女性合計	53.3	43	3.7

今回の調査

年齢と信念は貫くよう努力すべきと性別のクロス表

性別	信念は貫くよう努力すべき			合計		
	そうだと思う	そうだと思わない	わからない			
男性	年齢 20歳代	度数	24	8	3	35
		年齢の%	68.6%	22.9%	8.6%	100.0%
	30歳代	度数	16	17		33
		年齢の%	48.5%	51.5%		100.0%
	40歳代	度数	18	12		30
		年齢の%	60.0%	40.0%		100.0%
	50歳代	度数	28	15		43
		年齢の%	65.1%	34.9%		100.0%
	60歳以上	度数	23	25	2	50
		年齢の%	46.0%	50.0%	4.0%	100.0%
	合計	度数	109	77	5	191
		年齢の%	57.1%	40.3%	2.6%	100.0%
女性	年齢 20歳代	度数	18	16	5	39
		年齢の%	46.2%	41.0%	12.8%	100.0%
	30歳代	度数	11	18	4	33
		年齢の%	33.3%	54.5%	12.1%	100.0%
	40歳代	度数	14	13	2	29
		年齢の%	48.3%	44.8%	6.9%	100.0%
	50歳代	度数	16	19	1	36
		年齢の%	44.4%	52.8%	2.8%	100.0%
	60歳以上	度数	14	19		33
		年齢の%	42.4%	57.6%		100.0%
	合計	度数	73	85	12	170
		年齢の%	42.9%	50.0%	7.1%	100.0%

考えられることは、趣味のサークルとはいえ集団に所属する以上、その中で常に自らの信念を貫けるわけではない、ということである。妥協や、あるときには信念を曲げることも要求されるかもしれない。したがって、個人の自由意志によって（敢えて）集団に所属

する人々は、良くいえば柔軟性があり、悪くいえばそれほど強い信念を持ち合わせていないのかもしれない。

10. 「国民は、『国や社会のことにもっと目を向けるべきだ』という意見と、『個人生活の充実をもっと重視すべきだ』という意見がありますが、あなたのお考えは、このうちどちらの意見に近いですか。」(Q35)

	今回調査	総理府調査
国や社会のことにもっと目を向けるべきだ	31	49.9
個人生活の充実をもっと重視すべきだ	28.6	32.4
一概に言えない	36.3	14.5
わからない	4.1	3.2

11. 「あなたは、日頃、社会の一員として、何か社会のために役立ちたいと思っていますか。それとも、あまりそのようなことは考えていませんか。」(Q36)

	今回調査	総理府調査
思っている	59.8	63.6
あまり考えていない	30.2	32.2
わからない	10.1	4.2

Q35とQ36については、第五章の仮説の検証で取りあげている。

12. 「あなたは、収入と自由時間との関係について、収入は現在のままだでも、自由時間をもっと増やしたいと思いませんか、それとも、自由時間は現在のままだでも、収入をもっと増やしたいと思いませんか。」(Q38)

	今回調査	総理府調査
収入は現在のままだでも、自由時間をもっと増やしたい	30.9	31.4
自由時間は現在のままだでも、収入をもっと増やしたい	44.4	49.2
その他	3.6	0.5
どちらともいえない	19.8	16.9
わからない	1.4	2

この質問に対する回答には明確な差異が見られない。分かりやすくするために「その他」、「どちらともいえない」、「わからない」を除いて回答を2分してみる。「収入は現在のままだでも、自由時間をもっと増やしたい」を選択した人は41%（今回）と39%（総理府）で、「自由時間は現在のままだでも、収入をもっと増やしたい」を選択した人は59%（今回）と61%（総理府）となり、ほとんど差がないことが分かる。現在の経済状況の影響か、いずれも収入を増やしたいという回答が多かった。

1 3. 「人は何のために働くことが大切だと思いますか。」(Q39)

	今回調査	総理府調査
お金を得るために働く	24.2	34
社会の一員として、務めを果たすために働く	23.1	16.9
自分の才能や能力を発揮するために働く	13.1	12.7
生きがいを見つけるために働く	30.6	33.1
その他	4.5	0.5
わからない	4.5	2.8

この質問については第五章の仮説の検証で取りあげている。

1 4. 「仕事と余暇について、次のような考え方のうち、あなたの考え方に最も近いのはどれでしょうか。」(Q40)

	今回調査	総理府調査
仕事より余暇に生きがいを求める	15.4	8
どちらかといえば、仕事より余暇を楽しむ	24.7	17.5
仕事と余暇のどちらにも力を入れる	47.8	47.1
どちらかといえば、余暇より仕事に力を注ぐ	6.9	15.7
仕事に生きがいを求めて、全力を傾ける	0	6.4
その他	2.5	0.2
わからない	2.7	5

今回の調査対象全体の回答において、一つも選択されなかった回答選択肢があったのはこの質問だけであった。何であったかという、それは「仕事に生きがいを求めて、全力で傾ける」という回答選択肢である。趣味的サークルを対象に行った調査であるから、この回答が少ないのは当然予想されたことであるが、全くないとは思わなかった。もともと、趣味的サークルの参加者がその回答選択肢を選んだところで、あまり説得力をもたないのも事実である。

第二節 フェイス・シートと調査項目とのクロス集計

1. 非公式の集まりに参加するか(Q4)

20歳代に「よく参加する」の回答が少ないのが目立ち、この世代を除いたすべての世代で「たまに参加する」よりも「よく参加する」の回答が上回っている。

年齢と非公式の活動への参加のクロス表

			非公式の活動への参加				合計
			よく参加する	たまに参加する	あまり参加しない	参加しない	
年齢	20歳代	度数	18	41	5	1	65
		年齢の%	27.7%	63.1%	7.7%	1.5%	100.0%
	30歳代	度数	32	19	2	2	55
		年齢の%	58.2%	34.5%	3.6%	3.6%	100.0%
	40歳代	度数	22	15	6	2	45
		年齢の%	48.9%	33.3%	13.3%	4.4%	100.0%
	50歳代	度数	41	23	4	1	69
		年齢の%	59.4%	33.3%	5.8%	1.4%	100.0%
	60歳以上	度数	49	19	6	3	77
		年齢の%	63.6%	24.7%	7.8%	3.9%	100.0%
合計		度数	162	117	23	9	311
		年齢の%	52.1%	37.6%	7.4%	2.9%	100.0%

※ カイ2乗検定による漸近有為確率は.002

2. あなたの所属する団体に連帯感があると思うか (Q6)

フェイス・シートと連帯感とのクロスで明確な違いが表れたのは性別であった。

クロス表

			連帯感の有無				合計
			強い連帯感がある	ある程度連帯感がある	あまり連帯感がない	ほとんど連帯感がない	
性別	男性	度数	59	112	16	4	191
		性別の%	30.9%	58.6%	8.4%	2.1%	100.0%
	女性	度数	32	100	35	2	169
		性別の%	18.9%	59.2%	20.7%	1.2%	100.0%
合計		度数	91	212	51	6	360
		性別の%	25.3%	58.9%	14.2%	1.7%	100.0%

※ カイ2乗検定による漸近有為確率は.002

しかし、これだけでは「男性のみの集団」、「女性のみの集団」によって異なる可能性がでてきてしまう。そこで、それぞれを分けたうえで分析する必要があるが、詳細は第七章の第三節において言及する。

3. 役職に就いているか否か (Q10)

年齢とのクロスは40歳代をピークとした山型である。一般社会が年功序列で役職に就くことを考えると、趣味的サークルは社会的な属性の影響をあまり受けないのかもしれない。

クロス表

		役職の有無		合計
		役職に就いている	役職に就いていない	
年齢	20歳代	度数 10	64	74
		年齢の % 13.5%	86.5%	100.0%
	30歳代	度数 19	47	66
		年齢の % 28.8%	71.2%	100.0%
	40歳代	度数 24	34	58
		年齢の % 41.4%	58.6%	100.0%
	50歳代	度数 17	66	83
		年齢の % 20.5%	79.5%	100.0%
	60歳以上	度数 16	64	80
		年齢の % 20.0%	80.0%	100.0%
合計		度数 86	275	361
		年齢の % 23.8%	76.2%	100.0%

※ カイ 2 乗検定による漸近有為確率は.003

本当に年功序列が行われていないかを確認するためには、各団体の年齢構成（巻末付録 3. 1 を参照）を調べなくてはならない。つまり、若い人しかいない団体に若い人が役職に就いているのは当然のことである。その反対についても同じである。幅広い年齢層の集団で比較的若い人が役職に就いていて、はじめて年功序列を否定できるのである。サークルごとの年齢と役職のクロスを見る限り、ある程度、年功序列は否定されると考えてよいだろう。また、前章でみた「公式度」の概念を用いるならば、公式度が高い集団ほど年功序列であることが予想された。しかし、その集団においても、年功序列の論理が必ずしも働いているとはいえない。これは、趣味的サークルに特有の現象というより、趣味的サークルがインフォーマルな小集団であることによるものと考えられる。

趣味的サークルの役職に就くか否かは当人の意志によるところも大きい。したがって、主観的に時間にゆとりがある人の方が役職に就く可能性が高い。しかし、実際は「時間的なゆとり」と役職との関連は認められなかった（カイ 2 乗検定の連続修正による漸近有為確率は.356）。有為な差が認められたのは労働時間とのクロスである。現実的な時間の方が重要だったのである。次のクロスにより、1 日の労働時間が 9 時間を超える人で役職に就いている人が少なく、8 時間から 9 時間の人に多いことが分かる。

役職の有無と一日の労働時間(3分割)のクロス表

			一日の労働時間(3分割)			合計
			8時間未満	8時間から9時間未満	9時間以上	
役職の有無	役職に就いている	度数 役職の有無の%	25 36.8%	29 42.6%	14 20.6%	68 100.0%
	役職に就いていない	度数 役職の有無の%	76 42.0%	47 26.0%	58 32.0%	181 100.0%
合計		度数 役職の有無の%	101 40.6%	76 30.5%	72 28.9%	249 100.0%

※ カイ2乗検定による漸近有為確率は.029

次に役職における男女平等について考察を行う。これは、男女混合のサークルにおける役職の状況を見ればよい。

そのために、まず男女混合サークルの性別による年齢構成を把握しておく必要がある。

性別と年齢のクロス表

			年齢					合計
			20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳以上	
性別	男性	度数	10	15	22	23	25	95
		性別の%	10.5%	15.8%	23.2%	24.2%	26.3%	100.0%
	女性	度数	35	13	16	24	20	108
		性別の%	32.4%	12.0%	14.8%	22.2%	18.5%	100.0%
合計		度数	45	28	38	47	45	203
		性別の%	22.2%	13.8%	18.7%	23.2%	22.2%	100.0%

20歳代の女性が多いことが特徴である。若年層の構成比の高さは、会社組織において役職を経験していない人が多い可能性を示している。

次のクロス表を見てわかるように、女性の人数の方が多くても関わらず役職に就いている人の数は男性よりも少ない。また、代表者（巻末付録「調査対象団体のプロフィール」を参照）にいたっては、驚くべきことに今回調査した10の男女混合サークルのすべてが男性の代表者であった。これは偶然とは言い難いものである。つまり、役職については、趣味的サークルにおいても日常生活のジェンダーを引きずっていると考えられる。集団内の活動において仮に男女平等がなされていても、また、役職に就くことに当人の意志が必要であったとしても、役職の面から見た趣味的サークルは必ずしも男女の関係が同じであるとはいえない。

「役職に就いているか」と性別、年齢とのクロス表

年齢と役職の有無と性別のクロス表

性別				役職の有無		合計
				役職に就いている	役職に就いていない	
男性	年齢	20歳代	度数	2	8	10
			年齢の%	20.0%	80.0%	100.0%
	30歳代	度数	4	11	15	
		年齢の%	26.7%	73.3%	100.0%	
	40歳代	度数	14	8	22	
		年齢の%	63.6%	36.4%	100.0%	
	50歳代	度数	10	13	23	
年齢の%		43.5%	56.5%	100.0%		
60歳以上	度数	7	16	23		
	年齢の%	30.4%	69.6%	100.0%		
	合計	度数	37	56	93	
		年齢の%	39.8%	60.2%	100.0%	
女性	年齢	20歳代	度数	3	31	34
			年齢の%	8.8%	91.2%	100.0%
	30歳代	度数	5	8	13	
		年齢の%	38.5%	61.5%	100.0%	
	40歳代	度数	6	10	16	
		年齢の%	37.5%	62.5%	100.0%	
	50歳代	度数	1	23	24	
年齢の%		4.2%	95.8%	100.0%		
60歳以上	度数	3	15	18		
	年齢の%	16.7%	83.3%	100.0%		
	合計	度数	18	87	105	
		年齢の%	17.1%	82.9%	100.0%	

4. 他の団体への所属 (Q21)

年齢と他の団体への所属のクロス集計では、はっきりとした傾向を見て取ることができる。年齢とともに他団体への所属が増えていくのである。60歳以上では、実に4人に3人もの人が他の団体との掛け持ちである。性別とのクロスでは有為な差が認められなかったため、他団体への所属は年齢が一つの決定要因になっているといえる。理由としては可処分時間の多少が考えられる。それは「ゆとりの有無」と「労働時間」の回答（巻末付録3. 2を参照）が同じような傾向を示しているからである。

クロス表

			他の団体への所属		合計
			所属している	所属していない	
年齢	20歳代	度数	22	52	74
		年齢の%	29.7%	70.3%	100.0%
	30歳代	度数	22	44	66
		年齢の%	33.3%	66.7%	100.0%
	40歳代	度数	28	30	58
		年齢の%	48.3%	51.7%	100.0%
	50歳代	度数	39	39	78
		年齢の%	50.0%	50.0%	100.0%
	60歳以上	度数	60	20	80
		年齢の%	75.0%	25.0%	100.0%
合計		度数	171	185	356
		年齢の%	48.0%	52.0%	100.0%

※ カイ 2 乗検定による漸近有為確率は.000

第三節 調査項目同士のクロス集計

1. 「生活の満足度」とのクロス

まず、生活の満足度について検討してみる。今後の生活の仕方を尋ねた質問において、「毎日の生活を充実させて楽しむ」と回答した人の 89.1%が現在の生活に「満足」としていると答えている。

生活の満足度 (Q25) と今後の生活の仕方 (Q32) とのクロス表

クロス表

			今後の生活の仕方		合計
			将来に備える	毎日の生活を楽しむ	
生活の満足度	満足	度数	41	164	205
			20.0%	80.0%	100.0%
		69.5%	89.1%	84.4%	
	不満	度数	18	20	38
			47.4%	52.6%	100.0%
		30.5%	10.9%	15.6%	
合計		度数	59	184	243
			24.3%	75.7%	100.0%
			100.0%	100.0%	100.0%

※ カイ 2 乗検定の連続修正による漸近有為確率は.001

次に、3つの側面における満足度が生活の満足度にどう関わっているかを検討する。いずれも、カイ2乗検定の連続修正による漸近有為確率は.000であった。

収入・所得 (Q26-1)

クロス表

			所得・収入		合計
			満足	不満	
生活の満足度	満足	度数	172	82	254
			67.7%	32.3%	100.0%
			95.6%	62.1%	81.4%
	不満	度数	8	50	58
			13.8%	86.2%	100.0%
			4.4%	37.9%	18.6%
合計		度数	180	132	312
			57.7%	42.3%	100.0%
			100.0%	100.0%	100.0%

自動車、電気製品、家具などの耐久消費財 (Q26-2)

クロス表

			耐久消費財		合計
			満足	不満	
生活の満足度	満足	度数	228	35	263
			86.7%	13.3%	100.0%
			86.4%	61.4%	81.9%
	不満	度数	36	22	58
			62.1%	37.9%	100.0%
			13.6%	38.6%	18.1%
合計		度数	264	57	321
			82.2%	17.8%	100.0%
			100.0%	100.0%	100.0%

レジャー・余暇生活 (Q26-3)

クロス表

			余暇生活		合計
			満足	不満	
生活の満足度	満足	度数	243	31	274
			88.7%	11.3%	100.0%
			91.4%	47.7%	82.8%
	不満	度数	23	34	57
			40.4%	59.6%	100.0%
			8.6%	52.3%	17.2%
合計		度数	266	65	331
			80.4%	19.6%	100.0%
			100.0%	100.0%	100.0%

以上から生活の満足度の関係において、「収入・所得」、及び「レジャー・余暇生活」は強い関連が認められ、「自動車、電気製品、家具などの耐久消費財」もある一定の関連がみられた。現在の「所得・収入」に満足している人の多くが生活も満足しているということは、世帯収入がより多ければ生活の満足度も上昇するという仮説を立てることができる。しかし、今回の調査結果では世帯収入と生活の満足度のクロス集計では有為な差が認められなかった。年齢と共に生活の満足度は上昇したが、世帯収入は当然のことながら上昇しない。したがって、「所得・収入」の満足度は年齢とともに上昇していると推測される。実際に40歳代と50歳代を境にし、前者が40%代、後者が70%代の満足度を示している。つまり今回の母集団においては、生活の満足度は実際の世帯収入よりも現在の収入に満足しているかどうか大きな鍵となっているのである。

2. 「活動への参加で生活全体の充実感が高まっているか」と、「団体に所属していて不満に思うことは何か」の問いに「特に不満はない」を選択した回答とのクロス集計

クロス表によると、「特に不満はない」を選択した人の97.8%が活動への参加と生活の満足度は「関係ある」と答えている。一方、所属団体に対して何らかの不満を抱いている人のそれは87.9%である。その中で特に数値を下げている原因となっているものは、「仲間との意見が合わない」(76.0%)と「団内の人間関係がうまくいかないこと」(75.0%)である。いずれも「人間関係」である点が興味深い。

(Q17) と (Q16) の6を選択した人のクロス表

活動への参加と生活の満足度と特に不満はないのクロス表

		特に不満はない		合計
		非選択	選択	
活動への参加と生活の満足度	関係ある	94 29.5%	225 70.5%	319 100.0%
	関係ない	13 72.2%	5 27.8%	18 100.0%
合計		107 31.8%	230 68.2%	337 100.0%
		87.9%	97.8%	94.7%
		12.1%	2.2%	5.3%
		100.0%	100.0%	100.0%

※ カイ2乗検定の連続修正による漸近有為確率は.000

3. 連帯感（Q6）とのクロス集計

連帯感は集団の凝集性とも関わる重要な事柄である。第四章の第三節でも述べたが、個々の成員に尋ねた連帯感の質問の結果が、総体としてその集団の連帯感と考えられる。

次のクロス表から、各ジャンルで連帯感が異なることがわかる。これは、活動内容によって連帯感の水準がある程度決定されていることを示している。

ジャンルと連帯感の有無のクロス表

ジャンル	項目	度数	連帯感の有無		合計
			連帯感がある	連帯感がない	
将棋	度数	30	7	37	
		81.1%	18.9%	100.0%	
コーラス	度数	40	6	46	
		87.0%	13.0%	100.0%	
登山	度数	32		32	
		100.0%		100.0%	
エアロビクス	度数	16	14	30	
		53.3%	46.7%	100.0%	
ダンス	度数	38	3	41	
		92.7%	7.3%	100.0%	
バードウォッチング	度数	20	6	26	
		76.9%	23.1%	100.0%	
野球	度数	28	1	29	
		96.6%	3.4%	100.0%	
テニス	度数	34	3	37	
		91.9%	8.1%	100.0%	
バレーボール	度数	29	1	30	
		96.7%	3.3%	100.0%	
器楽演奏	度数	41	18	59	
		69.5%	30.5%	100.0%	
合計	度数	308	59	367	
		83.9%	16.1%	100.0%	

※ カイ2乗検定による漸近有為確率は.000

連帯感があると答えた人のうちの96.6%が、活動への参加と生活の満足度との関連を認めている。このことは、まとまりのある団体に所属している人の方が、参加によって生活の満足度が高まっていることを示唆している。

連帯感と（Q17）とのクロス表

クロス表

	連帯感の有無		合計
	連帯感がある	連帯感がない	
活動への参加と生活の満足度 関係ある 度数	280	45	325
	86.2%	13.8%	100.0%
	96.6%	84.9%	94.8%
関係ない 度数	10	8	18
	55.6%	44.4%	100.0%
	3.4%	15.1%	5.2%
合計 度数	290	53	343
	84.5%	15.5%	100.0%
	100.0%	100.0%	100.0%

※ カイ 2 乗検定の連続修正による漸近有為確率は.002

連帯感と活動への積極的な参加には強い関連がある。その集団に連帯感があると考えている人は、集団の活動にも積極的に参加している。つまり、凝集性の高い集団は、成員も積極的に活動に参加するという好循環をつくりだしており、そのことから集団にとって連帯感がいかに重要なものであるかを知ることができる。

連帯感と（Q12）とのクロス表

連帯感の有無と活動への積極的な参加のクロス表

	活動への積極的な参加		合計
	積極的に参加	積極的でない	
連帯感の有無 連帯感がある 度数	289	16	305
	94.8%	5.2%	100.0%
	86.3%	55.2%	83.8%
連帯感がない 度数	46	13	59
	78.0%	22.0%	100.0%
	13.7%	44.8%	16.2%
合計 度数	335	29	364
	92.0%	8.0%	100.0%
	100.0%	100.0%	100.0%

※ カイ 2 乗検定の連続修正による漸近有為確率は.000

¹ 総理府広報室「社会意識に関する世論調査」平成9年12月4日～12月17日実施、調査員による面接聴取。層化2段無作為抽出法。有効回収数7,110人、有効回収率71.1%。

第七章 調査結果 3 一類型化による分析と調査結果のまとめ

第一節 集団の非公式活動 <類型化3>

今回の調査において、各団体の代表者と成員のいずれに対しても、非公式活動についての質問を行っている。非公式活動とは、その団体の名目となっている通常の活動以外のことを指している。共通の質問は非公式活動の頻度と具体的な内容である。回答をみると、各団体とも様々な非公式活動を行っていることがよく分かる。もっとも、集団の凝集性を高めようとするならば当然のことであろう。代表者と成員の回答で具体的に挙げた内容は、飲み会（新年会、忘年会、歓迎会などを含む）、旅行（日帰りを含む）、ピクニック、ハイキング、カラオケ、花見、ボーリング、ゴルフ、食事会、バーベキュー、スキー、キャンプ、麻雀、つり、ビリヤード、などである。これらを用いて各団体を類型化したいと考える。なぜならば、非公式活動の多少はその団体の凝集性や目的に大きく関わっていると考えられるからである。ここでは、多岐にわたる非公式活動を行う集団を「多様娯楽型集団」、それと対照的に、非公式活動が少ない集団を「活動本位型集団」、両者の間を「中間型集団」と呼ぶことにする。具体的には、挙げられた活動の種類が1つ以下の場合を「活動本位型」、2から4までを「中間型」、5つ以上挙げた団体を「多様娯楽型」と分類する。こうして分けると、今回調査を行った25の団体のうち、「活動本位型」に属するのが7団体、「中間型」が11団体、「多様娯楽型」が7団体となった。サークルの活動形態による違いを統計的にみていく。

(Q1)

クロス表

		入団の容易さ		合計
		容易である	容易でない	
形態	多様娯楽型	度数 130	15	145
	形態の%	89.7%	10.3%	100.0%
	中間型	度数 149	6	155
	形態の%	96.1%	3.9%	100.0%
	活動本位型	度数 74	2	76
	形態の%	97.4%	2.6%	100.0%
合計	度数	353	23	376
	形態の%	93.9%	6.1%	100.0%

※ カイ2乗検定による漸近有為確率は.024

(Q2)

クロス表

			退団の容易さ		合計
			容易である	容易でない	
形態	多様娯楽型	度数	114	28	142
		形態の%	80.3%	19.7%	100.0%
	中間型	度数	135	16	151
		形態の%	89.4%	10.6%	100.0%
	活動本位型	度数	72	4	76
		形態の%	94.7%	5.3%	100.0%
合計		度数	321	48	369
		形態の%	87.0%	13.0%	100.0%

※ カイ2乗検定による漸近有為確率は.005

入・退団のしやすさを見ると、活動本位型に属している人の方が「入りやすく出やすい」と考えているようだ。

(Q2)

クロス表

			参加への催促		合計
			促す	促さない	
形態	多様娯楽型	度数	104	41	145
		形態の%	71.7%	28.3%	100.0%
	中間型	度数	83	66	149
		形態の%	55.7%	44.3%	100.0%
	活動本位型	度数	40	36	76
		形態の%	52.6%	47.4%	100.0%
合計		度数	227	143	370
		形態の%	61.4%	38.6%	100.0%

※ カイ2乗検定による漸近有為確率は.004

会員に対する参加への催促では、「多様娯楽型」が突出していることが分かる。「多様娯楽型」におけるこの数値は、前章では取りあげなかったが、「集会的趣味」の集団のそれに似ている(次のクロス表を参照)。つまり参加の催促については、「多様娯楽型集団」は「集会的趣味」の集団と一致するのである。これは同時に、2つの範疇の内容が近い可能性を示している。「集会的趣味」の活動は人数を必要とするので、会員に参加を促すことは容易に想像される。しかし、「多様娯楽型」が参加を促す理由は見あたらない。実際に詳しく見てみると、2つの範疇に属する団体がある程度、重なっていることが分かる。「集会的趣味」

の集団のうち「多様娯楽型」は4つ（全体は7）、「中間型」は7つ（全体は12）で、「活動本位型」はなかった。ここから分かることは、「集合的趣味」の集団はその性格上、どうしても集団の凝集性が必要である。したがって、それを高めるために様々な非公式活動を行って成員の連帯感を高めようとする（実際に高まっているかどうかは別として）のである。つまり、「多様娯楽型集団」が「集合的趣味」の集団なのではなく、「集合的趣味」の集団が結果的に「多様娯楽型」になっているのである、

「集合的趣味」の集団と「個人的趣味」の集団、「参加への催促」とのクロス表

個人・集合と参加への催促のクロス表

			参加への催促		合計
			促す	促さない	
個人・集合	集合的な趣味活動	度数 個人・集合の%	121 73.8%	43 26.2%	164 100.0%
	個人的な趣味活動	度数 個人・集合の%	106 51.5%	100 48.5%	206 100.0%
合計		度数 個人・集合の%	227 61.4%	143 38.6%	370 100.0%

※ カイ2乗検定の連続修正による漸近有為確率は.000

「個人的なつきあいのある人」の数についても比較してみる。(Q14)

クロス表

			親しい人の数					合計
			0~1人	2~3人	4~5人	6~10人	10人以上	
形態	多様娯楽型	度数	24	17	43	26	18	128
		形態の%	18.8%	13.3%	33.6%	20.3%	14.1%	100.0%
	中間型	度数	32	49	32	21	8	142
		形態の%	22.5%	34.5%	22.5%	14.8%	5.6%	100.0%
	活動本位型	度数	19	20	11	13	6	69
		形態の%	27.5%	29.0%	15.9%	18.8%	8.7%	100.0%
合計		度数	75	86	86	60	32	339
		形態の%	22.1%	25.4%	25.4%	17.7%	9.4%	100.0%

※ カイ2乗検定による漸近有為確率は.001

上のクロス表で分かるように「多様娯楽型」の方が親しい人の数も多い。親しい人の数と集団の規模は必ずしも関連がないので、この数字は信頼できよう。様々な非公式活動を行えば、それだけ成員同士が親しくなる機会も多くなるので、これは当然の結果といえる。

(Q17)

クロス表

			活動への参加と生活の満足度		合計
			関係ある	関係ない	
形態	多様娯楽型	度数	125	8	133
		形態の%	94.0%	6.0%	100.0%
	中間型	度数	142	3	145
		形態の%	97.9%	2.1%	100.0%
	活動本位型	度数	63	9	72
		形態の%	87.5%	12.5%	100.0%
合計		度数	330	20	350
		形態の%	94.3%	5.7%	100.0%

※ カイ2乗検定による漸近有為確率は.008

「生活の満足度との関連」で「中間型集団」がもっとも高い数値を示したことは意外であった。これは、趣味活動自体に喜びを感じるレベルと参加への催促とのバランスがもっともよい状態なのかもしれない。この意味では「中間型集団」は「中庸」といえるだろう。

次に、非公式活動と成員の満足度がどのような関係にあるのか、または関係がないのかについての考察を行う。

(Q25)

クロス表

			生活の満足度		合計
			満足	不満	
形態	多様娯楽型	度数	105	29	134
		形態の%	78.4%	21.6%	100.0%
	中間型	度数	120	25	145
		形態の%	82.8%	17.2%	100.0%
	活動本位型	度数	62	5	67
		形態の%	92.5%	7.5%	100.0%
合計		度数	287	59	346
		形態の%	82.9%	17.1%	100.0%

※ カイ2乗検定による漸近有為確率は.042

(Q26-1)

クロス表

			所得・収入		合計
			満足	不満	
形態	多様娯楽型	度数	63	69	132
		形態の%	47.7%	52.3%	100.0%
	中間型	度数	78	57	135
		形態の%	57.8%	42.2%	100.0%
	活動本位型	度数	45	17	62
		形態の%	72.6%	27.4%	100.0%
合計		度数	186	143	329
		形態の%	56.5%	43.5%	100.0%

※ カイ2乗検定による漸近有為確率は.005

(Q26-2)

クロス表

			耐久消費財		合計
			満足	不満	
形態	多様娯楽型	度数	104	28	132
		形態の%	78.8%	21.2%	100.0%
	中間型	度数	112	28	140
		形態の%	80.0%	20.0%	100.0%
	活動本位型	度数	56	8	64
		形態の%	87.5%	12.5%	100.0%
合計		度数	272	64	336
		形態の%	81.0%	19.0%	100.0%

※ カイ2乗検定による漸近有為確率は.323

(Q26-3)

クロス表

			余暇生活		合計
			満足	不満	
形態	多様娯楽型	度数	105	29	134
		形態の%	78.4%	21.6%	100.0%
	中間型	度数	107	36	143
		形態の%	74.8%	25.2%	100.0%
	活動本位型	度数	61	7	68
		形態の%	89.7%	10.3%	100.0%
合計		度数	273	72	345
		形態の%	79.1%	20.9%	100.0%

※ カイ2乗検定による漸近有為確率は.044

以上、4つの満足度を尋ねた質問はすべて「多様娯楽型」よりも「活動本位型」の方が満足度が高いという結果が出た（ただし、「耐久消費財の満足度」とのクロスは検定結果が有為でない）。また、「余暇生活の満足度」を除くと、残りはすべて「多様娯楽型」から「中間型」を経て「活動本位型」に向かって満足度が高まっている。この数値の動きをみて思い出すものがある。それは、今回の調査結果における「生活の満足度」と「年齢」とのクロス集計である。この結果は年齢とともに生活の満足度も比例して上昇していくものである。そこで、それぞれの形態に属する人たちの年齢をみてみることにする。

年齢と形態のクロス表

		形態			合計
		多様娯楽型	中間型	活動本位型	
年齢	20歳代	度数 40	35		75
		年齢の % 53.3%	46.7%		100.0%
	30歳代	度数 28	36	2	66
		年齢の % 42.4%	54.5%	3.0%	100.0%
	40歳代	度数 25	30	4	59
		年齢の % 42.4%	50.8%	6.8%	100.0%
	50歳代	度数 23	25	35	83
		年齢の % 27.7%	30.1%	42.2%	100.0%
	60歳以上	度数 26	24	35	85
		年齢の % 30.6%	28.2%	41.2%	100.0%
合計		度数 142	150	76	368
		年齢の % 38.6%	40.8%	20.7%	100.0%

※ カイ2乗検定による漸近有為確率は.000

「活動本位型」の主力は50歳代以上であり、それ以下の年齢層はほとんどそこに所属していない。つまり、「活動本位型」における成員の満足度については、ある程度年齢の影響があると思われる。また、「多様娯楽型」と「中間型」に限って詳細に調べたが、有為な差異は導かれなかった。したがって、成員の満足度と非公式活動との関連は見出されなかったことになる。

ちなみに、次の第二節でみる「男女混合サークル」10団体のうち8団体が「多様娯楽型」か「中間型」であった。両性がいたほうがより多くの非公式活動を行うようである。また、「男女混合サークル」で「活動本位型」に分類された2団体はいずれも社交ダンスであった。また、公式度との関係についても次節で検討する。

第二節 男女混合サークルと単一性サークル <類型化4>

第六章の第二節で指摘したが、集団が単一の性によって成り立っている場合と両性を含む場合では、成員の考え方や集団そのものに違いがあることが考えられる。今回の調査対象において、成員のほとんどを男性が占めている団体は9、ほとんどを女性が占めている団体は6、両性で成り立っている団体は10であった。ここでは、単一性の団体を男性サークルと女性サークルに分けた上で、男女混合サークルとの比較・検討を行う。

まず、各グループにおける連帯感（Q6）の違いについてみる。

サークル(性別)と連帯感の有無のクロス表

	連帯感の有無				合計	
	強い連帯感がある	ある程度連帯感がある	あまり連帯感がない	ほとんど連帯感がない		
サークル(性別)	男性サークル	度数 36	62	7	2	107
		サークル(性別)の% 33.6%	57.9%	6.5%	1.9%	100.0%
	女性サークル	度数 10	30	16	2	58
	サークル(性別)の% 17.2%	51.7%	27.6%	3.4%	100.0%	
	混合サークル	度数 47	123	30	2	202
	サークル(性別)の% 23.3%	60.9%	14.9%	1.0%	100.0%	
合計	度数 93	215	53	6	367	
	サークル(性別)の% 25.3%	58.6%	14.4%	1.6%	100.0%	

※ カイ2乗検定による漸近有為確率は.005

違いを明確にするために連帯感を2分すると以下のようなになる。

クロス表

	連帯感の有無		合計	
	連帯感がある	連帯感がない		
サークル(性別)	男性サークル	度数 98	9	107
		サークル(性別)の% 91.6%	8.4%	100.0%
	女性サークル	度数 40	18	58
	サークル(性別)の% 69.0%	31.0%	100.0%	
	混合サークル	度数 170	32	202
	サークル(性別)の% 84.2%	15.8%	100.0%	
合計	度数 308	59	367	
	サークル(性別)の% 83.9%	16.1%	100.0%	

※ カイ2乗検定による漸近有為確率は.001

男性サークルの連帯感が強く、女性サークルのそれが弱い。男女混合サークルはその中間に位置している。

また、男女混合サークルの成員における男女別の連帯感を見ると次のようになる。

加表

		連帯感の有無		合計	
		連帯感がある	連帯感がない		
性別	男性	度数	80	13	93
		性別の%	86.0%	14.0%	100.0%
	女性	度数	87	18	105
		性別の%	82.9%	17.1%	100.0%
合計		度数	167	31	198
		性別の%	84.3%	15.7%	100.0%

※ カイ2乗検定の連続修正による漸近有為確率は.678

したがって、男女混合サークルにおいては性別による連帯感の違いはみられないが、男性サークルと女性サークルでは明確な差が生じている。つまり、単純に性別によって連帯感に対する考え方が異なるのではなく、そのサークルの成員が単一の性によって成り立っている場合、それに違いが生じるのである。

最後に、集団の公式度と非公式活動との関係について言及する。男女混合サークルにおける公式度は非常に高く、高が7、中が1、低が2（これはいずれも社交ダンス）であった。この公式度の高さが、前節で取りあげた非公式活動と関連を持っている。「多様娯楽型」に属する団体の公式度は、高が4、中が2、低が1。「中間型」は、高が3、中が6、低が3。「活動本位型」は、高が0、中が2、低が4であった。「活動本位型」から「多様娯楽型」に向かって公式度が高まっているのが分かる。そして、男女混合サークルの公式度の高さがそのまま「多様娯楽型」の公式度に反映されている。具体的には、「多様娯楽型」に分類される男女混合サークルは5つあるが、このうち4つの公式度が高で、残りの1つが中であった。したがって以上から分かることは、「多様娯楽型」に属する男女混合サークルの公式度は高い、ということである。

第三節 音楽サークルと集合的スポーツサークルとの比較 <類型化5>

次に、音楽サークルと、集合的に行われるスポーツサークルという二つの対照的なグループを比較してみる。この比較を行おうとした理由は、音楽サークルの公式度が高かったのに対し集合的スポーツのそれは比較的lowかったので、両者の間に何らかの違いがあるのではないかと考えたからである。第五章の分析で、両者はいずれも『『集合的趣味』の集団』と分類されていたものである。ちなみに「音楽サークル」を「集合的音楽サークル」と呼ばないのは、今回調査を行った音楽サークルはすべて集合的な活動を行っていたからである。もっとも、合奏を行わない音楽サークルというものは想像しがたい。

音楽サークルのジャンルはコーラス（3団体）と器楽演奏（2団体）で、計5団体である。集合的スポーツサークルは、野球（3団体）、バレーボール（3団体）の2ジャンル、6団体である。

まず、次の表にみる通り音楽サークルの方が幅広い年齢層によって構成されていることを前提として考察を行う必要がある。

スポーツと音楽と年齢のクロス表

			年齢					合計
			20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	60歳以上	
スポーツ と音楽	音楽	度数	36	17	18	14	23	108
			33.3%	15.7%	16.7%	13.0%	21.3%	100.0%
	スポーツ	度数	27	24	4	3		58
			46.6%	41.4%	6.9%	5.2%		100.0%
合計		度数	63	41	22	17	23	166
			38.0%	24.7%	13.3%	10.2%	13.9%	100.0%

※ カイ2乗検定による漸近有為確率は.000

次に出席に対する集団の催促についてみる。(Q2)

クロス表

			参加への催促		合計
			促す	促さない	
音楽 とスポーツ	音楽サークル	度数	85	21	106
		音楽とスポーツの%	80.2%	19.8%	100.0%
	スポーツサークル	度数	36	22	58
		音楽とスポーツの%	62.1%	37.9%	100.0%
合計		度数	121	43	164
		音楽とスポーツの%	73.8%	26.2%	100.0%

※ カイ2乗検定の連続修正による漸近有為確率は.019

イメージとしてはスポーツ系のサークルの方が出席を促しそうなのだが、実際は音楽サークルの方が参加者は出席を促されていると感じている。これは、実際に集団が出席を促しているのか、成員がそう感じているだけなのかは分からない。しかし、代表者の回答によると、出席率の平均は音楽サークルの方が高かった。促した結果なのか、より高い出席率を目指しているのかは分からない。ただ、音楽サークルの方が成員の代替可能性が低いためにより出席を促そうとすることは予想され、その結果、成員は出席を促されると感じ、まだ実際に促されるのではないだろうか。

クロス表

			連帯感の有無		合計
			連帯感がある	連帯感がない	
音楽とスポーツ	音楽サークル	度数 音楽とスポーツの%	81 77.1%	24 22.9%	105 100.0%
	スポーツサークル	度数 音楽とスポーツの%	57 96.6%	2 3.4%	59 100.0%
合計		度数 音楽とスポーツの%	138 84.1%	26 15.9%	164 100.0%

※ カイ2乗検定の連続修正による漸近有為確率は.002

「集団に連帯感を感じるか」という質問であるが、この数値は意外な印象を受けた。いずれも集合的な活動にも関わらず、音楽サークルとスポーツサークルでこのような明確な差が出るとは思わなかったからである。後にみるように、スポーツサークルは若年層だけだが、音楽サークルは各年齢層にバランスよく人がいる。したがって、比較的年齢の高い層の連帯感が低いという仮説が立てられる。そこで、各セルの度数は少なくなるが、年齢別のクロスをみてみることにする。

スポーツと音楽と連帯感の有無と年齢のクロス表

度数		連帯感の有無		合計
		連帯感がある	連帯感がない	
20歳代	音楽	22	13	35
	スポーツ	26	1	27
合計		48	14	62
30歳代	音楽	11	5	16
	スポーツ	22	1	23
合計		33	6	39
40歳代	音楽	17	1	18
	スポーツ	4		4
合計		21	1	22
50歳代	音楽	12	2	14
	スポーツ	3		3
合計		15	2	17
60歳以上	音楽	19	3	22
	合計	19	3	22

仮説とは裏腹に、連帯感がないと答えていたのは20、30歳代であった。また、なぜ同じ若年層なのに、スポーツサークルの連帯感が高く、音楽サークルの連帯感は低いのか。この原因は「所属して不満に思うこと」の質問によってある程度推測することができる。連帯感と不満の有無には関連が認められている。不満のない人の30.5%が「強い連帯感がある」と答えているのに対し、不満を持っている人のそれは14.8%であった(巻末付録3.3を参照)。そして、不満の理由を述べた自由回答(その他)を読むと、音楽サークルの不満には「若者の意見が通らないこと」という回答が複数みられた。つまり、幅広い年齢層を抱えていることは世代による軋轢を生じやすく、そのために連帯感が低くなる可能性があるのだ。この結果は、幅のある年齢層をまとめることの難しさを示している。

次に他団体への所属についてみる。(Q21)

クロス表

			他の団体への所属		合計
			所属している	所属していない	
音楽とスポーツ	音楽サークル	度数	54	54	108
		音楽とスポーツの%	50.0%	50.0%	100.0%
	スポーツサークル	度数	16	43	59
		音楽とスポーツの%	27.1%	72.9%	100.0%
合計		度数	70	97	167
		音楽とスポーツの%	41.9%	58.1%	100.0%

※ カイ2乗検定の連続修正による漸近有為確率は.007

年齢の影響は前章で述べたが、結果を細かく検討すると、音楽サークルに所属する人はすべての年齢層で他の団体との掛け持ちをしている人の割合が高くなっている。つまり、活動が音楽かスポーツかによって他団体へ所属する確率が異なるのである。

スポーツと音楽と他の団体への所属と年齢のクロス表

年齢		他の団体への所属		合計
		所属している	所属していない	
20歳代	音楽	11	25	36
	スポーツ	5	21	26
合計		16	46	62
30歳代	音楽	9	8	17
	スポーツ	6	18	24
合計		15	26	41
40歳代	音楽	7	11	18
	スポーツ	3	1	4
合計		10	12	22
50歳代	音楽	6	8	14
	スポーツ	1	2	3
合計		7	10	17
60歳以上	音楽	21	2	23
	合計	21	2	23

以上、「音楽サークル」と「集会的スポーツサークル」の差異について考察してきた。どちらも「集会的趣味」の集団であるにもかかわらず、成員と集団との関わりに様々な違いがあった。また、同世代集団である集会的スポーツサークルの方が、比較的連帯感を保ちやすいことも分かった。ちなみに、各種の満足度とのクロスでは有為な結果は得られなかった。

第四節 調査結果からみた趣味的サークル

この節では趣味的サークルについての新たな発見について言及し、また、調査結果のまとめを行う。

1. 小集団としての趣味的サークルと規模の決定について

調査の結果によって私が序論で定義した「趣味的サークル」は、現実的な規模として小集団であることが明らかになった。趣味のジャンルによっても異なるが、活動が30名を超えることは稀である。たとえ団員が50名いたとしても、実際の参加人数は20名から30名になることが多い。つまり名簿上の人数が多くても、いわゆる「幽霊団員」が多数含

まれたり、低い参加率のもとで参加者が入れ替わったりして、活動人数は上述の数に落ち着くのである。今回の調査で例外となったのはテニス1団体と、器楽演奏2団体である。しかし、前者は集団内に公式の下位グループを形成しており、小集団の集まりとして全体が成り立っている。後者は活動上ある一定の人数を必要とし、また同時に集団内に何らかの小グループ（楽器ごと、または木管、金管など）を必然的に形成している。したがって、これらについては必ずしも例外と考える必要はない。また、バードウォッチングの集団も名簿上の人数は巨大であったが、実際に集団として活動している人数は先述の範囲に収まっていた。

趣味的サークルが小集団を形成する理由として、ここで新たに「快適人数」と「必要人数」の概念を導入する。快適人数とは、人が集団の中で活動していてストレスを感じない人数のことである。あまり人数が少ないと個人同士の人間関係がすべてになってしまって集団活動という感覚が得られず、逆に人数が多すぎると成員個人が匿名化され疎外感を味わったり、安定が得られず内部に派閥が発生する可能性がある。この問題を解決している見事な例が先ほどのテニスサークルである。全体としての規模は大きいものの、内部を10の小グループに分割し、各グループにリーダーをおくことで集団としての統一を保っているのである。

必要人数とはその活動を行う上で物理的かつ現実的に必要な人数を示し、必要不可欠な規定人数とは異なる。例えば、ルール上は野球なら最低9人、バレーボールなら6人いればゲームを行うことはできる。しかし、実際に集団として趣味活動を行うためには、この人数では不可能である。趣味的サークルの活動に常に全員が集まることはあり得ないし、ゲーム中は交代要員も必要である。スポーツだけではない。音楽サークルでも、スコアにあるパートの数だけの人数で行うことは、演奏上さまざまな制約を受けるためまず考えられない。したがって、必要人数とは規定人数を若干上回った「現実的な活動に必要な人数」のことを指している。

しかし、趣味的サークルにおいて、スポーツにしても音楽の演奏にしても必要人数が規定人数を大幅に上回ることはない。それでは個人の活躍の場が減ってしまうからである。音楽の演奏でも人数が多すぎればバランス上、出番が減らされてしまうし、スポーツにいたってはまったく出番がないことも十分にあり得る。したがって、必要人数が規定人数（活動上、不可欠な最低人数）の2倍になることはほとんどなく、現実的には規定人数の2、3割増しが必要人数として安定したところである。

必要人数はその性質上、具体的な人数をイメージすることが可能である。しかし、快適人数を具体的に挙げることは困難である。第一章で取りあげたインフォーマル・グループの人数を一応のメルクマルとするならば、15から20人程度ということになるだろうか。今回の調査から明確な答えを見出すことはできないが、少なくとも男女混合の集団と単一性の集団では快適人数が異なると思われる。調査者自身の感覚だが、おそらく前者の方が多いであろう¹。

ここで指摘が必要なことは、「必要人数」と「快適人数」の適用はその集団の活動内容によって決定されることである。必要人数の概念が有効なのは、第五章で挙げた「集合的趣味」の集団（類型化2）に対してである。「個人的趣味」の集団は、そもそも規定人数などないのだから必要人数の影響を受けようがない。一方、快適人数の概念は「個人的趣味」の集団に対して有効である。これらの集団は必要人数の影響を受けないために、集団の規模はその参加者が快適か否かによって決定される。したがって、いずれの集団も必要人数、または快適人数の影響を受けることにより、集団として安定的な規模に落ち着くものと考えられる。

次にサークルの特徴から成員の紐帯と参加人数について考えてみる。本章第一節では、今回調査を行った団体について非公式活動を基準として3つのグループに分けた（類型化3）。多様娯楽型集団は、その団体に所属しているメンバーで様々な娯楽を楽しんでいる。団の目標達成と共に、人とのふれあいや豊かな人間関係も重要な目的である。また、団内のトラブルにも強く、一つの問題で蜘蛛の子を散らすように団員がいなくなることは考えにくい。しかし、先述した快適人数の影響を常に受け、派閥ができない程度の人数にとどまることが多い。それに対して活動本位型集団は、活動そのものに見出した人々の集団であるため人間関係はドライになりがち²で、趣味活動と直接関係のないその他の娯楽はほとんど行われぬ。参加者の動機が活動そのものにある以上、他の集団への代替可能性が高く、何らかの問題で成員がすぐにやめていくことがあり得る。中間型集団はその名の通り両者の間に位置すると考えてよいが、集団への参加と生活の満足度との関連を最も多くの方が認めているグループでもある。

「集合的趣味」の集団が必要人数の影響を、「個人的趣味」の集団が快適人数の影響をそれぞれ受けることはすでに述べた。さらに検討を進めると、必要人数の影響を受ける「集合的趣味」の集団の方が相対的により「多様娯楽型」で、快適人数の影響を受ける「個人的趣味」の集団の方がより「活動本位型」であることが分かった。前者は集団の紐帯を維

持するために多くの非公式活動（娯楽）を行うのに対し、後者は活動上、紐帯を必要としないためだと考えられる。

以上の議論をまとめると次のようになる。

・「集合的趣味」の集団 → 多様娯楽型（非公式活動によって紐帯を維持）
（必要人数の影響化にある）

・「個人的趣味」の集団 → 活動本位型（個人的な趣味活動なので紐帯は不要）
（快適人数の影響下にある）

つまり、趣味的サークルにおいて集団の規模、活動内容、非公式活動は密接な関わりを持っているのである。

2. 新団員の定着と集団の歓迎について

新しくその集団に所属した人が、自分の居場所を見つけられなかったり孤独を感じたしたら、その多くは集団を離れていってしまうだろう。なぜならば、誰からも強制されない以上、無理をしてまでその集団にとどまる必要はないからである。したがって、趣味的サークルにおいて新しい団員が定着するか否かは、初参加から最初の1、2回目にかかっているといえる。ここまでの話は、自らの経験則と理論的な可能性を述べたものだが、ここに「快適人数」と「必要人数」の概念を取り入れて考えてみる。その集団の規模が安定的に維持されている状態のところへ新たに個人が参加しようとするれば、表面上は歓迎されていても（個々の団員が心から歓迎していても）、集団の力学によって受け入れられない可能性がある。もしかしたら、より分かりやすく排除の方向に進むかもしれない。それは「快適人数」によって成り立っている集団であっても、「必要人数」の影響下にある集団にとっても同じことである。「快適人数」によって安定している集団ならば、団員が増えることによって、集団にとってマイナスに作用するインフォーマル・グループ（例えば派閥など）が形成されるかもしれない。また、「必要人数」が働いている集団では、現団員の活躍の場が奪われる可能性の大きさによって、排除の論理が成り立つことも十分に考えられる。もちろん、常に例外はあり得る。例えば、「集合的趣味」の集団に技術的に優れた人が新しく入ってくれば、ふつうは歓迎される。ただ、ここで考えなければならないことは、その集

団が趣味的サークルである以上「競技で勝つことが至上命題ではない」ということである。つまり、技術的に優れた人が必ずしも集団に受け入れられるとは限らないのだ。いいかえれば、日常世界の常識が趣味的サークルにおいて同様に作用するわけではないのである。新参加者が歓迎されるもう一つの例外を想定してみよう。ある人が安定的な集団に入ったため、本質的に歓迎されなかったとする。しかし、この人は自らのパーソナリティによって次第に集団にとけ込み、そして受け入れられていくようになる。このようなことは十分に起こり得ることである。この場合、2つの可能性が考えられる。第一に、この増加が集団として安定を覆すものであったら、代替の誰かが知らない間にその集団を離れていく可能性である。第二に、この集団における安定的な人数の水準が上方に移動する可能性である。いずれにしても集団は安定的な人数に落ち着くはずである。なぜならば、繰り返しになるが、強制力のない趣味的サークルにおいて、集団の力学は何にも邪魔されることなく——学校や会社組織とは異なり——直接的に作用するからである。このように、「快適人数」と「必要人数」の概念は新入団員の定着についても適応することができるのである。

3. 趣味的サークルの凝集性

調査結果から、趣味的サークルの凝集性の高さを知ることができた。私は調査を行う前、趣味的サークルは自発的参加型集団であり、したがって成員に対し何の強制力ももたないので、中には非常に紐帯の緩い集団があるだろうと想像していた。もちろん公式度や非公式活動の有無によってそれぞれの集団によって違いはあった。しかし、総じてどの集団も私の予想よりはるかに凝集性が高かった。これは、集団を形成し維持していくためにはある一定の凝集性が必要であることを意味している。つまり、集団としてのまとまりがなければ、その集団の成員の満足度が低くなり、満足度が低くなれば成員は集団から離れていってしまうのである。

集団の凝集性は成員の欲求をいかに満たすかが重要なポイントであるが、単に集団として様々な娯楽を行えば高くなるというものではない。その証拠に「多様娯楽型集団」と「活動本位型集団」の連帯感に違いはなかった。むしろ、集団の凝集性は意図的に高められるものではなく、その集団の活動内容や形態によってある程度決定されるものなのである。また、連帯感のある集団に所属している人の方が生活の満足度が高く、充実感も感じていることから、集団の凝集性は個々の成員にとって心を満たすための大切な要因であるといえよう。

4. 趣味的サークルに所属する人のパーソナリティ

趣味的サークルに所属する人とそうでない人では何が異なるであろうか。単純に考えれば、前者はいわゆる「有閑階級」というものが思い浮かぶ。しかし、今回の調査結果は必ずしもそうではなかった。世帯収入は総理府調査のものよりも若干高かったので、参加者の可処分所得はある程度高いかもしれないが、収入に関する満足度と耐久消費財に関する満足度は総理府の結果とかけ離れていなかった。また時間的なゆとりに関しても、趣味活動が可能なのだからある程度のゆとりがあることは当然なのだが、総理府の結果より若干高い程度で、大きな差はみられない。労働時間の短い人の方がより集団内の役職に就いているかといえば、そうでもなく、「積極的な参加」に関係してくるかといえば、それもまたそういいきれない。目立った違いが生じたのは「他の団体への所属」と「(時間的に) ゆとりがあるか」の質問くらいである。したがって、これだけが可処分時間の影響を受けるといえるのである。つまり、労働時間の長短は趣味活動を「行うか否か」という最初の関門においてはあまり影響していないのである。したがって、単純に、環境的に恵まれた人が趣味的サークルに所属しているとはいえない。

では、本調査の結果と総理府のそれとは本質的に何が異なるのだろうか。ものの考え方という意味でのパーソナリティに、両者の違いを見出すことができる。総理府調査との比較用質問項目の多くは、社会や仕事についての考え方を尋ねたものである。詳細は第六章に載せたが、本調査の対象者の方が活動的で、明らかに「楽しむ」ことに対して貪欲である。これこそが個人を趣味活動に向かわせる原動力と考えられるのである。

¹ 男女混合の集団と単一性の集団における快適（安定）人数に関する議論はあまりみられない。この種の議論がフィールドをもとに行われていなかったからだと考えられる。

² 調査結果によると、活動本位型集団の参加者の方が多様娯楽型集団の参加者よりも参加年数が短く、親しい人の数も少なかった。

Ⅱ部 おわりに

Ⅱ部では趣味的サークルに対して行った調査の結果について述べた。分析を進めるうえでネックとなったのは、趣味的サークルはその活動のジャンルによって年齢構成が異なることである。このことが調査対象の様々な比較を非常に困難なものにした。しかし、団体の選出を無作為で行ったうえでの結果である以上、実際にそのジャンル特有の年齢構成があるものと考えられる。野球やバレーボールにおいて、もちろん年齢の高い人々はいらるであろうが、それらの人は比較的少数であると考えた方が自然であろう。また、これらのスポーツでは音楽サークルと違って、結成当初から同世代集団を形成する傾向が強いことも分かった。この、ジャンル固有の年齢構成が持続的なものなのか、現代の日本における一過性のものなのかは、今回の調査から知ることはできない。しかし、現実的にはその両方の側面とも併せもっているのであろう。例えば、将棋の年齢別活動人口をみると若年層が薄くなっていることが分かる。したがって、将棋に関しては次世代の再生産が行われなかったために年齢構成が高くなったといえる。それに対して、動きの激しいスポーツにおいては、年齢とともに活動人口が減っていくのは当然である。したがって、ジャンルによって年齢構成が異なることは避けられない問題だったのである。

社会調査を行う過程では、調査結果には載らない様々な出来事があった。個々については述べないが、肌でその集団を感じたことは趣味的サークルを研究するうえで非常によい経験を得たように思う。もちろんバイアスのかかる可能性は否定しないが、それ以上により現実に沿った分析が可能になったと考える。

結論

本稿はⅠ部の第一章から第三章において小集団、自発的参加型集団、余暇論についての文献的なアプローチを行い、Ⅱ部の第四章から第七章では調査の概要をみてきた。これらはすべて趣味的サークルを立体的に捉えるために必要なプロセスである。ここではこれまでの議論を踏まえたうえで、趣味的サークルについて総括し、これからの豊かさについて考えてみたい。

1. 趣味的サークルの非日常性と準拠枠について

私は序論において、趣味的サークルは準拠集団には成り得ないが、準拠枠を形成する一助となるかもしれないと述べた。なぜ趣味的サークルは準拠集団となり得ないか。それは、趣味的サークルが非日常世界の活動だからである。準拠集団がその成員に与える準拠枠は日常世界での適応が前提である。つまり、この意味において趣味的サークルはマートンのいう準拠集団ではあり得ない。しかし、活動に参加している人は自らの集団をととても大切に思っているし、人によっては重要な自己実現の場となっていることも事実である。そのような人にとって、その集団は準拠枠的な何か——行動規範とまではいかなくとも、生活の満足感や精神的な支えなど——を与えてくれるものなのである。

それでは、趣味的サークルの非日常性とは何であろうか。それは、その活動が日常の活動と「時」、「場所」、「秩序」を異にする点である。つまり、余暇時間に、決められた場所に集い、その集団のルールに従うこと、まさにホイジンガのいう「遊び」である。これは日常を表す「ケ」に対して、「ハレ」と考えてもよいだろう。趣味的サークルの活動はこの「遊び」であり、そしてそれは明らかに非日常世界の活動なのである。非日常世界の「秩序」とは、その集団にある会員規則のことを指しているのではなく、日常世界の常識や属性がその世界内で同様には機能させない独自の規制のことを指している。例えば、会社の重役が野球チームにいたところで、打って、守って、走れなければその人はその「場」で活躍することはできない——職場のサークルではこの通りにはならないであろう。だから私は今回の調査から職場のサークルを除外した——はずである。弁護士が何と主張しようとも楽器から音が出なければ演奏会には出させてもらえない。仮に趣味的サークルの中に年功序列があったとしても、それは参加年数によるものであり、単に年が多いただけでは到底主張は受け入れられない。男女の関係についても同様である。日常で起こり得る男女差

別の問題は、趣味的サークルでは考えにくい。一旦その世界から離れて現実世界に戻れば別の様々な役割を持った人々も、趣味的サークルの中では特別な秩序に則って活動するのである。

一方で、日常世界を引きずっている部分もある。例えば主婦が活動時間に制約を受けたり、収入の違いが活動の幅を制限したりする。男女差別が起こらなくとも、日常の性役割を持ち込むことは十分にあり得る¹。現実社会の属性をまったく引きずらない個人というものは考えられないし、社会的な役割や地位が染みついたパーソナリティを完全に切り離すことは不可能である。たとえ趣味的サークルにおける活動が非日常世界のものであったとしても、趣味的サークルの存在自体は現実社会によって規定されている。個人の活動とは異なり、それが社会集団の一形態である以上、社会と切り離されて存在することはなく、したがって、2つの世界がまったく別なものとしてパラレルに進行するわけではないのである。

2. 社会における趣味的サークルの位置づけ

調査結果から、趣味的サークルが一定の役割を果たしていることが分かった。それは生活一般の満足度の高さからも読みとることができるし、活動への参加と生活の満足度をリンクさせている点からも窺い知ることができる。この趣味的サークルを社会というシステムの中でどのように位置づけることができるであろうか。高齢社会、市民社会、地域社会という3つの側面から検討したい。

今回、趣味的サークルにおける高齢者の満足度は非常に高いものであった。また、他の調査でも同様の結果が出ている²。高齢者における趣味活動が生活を豊かなものに行っていることは間違いない。物質的に満たされた今日、生活（人生）をより充実したものにするポイントは、フェイス・トゥー・フェイスで行われる豊かな人間関係であると私は考える。仕事から引退し社会とのつながりが希薄になりがちな高齢者にとって、若者を含む他の人々とふれあうことができる趣味的サークルは、生活の質を高めるための大きな可能性を与えてくれる。また、参加形態が緩やかな趣味的サークルは高齢者の活動に適しているといえよう。以上のことから、今後の「高齢社会」において趣味的サークルの果たす役割はよりいっそう大きくなると考えられ、高齢者の生活の「質」を高める上でも重要なポイントとなるはずである。

次に市民社会との関係について考える。少なくとも投票行動を見る限り、趣味的サーク

ルの成員の社会参加は決して低くない。むしろ投票率は非常に高く、市民としての義務を果たしている。「考え方」は総理府の結果よりも若干、個人主義的であるものの、「社会のために役立ちたいと思っているか」という質問に対する回答も総理府の結果とあまり変わらない。デュマズディエが表明した「市民社会の形成を阻害する」との懸念は当てはまらないことが分かった。趣味的サークルに参加している人は、そうでない人よりも、より多くの社会集団に属している。集団に所属するということは、それだけで社会活動に参加することになる。このことが社会とつながっているという感覚を人々に芽生えさせるとしたら、趣味的サークルは市民社会の形成にある一定の貢献をすることになる。

趣味的サークルの社会的な位置づけとして、最後に地域社会との関わりについて検討する。私の定義する「趣味的サークル」とは成員の定期的な対面接触を前提としている。電子的なネットワークが発展した今日、同じネットワークに加入している仲間同士が年に数回、オフ会を催したりしている。確かにこれもまた「趣味の」サークルである（「サークル」とは呼べるかもしれないが、「集団」と呼ぶには若干のためらいを禁じ得ない）。しかし、これは私の考える「趣味的サークル」ではない。希薄になった人間関係を再構築する機会には、基本的には対面接触にあるはずだ。そこで「趣味的サークル」と地域社会との関係であるが、これは人々が空間を一にするために地域的な広がりがある程度限定されていることがポイントとなる。人がストレスなく移動できる範囲には限りがあるので、参加する人の地域もある程度限定される。そのため趣味的サークルは結果的に地域性を帯びたものとなる。また、音楽であれ、スポーツであれ、その上位組織に加入することは、相対的に自らの地域を意識させられることになるし、また何らかの全国大会になれば、出場する集団は地域の代表ということになる。したがって、趣味的サークルはその構造上、必然的に地域と何らかの関係を持つことになるのである。このことは、これからの社会にとっても非常に有用なはずである。趣味的サークルは希薄になった地域における人間関係を豊かにする機会を常に人に与えているのである。人が地域社会と関わりを持つことのメリットをここで取り上げることはしないが、自分の住む地域に愛着を持ち、そこで仲間とふれあい、活動することは、人々の生活の満足感を間違いなく高めるはずだ。自らの住む地域の活動に参加することは意義のあることなのであり、もちろんそれは趣味的サークルに限ったことではない。ボランティアやNPOの活動も、多くの場合地域的なものである。趣味的サークルは地域社会の活動の一つとして、比較的気軽に参加でき、生活を楽しむことができるという意味での重要な選択肢の一つなのである。

3. 心の豊かさ

今日の日本人の多くは精神的な豊かさを求めている。平成9年実施の総理府調査によると、「物の豊かさ」を重要と答えた人が30.1%だったのに対し、「心の豊かさ」は56.3%に達した。この数値は1979年に逆転して以降、一貫して少しずつ広がっている。その理由として4つの可能性が考えられる。第一は、人々の生活が物質的にある程度の水準に達したことである。バブルが崩壊したといっても、生活必需品の購入に困窮している世帯が大量に発生したわけではない。つまり、物に関しては充たされたから「こころの豊かさ」にシフトしたことが考えられる。第二は、経済成長率との関係である。高度経済成長の時代は「物の豊かさ」＝「心の豊かさ」という図式が成り立ち得た。しかし、右肩上がりの成長が止まりゼロ成長の時代を迎えている現代において、より一層の「物の豊かさ」の追求が期待できなくなってきた。そのため人々が「心の豊かさ」を求め始めた可能性がある。しかし、この説はバブル崩壊後しか説明できない。第三は、人々が物の消費に満足しなくなってきたことが考えられる。つまり消費者が買いたくなるような商品がマーケットに登場しないのである。これは人の欲求に際限があるか、という疑問を生じさせる。第四の可能性は、現代が「物の豊かさ」とは関係なく、精神的な満足を得にくい社会になったことである。つまり、昔の方が「心の豊かさ」はあったのかもしれないのだ。その時代を経験した人々が、失われた「心の豊かさ」を取り戻したいと考えるのは不思議でない。この場合、「物の豊かさ」と「心の豊かさ」という相対ではなく、時代に関する相対的な問題なのである。一方で、生まれたときから物質的には満たされているが「心の豊かさ」をあまり味わうことのできない世代にとって、精神的な満足感を手に入れたい憧れであろう。この説は「昔」を具体的に「いつ」と捉えるかという問題がある。

以上、総理府調査の回答が「物の豊かさ」から「心の豊かさ」にシフトしている理由についていくつか可能性を述べてみた。要するに、「欲求そのもの」がシフトしているかどうかは断定できないのである。現実的には、これまでに挙げたような理由が複雑に絡み合っていると考えられる。しかし、少なくとも今の日本人が精神的な豊かさを手に入れたいと考えていることは事実である。

それでは、どのようにすれば「心の豊かさ」を得ることができるのであろうか。「物の豊かさ」は分かりやすい。たくさん働いて、お金を手にすれば満たすことができる。しかし、心を豊かにするのはそのように単純ではない。例えば、海外旅行をすればよいのか。確かに心は満たされるかもしれない。しかし、この行為は立派な消費活動である。したが

って「物の豊かさ」の範疇に入れることも可能だ。資本主義社会において何らかの行動をすると、ほとんどの場合お金が必要であり、経済的行為を伴うことになる。だから、「心の豊かさ」にもある程度お金がかかるのは当然である。しかし、コストとともに効用が上昇する行為は基本的に経済活動であり、「物の豊かさ」なのである。したがって、「心の豊かさ」とはより精神的な活動を想定しなければならない。

そこで思い浮かぶのは「創作」と「鑑賞」である。いずれも高度な精神活動であるし、心を豊かにするものと考えてよさそうである。しかし、私はここでもう一つ、重要なものを挙げておきたい。これまでも述べているが、それは「人とのふれあい・豊かな人間関係」である。「人とふれあっている」という感覚は、人の心を満たす上でとても重要なファクターである。反対を考えてみると分かりやすい。ある種の達成感を孤独な状態で得たとしても非常に寂しい感じがする。喜びや感動を他の人と分かち合っこそ本当の喜びがあるのではないだろうか。

しかし、人間関係というものは時には煩わしく、負担になることもある。その意味で、拘束力を持たない趣味的サークルは、人々に人とふれあう機会だけを与え、やっかいな人間関係までは押しつけてこない。また、仲間とともに一つの物事に取り組み、達成した感動を人と共有することができる。これこそ「心の豊かさ」であると私は考える。それは社会が物質的に豊かであるかどうかとは関係がない。しかし、伝統的な地域社会の解体や準拠の喪失、そして様々な事件が起こる殺伐とした現代にこそ必要な「豊かさ」なのである。

今回の調査における生活一般と余暇生活の満足度の高さは、趣味的サークルへの参加によって説明できる。それは、総理府調査との比較によって理解することができ、また、活動への参加が生活の満足度と関係していることを回答者のほとんどが認めていることから分かる。そして、「満足度」の高い理由は、それが「集団的」余暇活動であること、つまり「人とのふれあい」があるからである。所属目的を尋ねた質問で、「豊かな人間関係・仲間との交流」と「同じ趣味を持つ仲間との出会い」という人間関係に関する2つの項目があった。いずれも「とても重要である」と答えた人の割合が非常に高かった。この結果も私の考えを支持してくれる。物質的に豊かな現代社会において、趣味的サークルはある一定の役割を果たしているのである。

4. おわりに

私の根本的な興味の源泉は、現代社会における「豊かさ」の問題であった。豊かさには様々なものがある。食物が豊富にあるという意味の豊かさもあれば、人間関係の豊かさもある。高価なものがあることも豊かさであれば、人生の豊かさというものもある。また、豊かさは各個人によっても異なる。人の考えがそれぞれ異なるように、人によって感じる豊かさは異なる。私はその中で人とのふれあいという心の豊かさを重要だと考えた（この「ふれあい」というのは実際の対面接触である）。人との関わりの中で豊かさを感じるという考え方は私の信念でもあるし、それが多くの人々にとっての豊かさにも適用可能であると考えている。そして、研究対象に趣味的サークルを取りあげたのは、人が人との関わりの中で豊かさを感じられるのは、その前提として、関係が拘束されない「自由」な状態であることが必要だと考えたからである。「自発的参加型」集団にこだわったのもそのためである。

「豊かさ」の問題は、個人的もあり、また社会的でもある。この捉えることの難しい問題に対して、趣味的サークルの果たす役割を想定して、今回、社会調査という手法を用いたのである。その結果として、趣味的サークルが満足度を高めていることが分かったことにより、これからの社会においても、それにある一定の期待を抱くことはやぶさかではない。様々な角度から趣味的サークルを考察してきたが、以上から私の考える趣味的サークルは、これからの日本社会、すなわち高齢社会やゼロ成長時代にこそ人々の豊かさに大きく関わってくるのである。

最後に、今後の課題について述べておきたい。第一に、高齢社会のニーズに応えるためには、どのような条件のもとに高齢者の満足度が最大になるかを研究する必要がある。例えば、高齢者が同世代集団に所属した場合と、幅広い年齢層構成の集団に所属した場合の満足度の比較なども興味深いテーマになり得る。第二に、市民社会の形成という意味では、今回取りあげなかった他の自発的参加型集団が社会に対してどのような役割を果たしているのか、という問題がある。趣味的サークルでなくても自発的な参加である以上、成員に何らかの満足や喜びを与えなければ集団として成立しないはずである。これらの研究課題は、これからの社会における豊かさにとって重要なポイントである。

¹ あるイベントの時に、男性が車を出し女性がお弁当を作ってきたとする。この分業を即、男女差別とはいえないのと同様に、性役割を男女差別と別に捉えてよいと考える。

² 野村総合研究所の「生活者一万人アンケート調査」（出典は「I部おわりに」の脚注を参照）から、高齢者の趣味活動と生活の満足度との関連が次のように導き出されている。「趣味と生活満足度との関係を見ると、60歳以上の定年退職者にとっては、趣味の有無が生活満足度に大きな影響を及ぼしていることがわかる(p.202-203)」。また、「趣味の多さが生活満足度の高さにつながるのは、趣味により充実した時間を過ごせるためだけではない。趣味を通じて人と交流することも生活満足度を高める大きな要因なのではないだろうか(p.204)」と述べている。

参考文献一覧

- ・青井和夫『小集団の社会学』東京大学出版会、1980年。
- ・R.カイヨワ著、多田道太郎、塚崎幹夫訳『遊びと人間』講談社、1990年。
- Roger Caillois, *Les jeux et les hommes*, édition revue et augmentée. Gallimard, 1967.
- ・R.K.マートン『社会理論と社会構造』みすず書房、1961年。
- Robert K. Merton, *Social theory and social structure : toward the codification of theory and research*, The Free Press, 1949.
- ・綾部恒雄『クラブの人類学』アカデミア出版会、1988年。
- ・E.メイヨー『産業文明における人間問題』日本能率協会。
- Elton Mayo, *The human problems of an industrial civilization*, The Macmillan company, 1933.
- ・石川弘義『余暇の戦後史』東京書籍、1979年。
- ・井原哲夫『「豊かさ」人間の時代』講談社、1989年。
- ・F.L.K.シュュー著、作田啓一、浜口恵俊共訳『比較文明社会論』培風館、1971。
- Francis L. K. Hsu, *Clan, Caste, and Club*, D. Van Nostrand Co., Inc., 1963.
- ・F.ゴープル著、小口忠彦監訳『マズローの心理学』産能大学出版部、1972年。
- Frank G. Goble, *The Third Force : Psychology of Abraham Maslow*, Grossman Publishers, Inc., 1970.
- ・M.ミルズ著、片岡徳雄、森楸訳『小集団社会学』至誠堂、1971年。
- Theodore M. Mills, *The sociology of small groups*, Prentice-Hall, Inc., Englewood Cliffs, 1967.
- ・岡田至雄『レジャーの社会学』世界思想社、1982年。
- ・オルムステッド著、馬場明男ほか訳『小集団の社会学』誠信書房、1963。
- 原書に関する記述なし。
- ・加藤秀俊『余暇の社会学』PHP研究所、1984年。
- ・経済企画庁国民生活局編『自主的社会参加活動の意義と役割』大蔵省印刷局、1983年。
- ・小林章夫ほか『クラブとサロン』NTT出版、1991。

・佐藤慶幸『アソシエーションの社会学』早稲田大学出版部、1994年。

・C.H.クーリー著、大橋幸ほか訳『社会組織論』青木書店、1970年。

Charles Horton Cooley, *Social organization : a study of the larger mind*, Schocken Books ,1962.

・G.ジンメル著、堀喜望ほか訳『集団の社会学』ミネルヴァ書房、1972年。

Georg Simmel, *Soziologie : Untersuchungen uber die Formen der Vergesellschaftung*, Duncker & Humblot,1968 から第二章と第四章を訳出。

・J.デュマズディエ著、中嶋巖訳『余暇文明へ向かって』東京創元社、1972年。

Joffre Dumazedier, *Vers une civilisation du loisir?*, Éditions du Seuil, 1962.

・J.ホイジンガ著、里見元一郎訳『ホモ・ルーデンス』河出書房新社、1989年。

J.Huizinga Verzamelde Werken, *Homo ludens*, Proeve eener bepaling ven het spel-element der cultuur, 1938.

・思想の科学研究会編『集団』平凡社、1976。

・「思想の科学」編集委員会『思想の科学7』中央公論社、1959年。

・新村出編『広辞苑』岩波書店、1991年（第四版）。

・生活科学調査会編『余暇－日本人の生活思想』ドメス出版、1961年。

・瀬沼克彰『現代余暇の構図』大明堂、1983年。

・瀬沼克彰『余暇とサラリーマン』学文社、1979年。

・瀬沼克彰『余暇と生涯教育』学文社、1979年。

・瀬沼克彰『余暇の社会学』文和書房、1977年。

・総理府青少年対策本部『青少年の余暇に関する研究』出版元に関する記述なし、1974年。

・内閣総理大臣官房審議室『娯楽に関する世論調査』大蔵省印刷局、1957年。

・野村総合研究所社会・産業研究本部『変わりゆく日本人』野村総合研究所、1998年。

・橋爪紳也『倶楽部と日本人』学芸出版社、1989年。

・森岡清美ほか編『新社会学辞典』有斐閣、1993年。

・Leon Festinger, *Social pressures in informal groups : a study of human factors in housing*, Stanley Schachter and Kurt Back. : Stanford University

Press, 1950.

卷末付録

1. 調査対象団体のプロフィール

ここでは代表者に対して行ったアンケートをもとに各団体のプロフィールを紹介する。また調査者の印象や調査の具体的な方法を提示する。なお、調査への協力は3段階で、Aが「協力的」、Bが「ふつう」、Cが「あまり協力的でない」を表している。

調査番号 1 認識記号 ST

ジャンル 将棋 回収 16

抽出方法 公民館のオンライン端末からの無作為抽出

調査方法 現場に調査者が行き、その場で実施、回収

設立 1986年 設立時の成員数 25名

現在の成員 男性 44名 女性 0名

現在の目標 初心者に将棋をする機会を与える

団員名簿 有

役職 代表者 副代表者 会計担当 監査担当

所属する上部組織 無

政治団体や宗教団体との関係 無

明文化された規則 有

規則の周知 ある程度知っている

公式な小グループ 有 (レベル別に) 4つ

小グループのリーダー 無

参加率 約 60%

非公式の集会 ほとんどない

公開される活動 年に約 1回

代表者の決定方法 最初から変わっていない

活動場所 公民館

会費 月額 500円

活動日数 週に 1回

決算報告 有

年間目標 無

会報の発行 無

団員募集 行っている

その方法 口コミ、団員を通じて、その他 (公民館便り、公民館祭りの将棋教室)

退団基準 無

入団条件 無

入団テスト 無

代表者 60歳代 男性 代表者歴 12年

調査への協力 C

調査者の印象 活動本位の集団で、人間関係の広がりはみられなかった。

調査番号 2 認識記号 SN

ジャンル 将棋 回収 12

抽出方法 公民館のオンライン端末からの無作為抽出

調査方法 現場に調査者が行き、その場で実施、回収

設立 1992年 設立時の成員数 15名

現在の成員 男性40名 女性0名

現在の目標 団員の増加

団員名簿 有

役職 代表者 会計担当

所属する上部組織 静岡県将棋サークル連盟

政治団体や宗教団体との関係 無

明文化された規則 有

規則の周知 よく知っている

公式な小グループ 有 (レベル別に) 5つ

小グループのリーダー 無

参加率 約40%

非公式の集会 よくある

その内容 旅行、バーベキュー、飲み会

公開される活動 年に約3回

代表者の決定方法 最初から変わっていない

活動場所 公民館

会費 月額2000円

活動日数 週に3回以上

決算報告 無

年間目標 無

会報の発行 有 年12回

団員募集 行っている

その方法 口コミ

退団基準 無

入団条件 高校生以上

入団テスト 無

代表者 40歳代 男性 代表者歴 7年

調査への協力 B

調査者の印象 将棋の活動にしては比較的年齢が若く、男性のみであったが活動は活発で紐帯も強いようだった。

その他 代表者によると、非常に将棋の強い団体であるとのこと。

調査番号 3 認識記号 CN

ジャンル コーラス 回収 16

抽出方法 静岡市合唱連盟のリストから無作為抽出

調査方法 現場に調査者が行き、その場で実施、回収

設立 1984年

設立時の成員数 20名

現在の成員 男性0名 女性19名

現在の目標 演奏会等の活動を成功させたい

団員名簿 有

役職 代表者 副委員長 会計担当

所属する上部組織 静岡市合唱連盟

政治団体や宗教団体との関係 無

明文化された規則 有

規則の周知 ある程度知っている

公式な小グループ 無

非公式の集会 たまにある

その内容 食事会 ハイキング 展覧会に出かける等

公開される活動 年に約2、3回

代表者の決定方法 話し合いで決める

活動場所 公民館

会費 月額2500円

活動日数 週に1回

決算報告 有

年間目標 有

会報の発行 無

団員募集 行っている

その方法 口コミ、団員を通じて、チラシ・パンフレットなど、その他（「広報しずおか」）

退団基準 無

入団条件 無

入団テスト 無

代表者 60歳代 女性 代表者歴 5年

調査への協力 A

調査者の印象 それなりのまとまりが感じられ、調査にも協力的だった。

調査番号 4 認識記号 KK

ジャンル 登山 回収 9

抽出方法 静岡市山岳連盟のリストから無作為抽出

調査方法 現場に調査者が行き、その場で実施、回収

設立 1958年

設立時の成員数 10名

現在の成員 男性 18名 女性 2名

現在の目標 特になし

団員名簿 有

役職 代表者 会計担当

所属する上部組織 静岡市山岳連盟

政治団体や宗教団体との関係 無

明文化された規則 有

規則の周知 ほとんど知らない

公式な小グループ 無

参加率 約 80%

非公式の集会 たまにある

その内容 親睦会

公開される活動 特になし

代表者の決定方法 特に決まっていない

活動場所 公民館以外の公営施設

会費 月額 1000円

活動日数 月に1回

決算報告 有

年間目標 無

会報の発行 無

団員募集 無

退団基準 無

入団条件 無

入団テスト 無

代表者 50歳代 男性 代表者歴 20年

調査への協力 B

調査者の印象 基本的には活動本位の集団であったが、活動の性質上、集団の紐帯は強いようだった。

調査番号 5 認識記号 AH

ジャンル エアロビクス 回収 10

抽出方法 公民館のオンライン端末からの無作為抽出

調査方法 現場に調査者が行き、その場で実施、回収

設立 1987年

設立時の成員数 30名

現在の成員 男性0名 女性20名

現在の目標 特になし

団員名簿 有

役職 代表者 会計担当

所属する上部組織 無

政治団体や宗教団体との関係 無

明文化された規則 無

参加率 約80%

非公式の集会 ほとんどない

公開される活動 無

代表者の決定方法 話し合いで決める

活動場所 公民館

会費 月額4000円

活動日数 週に1回

決算報告 有

年間目標 無

会報の発行 無

団員募集 行っている

その方法 口コミ、団員を通じて、新聞や地域情報紙、雑誌などへの広告

退団基準 無

入団条件 無

入団テスト 無

講師 有

代表者 70歳代 女性 代表者歴 2年

調査への協力 A

調査者の印象 活動中、自由に話をするのが可能だったため、講師の先生と非常に多くの会話がなされていた。

調査番号 6 認識記号 SK

ジャンル 将棋 回収 13

抽出方法 公民館のオンライン端末からの無作為抽出

調査方法 留置法

設立 1978年

設立時の成員数 100名

現在の成員 男性40名 女性0名

現在の目標 年二回の親睦大会開催

団員名簿 有

役職 代表者 副代表者 会計担当

所属する上部組織 無

政治団体や宗教団体との関係 無

明文化された規則 有

規則の周知 ある程度知っている

公式な小グループ 無

参加率 約80%

非公式の集会 よくある

その内容 親睦旅行

公開される活動 年に約1回

代表者の決定方法 最初から変わっていない

活動場所 公民館

会費 月額500円

活動日数 週に3回以上

決算報告 有

年間目標 有

会報の発行 無

団員募集 行っている

代表者 男性

調査への協力 C

調査者の印象 活動本位の集団で、構成年齢も高かった。あまり協力してもらえなかった。

調査番号 7 認識記号 DA
ジャンル 社交ダンス 回収 14
抽出方法 公民館のオンライン端末からの無作為抽出
調査方法 現場に調査者が行き、その場で実施、回収
設立 1994年
設立時の成員数 12名
現在の成員 男性 13名 女性 15名
現在の目標 ダンスを通して親睦を図る
団員名簿 無
役職 代表者 副委員長 会計担当
所属する上部組織 無
政治団体や宗教団体との関係 無
明文化された規則 有
規則の周知 ある程度知っている
公式な小グループ 無
参加率 約 80%
非公式の集会 あまりない
公開される活動 無
代表者の決定方法 最初から変わっていない
活動場所 公民館
会費 月額 2500円
活動日数 週に3回以上
決算報告 有
年間目標 無
会報の発行 無
団員募集 行っている
その方法 口コミ、ポスター、その他（パーティー、公民館など）
退団基準 無
入団条件 無
入団テスト 無
講師 有
代表者 70歳代 男性 代表者歴 4年
調査への協力 B
調査者の印象 非常に活動本位の集団との印象を受けた。
その他 短い休憩時間の間に急いで回答してもらうことになった。

調査番号 8 認識記号 CD
ジャンル コーラス 回収 12
抽出方法 静岡市合唱連盟のリストから無作為抽出
調査方法 留置法
設立 1990年
設立時の成員数 20名
現在の成員 男性18名 女性0名
現在の目標 特になし
団員名簿 有
役職 代表者 会計担当 総務担当
所属する上部組織 静岡市合唱連盟
政治団体や宗教団体との関係 無
明文化された規則 有
規則の周知 ある程度知っている
参加率 約80%
非公式の集会 たまにある
その内容 新会員歓迎会、忘・新年会、納涼会など
公開される活動 年に2、3回
代表者の決定方法 最初から変わっていない
活動場所 公民館
会費 月額2000円
活動日数 週に1回
決算報告 有
年間目標 有
会報の発行 無
団員募集 行っている
その方法 口コミ
退団基準 無
入団条件 無
入団テスト 無
代表者 70歳代 男性 代表者歴 8年
調査への協力 A
調査者の印象 代表者が非常に協力的だった。

調査番号 9 認識記号 CS
ジャンル コーラス 回収 19
抽出方法 静岡市合唱連盟のリストから無作為抽出
調査方法 現場に調査者が行き、その場で実施、回収
設立 1960年
設立時の成員数 20名
現在の成員 男性18名 女性24名
現在の目標 演奏会の成功、コンクール
団員名簿 有
役職 代表者 マネージャー 会計担当 総務担当 パートリーダー
所属する上部組織 静岡市合唱連盟
政治団体や宗教団体との関係 無
明文化された規則 有
規則の周知 あまり知らない
公式な小グループ 無
参加率 約80%
非公式の集会 たまにある
その内容 忘年会、お花見
公開される活動 年に約1回
代表者の決定方法 話し合いで決める
活動場所 公民館
会費 月額5000円
活動日数 週に1回
決算報告 有
年間目標 有
会報の発行 無
団員募集 行っている
その方法 口コミ、団員を通じて、チラシ・パンフレットなど
退団基準 有
その基準 団費が滞納されたとき、意思を確認
入団条件 無
入団テスト 無
代表者 40歳代 男性 代表者歴 6年
調査への協力 A
調査者の印象 まとまりがあり、公式度が高い集団に思われた。
その他 調査の時期がお盆と重なったため参加率が低く、回収数も少なくなりました。

調査番号 10 認識記号 YK

ジャンル バードウォッチング 回収 26

抽出方法 A会 静岡支部

調査方法 現場に調査者が行き、その場で実施、回収。一部留置。

設立 1964年

設立時の成員数 50名

現在の成員 男性 約330名 女性 約330名

現在の目標 特になし

団員名簿 有

役職 支部長 副支部長 会計担当 総務担当 調査担当 保護担当 企画担当

所属する上部組織 有（調査対象団体が特定されるため具体的な記述は避ける）

政治団体や宗教団体との関係 無

明文化された規則 有

規則の周知 あまり知らない

公式な小グループ 無

参加率 約20%以下

非公式の集会 たまにある

その内容 バーベキュー、飲み会

公開される活動 年に約40回

代表者の決定方法 話し合いで決める

活動場所 公民館以外の公営施設、野外

会費 年額3500円

活動日数 月に3.4回

決算報告 有

年間目標 有

会報の発行 有（年に10回程度）

団員募集 行っていない

退団基準 無

入団条件 無

入団テスト 無

代表者 50歳代 男性 代表者歴 4年

調査への協力 A

調査者の印象 ある一定のまとまりが感じられたが、集まった人は多彩であった。

その他 膨大な幽霊会員を抱えている。実際の活動は少人数で行われ、一部の幹部によって運営されている。毎回の活動は集まっても40名ほどという。

調査番号 11 認識記号 PW
ジャンル エアロビクス 回収 9
抽出方法 公民館のオンライン端末からの無作為抽出
調査方法 現場に調査者が行き、その場で実施、回収。
設立 1991年
設立時の成員数 40名
現在の成員 男性1名 女性12名
現在の目標 「エアロビクス・フェスティバル」で発表すること
団員名簿 有
役職 代表者 会計担当
所属する上部組織 無
政治団体や宗教団体との関係 無
明文化された規則 有
規則の周知 あまり知らない
公式な小グループ 無
参加率 約80%
非公式の集会 たまにある
その内容 飲み会
公開される活動 年に約3回
代表者の決定方法 話し合いで決める
活動場所 公民館
会費 月額1800円
活動日数 週に1回
決算報告 有
年間目標 無
会報の発行 無
団員募集 行っている
その方法 チラシ・パンフレットなど
退団基準 3ヶ月毎の更新手続きをしなければ退団
入団条件 無
入団テスト 無
講師有り
代表者 20歳代 女性 代表者歴 6ヶ月
調査への協力 A
調査者の印象 小さいグループだがまとまりがあった。

調査番号 12 認識記号 ES
ジャンル 社交ダンス 回収 16
抽出方法 公民館のオンライン端末からの無作為抽出
調査方法 現場に調査者が行き、その場で実施、回収。一部留置。
設立 1985年
設立時の成員数 29名
現在の成員 男性 11名 女性 18名
現在の目標 特になし
団員名簿 有
役職 代表者 副委員長 マネージャー 会計担当
所属する上部組織 無
政治団体や宗教団体との関係 無
明文化された規則 無
公式な小グループ 有 (レベル別に2つ)
参加率 約 80%
非公式の集会 たまにある
その内容 ピクニック
公開される活動 無
代表者の決定方法 話し合いで決める
活動場所 公民館
活動日数 週に3回以上
決算報告 有
年間目標 無
会報の発行 無
団員募集 行っている
その方法 口コミ、新聞や地域情報紙、雑誌などへの広告
退団基準 無
入団条件 無
入団テスト 無
講師有り
代表者 60歳代 男性 代表者歴 0年
調査への協力 C
調査者の印象 活動本位の集団。
その他 あまり協力してもらえず苦勞した。

調査番号 13 認識記号 SW

ジャンル 社交ダンス 回収 13

抽出方法 公民館のオンライン端末からの無作為抽出

調査方法 現場に調査者が行き、その場で実施、回収。

設立 1990年

設立時の成員数 26名

現在の成員 男性8名 女性10名

現在の目標 演技発表会の成功

団員名簿 有

役職 代表者 会計担当 幹事

所属する上部組織 無

政治団体や宗教団体との関係 無

明文化された規則 有

規則の周知 ある程度知っている

公式な小グループ 無

参加率 約80%

非公式の集会 たまにある

公開される活動 年に約3回

代表者の決定方法 話し合いで決める

活動場所 公民館

会費 月額2500円

活動日数 週に1回

決算報告 有

年間目標 有

会報の発行 無

団員募集 行っている

その方法 団員を通じて、ポスター、その他（公民館利用者団体名簿等）

退団基準 無

入団条件 無

入団テスト 無

講師有り

代表者 60歳代 男性 代表者歴 2年

調査への協力 A

調査者の印象 親切な人が多く、非常に協力的な団体だった。人数が少なく紐帯が強かった。

その他 休憩時間に落ち着いて調査に協力してもらえた。

調査番号 14 認識記号 YG
ジャンル 野球 回収 11
抽出方法 ホームページ「草野球の窓」のリストにある静岡市内の野球チームより無作為抽出
調査方法 現場に調査者が行き、その場で実施、回収。
設立 1995年
設立時の成員数 13名
現在の成員 男性18名 女性0名
現在の目標 静岡市野球連盟への所属にあたって1勝すること
団員名簿 有
役職 代表者 会計担当
所属する上部組織 無
政治団体や宗教団体との関係 無
明文化された規則 有
規則の周知 よく知っている
公式な小グループ 無
参加率 約60%
非公式の集会 たまにある
その内容 飲み会、バーベキュー
公開される活動 年に約15回
代表者の決定方法 最初から変わっていない
活動場所 公営グラウンド
会費 月額1500円
活動日数 月に1回
決算報告 無
年間目標 無
会報の発行 無
団員募集 行っていない
退団基準 無
入団条件 有(未経験者のみ)
入団テスト 無
代表者 30歳代 男性 代表者歴 3年
調査への協力 A
調査者の印象 試合後、快く協力してもらえた。リーダーを中心にまとまりがあった。

調査番号 15 認識記号 SS
ジャンル エアロビクス 回収 14
抽出方法 公民館のオンライン端末からの無作為抽出
調査方法 現場に調査者が行き、その場で実施、回収。
設立 1989年
設立時の成員数 20名
現在の成員 男性0名 女性20名
現在の目標 みんな健康に長く楽しめるように
団員名簿 有
役職 代表者 会計担当
所属する上部組織 無
政治団体や宗教団体との関係 無
明文化された規則 有
規則の周知 ある程度知っている
公式な小グループ 無
参加率 約60%
非公式の集会 ほとんどない
公開される活動 無
代表者の決定方法 話し合いで決める
活動場所 公民館
会費 月額2200円
活動日数 週に1回
決算報告 無
年間目標 無
会報の発行 無
団員募集 行っている
その方法 口コミ、団員を通じて、ポスター
退団基準 有(3ヶ月以上連続休会の場合)
入団条件 無
入団テスト 無
講師有り
代表者 40歳代 女性 代表者歴 1年
調査への協力 A
調査者の印象 講師が結成当時から変わっておらず、一番古かった。
その他 代表者がいう通り紐帯が弱いのがわかった。メンバー同士の会話が少ない。

調査番号 16 認識記号 TS

ジャンル 登山 回収 13

抽出方法 公民館のオンライン端末からの無作為抽出

調査方法 現場に調査者が行き、その場で実施、回収。

設立 1985年

設立時の成員数 30名

現在の成員 男性 12名 女性 16名

現在の目標 毎月、山の自然に触れること、年に一度は 3000Mに登ること

団員名簿 有

役職 代表者 副代表 書記 会計担当

所属する上部組織 無

政治団体や宗教団体との関係 無

明文化された規則 有

規則の周知 よく知っている

公式な小グループ 無

参加率 約 50%

非公式の集会 ほとんどない

公開される活動 無

代表者の決定方法 選挙を行う

活動場所 公民館

会費 年額 1000円 (一家族につき)

活動日数 月に2回

決算報告 有

年間目標 有

会報の発行 年に1回

団員募集 行っている

その方法 公民館広報

退団基準 無

入団条件 有 (健康であること、自己責任をとれること)

入団テスト 無

代表者 50歳代 男性 代表者歴 10年

調査への協力 A

調査者の印象 非常にまとまりがよく、和気藹々とした集団だった。リーダーの統率力が感じられた。

調査番号 17 認識記号 YS
ジャンル 野球 回収 10
抽出方法 静岡市野球連盟のリストから無作為抽出
調査方法 現場に調査者が行き、その場で実施、回収。
設立 1990年
設立時の成員数 15名
現在の成員 男性16名 女性0名
現在の目標 年をとっても野球をずっとできるように
団員名簿 有
役職 代表者
所属する上部組織 静岡市野球連盟
政治団体や宗教団体との関係 無
明文化された規則 無
公式な小グループ 無
参加率 約80%
非公式の集会 たまにある
その内容 バーベキュー、キャンプ、スキー、飲み会
公開される活動 年に約15回
代表者の決定方法 最初から変わっていない
活動場所 公営グラウンド
会費 月額500円
活動日数 隔週に1回
決算報告 無
年間目標 無
会報の発行 無
団員募集 行っている
その方法 口コミ、団員を通じて
退団基準 無
入団条件 無
入団テスト 無
代表者 30歳代 男性 代表者歴 9年
調査への協力 A
調査者の印象 試合前に快く協力してもらえた。
その他 静岡市野球連盟Bクラス（中程度の強さ）所属

調査番号 18 認識記号 YN

ジャンル 野球 回収 9

抽出方法 静岡市野球連盟のリストから無作為抽出

調査方法 現場に調査者が行き、その場で実施、回収。

設立 1983年

設立時の成員数 20名

現在の成員 男性 25名 女性 2名

現在の目標 来年の大会で優勝する

団員名簿 有

役職 代表者 マネージャー

所属する上部組織 静岡市野球連盟

政治団体や宗教団体との関係 無

明文化された規則 無

公式な小グループ 無

参加率 約 50%

非公式の集会 よくある

その内容 飲み会

公開される活動 年に約 30回

代表者の決定方法 最初から変わっていない

活動場所 公営グラウンド

会費 月額 1500円

活動日数 月に2回

決算報告 有

年間目標 有

会報の発行 有

団員募集 行っている

その方法 口コミ、団員を通じて

退団基準 無

入団条件 無

入団テスト 無

代表者 30歳代 男性 代表者歴 16年

調査への協力 A

調査者の印象 試合後に快く協力してもらえた。男性はすべて高校野球経験者で構成されており、体育会系の雰囲気だった。

その他 静岡市野球連盟Aクラス（最上級の強さ）所属

調査番号 19 認識記号 TL
ジャンル テニス 回収 38
抽出方法 静岡市テニス協会のリストからピックアップ
調査方法 留置法。
設立 1956年
設立時の成員数 30名
現在の成員 男性 60名 女性 60名
現在の目標 精神的、技術的テニスレベルの向上
団員名簿 有
役職 代表者 会計担当 総務担当
所属する上部組織 静岡県テニス協会、静岡市テニス協会
政治団体や宗教団体との関係 無
明文化された規則 有
規則の周知 ある程度知っている
公式な小グループ 有 (10)
参加率 約 60%
非公式の集会 よくある
その内容 各グループがグループを越えて活動をする。旅行や飲み会など。
公開される活動 年に約 5回
代表者の決定方法 話し合いで決める
活動場所 公営グラウンド
会費 月額 1000円
活動日数 週に 2回
決算報告 有
年間目標 有
会報の発行 年に 2回
団員募集 行っていない
その方法 口コミ、団員を通じて
退団基準 無
入団条件 有 (テニスに対して向上する気持ちのあること)
入団テスト 無
代表者 40歳代 男性 代表者歴 5年
調査への協力 A
調査者の印象 代表者が積極的に調査に協力してくれた。

調査番号 20 認識記号 VF
ジャンル バレーボール 回収 11
抽出方法 静岡市バレーボール協会のリストからピックアップ
調査方法 現場に調査者が行き、その場で実施、回収。
設立 1980年
設立時の成員数 3名
現在の成員 男性3名 女性12名
現在の目標 特になし
団員名簿 有
役職 代表者 マネージャー その他
所属する上部組織 静岡市バレーボール協会
政治団体や宗教団体との関係 無
明文化された規則 無
公式な小グループ 無
参加率 約80%
非公式の集会 たまにある
その内容 旅行、飲み会
公開される活動 年に約15回
代表者の決定方法 話し合いで決める
活動場所 公営施設、民間施設
会費 月額2000円
活動日数 週に2回
決算報告 無
年間目標 有
会報の発行 無
団員募集 行っている
その方法 口コミ、団員を通じて
退団基準 無
入団条件 無
入団テスト 無
コーチ有り
代表者 30歳代 女性 代表者歴 4年
調査への協力 A
調査者の印象 男性コーチが快く引き受けてくれた。チームとしてのまとまりを感じた。
その他 静岡市バレーボール協会一般女子の部所属 今年度、全国バレーボール大会出場

調査番号 21 認識記号 IC
ジャンル 器楽演奏（吹奏楽） 回収 44
抽出方法 公民館のオンライン端末からの無作為抽出
調査方法 留置法（集団調査）
設立 1953年 設立時の成員数 10数名
現在の成員 男性29名 女性33名
現在の目標 演奏会の成功
団員名簿 有
役職 委員長 副委員長 総務担当 会計担当 広報担当
所属する上部組織 全国吹奏楽連盟
政治団体や宗教団体との関係 無
明文化された規則 有
規則の周知 ある程度知っている
公式な小グループ 有
小グループのリーダー 有
参加率 約60%
非公式の集会 たまにある
その内容 飲み会
公開される活動 年に約4回
代表者の決定方法 選挙を行う
活動場所 公民館、文化会館等
会費 月額2000円
活動日数 週に1回
決算報告 有
年間目標 有
会報の発行 年に12回
団員募集 行っている
その方法 団員を通じて、チラシ・パンフレットなど、新聞や地域情報紙・雑誌などへの
広告
退団基準 無
入団条件 楽器演奏の経験があること
入団テスト 無
代表者 40歳代 男性 代表者歴 3年
調査への協力 A
調査者の印象 公式度の高い集団との印象を受けた。
その他 合宿中に一斉に調査を実施してもらった。

調査番号 22 認識記号 VM
ジャンル バレーボール 回収 10
抽出方法 静岡市バレーボール協会のリストから無作為抽出
調査方法 留置法
設立 1961年
設立時の成員数 不明
現在の成員 男性2名 女性15名
現在の目標 家庭婦人における現在の位置の維持、もしくは上位にあがること
団員名簿 有
役職 代表者 会計担当
所属する上部組織 静岡市バレーボール協会
政治団体や宗教団体との関係 無
明文化された規則 有
規則の周知 あまり知らない
公式な小グループ 無
参加率 約80%
非公式の集会 反省会、忘年会
公開される活動 年に約3回
代表者の決定方法 話し合いで決める
活動場所 公営施設
会費 月額1000円
活動日数 週に1回
決算報告 有
年間目標 無
会報の発行 無
団員募集 行っている
その方法 口コミ、団員を通じて
退団基準 有(本人に確認を取る)
入団条件 無
入団テスト 無
代表者 50歳代 女性 代表者歴 2年
調査への協力 C
調査者の印象 積極的に協力してもらえず苦勞した。
その他 調査過程において質問項目が多く、かつ内容が濃いことに対し、団員から代表者に苦情があった。静岡市バレーボール協会家庭婦人の部所属。

調査番号 23 認識記号 VW
ジャンル バレーボール 回収 10
抽出方法 静岡市バレーボール協会のリストから無作為抽出
調査方法 留置法
設立 1993年
設立時の成員数 12
現在の成員 男性 15名 女性 2名
現在の目標 静岡市Aクラス入り
団員名簿 有
役職 代表者 監督 キャプテン マネージャー
所属する上部組織 静岡市バレーボール協会
政治団体や宗教団体との関係 無
明文化された規則 無
公式な小グループ 無
参加率 約 60%
非公式の集会 たまにある
その内容 バーベキュー
公開される活動 年に約 3回
代表者の決定方法 最初から変わっていない
活動場所 公営施設
会費 年額 10000円
活動日数 週に 1回
決算報告 無
年間目標 無
会報の発行 無
団員募集 行っている
その方法 口コミ、団員を通じて
退団基準 無
入団条件 無
入団テスト 無
代表者 40歳代 男性 代表者歴 5年
調査への協力 A
調査者の印象 活動本位だが、まとまりが感じられた。
その他 非常に強いチーム。静岡市バレーボール協会一般男子の部所属。

調査番号 24 認識記号 I F
ジャンル 器楽演奏（オーケストラ） 回収 21
抽出方法 調査者の知己に協力を依頼。
調査方法 留置法
設立 1977年 設立時の成員数 23名
現在の成員 男性 50名 女性 36名
現在の目標 市民オペラの成功
団員名簿 有
役職 委員長 副委員長 会計担当 広報担当
所属する上部組織 全国アマチュアオーケストラ連盟
政治団体や宗教団体との関係 無
明文化された規則 有
規則の周知 ある程度知っている
公式な小グループ 有
小グループのリーダー 有
参加率 約 80%
非公式の集会 たまにある
その内容 飲み会
公開される活動 年に3、4回
代表者の決定方法 選挙を行う
活動場所 文化会館等
会費 月額 3000円
活動日数 週に1回
決算報告 有
年間目標 有
会報の発行 年に12回
団員募集 行っている
その方法 団員を通じて、チラシ・パンフレットなど
退団基準 有（団費未納1年、無断欠席）
入団条件 18歳以上、練習についていける演奏レベル
入団テスト 有（オーディション）
代表者 50歳代 男性 代表者歴 6年
調査への協力 C
調査者の印象 非常に公式度の高い集団。
その他 成員数も多く出席率も高かったので、多くの人に調査票を配布することができたが、回収率は著しく低かった。

調査番号 25 認識記号 TY
ジャンル 登山 回収 9
抽出方法 静岡市山岳連盟のリストから無作為抽出
調査方法 留置法
設立 1969年
設立時の成員数 15名
現在の成員 男性9名 女性3名
現在の目標 全員参加できる山行
団員名簿 有
役職 代表者 副代表 マネージャー 会計担当
所属する上部組織 静岡県山岳連盟、静岡市山岳連盟
政治団体や宗教団体との関係 無
明文化された規則 有
規則の周知 よく知っている
公式な小グループ 無
参加率 約60%
非公式の集会 よくある
その内容 飲み会
公開される活動 無
代表者の決定方法 話し合いで決める
活動場所 その他（登山用品店）
会費 月額1000円
活動日数 週に1回
決算報告 有
年間目標 有
会報の発行 無
団員募集 行っている
その方法 新聞や地域情報紙・雑誌などへの広告
退団基準 有（無断山行）
入団条件 無
入団テスト 無
代表者 50歳代 男性 代表者歴 10年
調査への協力 B
調査者の印象 活発に活動を行っている集団だった。

2. 調査結果

2. 1 フェイス・シートの度数

F 1

性別

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	男性	194	51.3	52.4	52.4
	女性	176	46.6	47.6	100.0
	合計	370	97.9	100.0	
欠損値	システム欠損値	8	2.1		
	合計	8	2.1		
合計		378	100.0		

F 2

年齢(10代区切)

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	20歳代	75	19.8	20.4	20.4
	30歳代	66	17.5	17.9	38.3
	40歳代	59	15.6	16.0	54.3
	50歳代	83	22.0	22.6	76.9
	60歳以上	85	22.5	23.1	100.0
	合計	368	97.4	100.0	
欠損値	システム欠損値	10	2.6		
	合計	10	2.6		
合計		378	100.0		

F 3

職業

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	事務職	72	19.0	20.0	20.0
	販売職	15	4.0	4.2	24.2
	管理職	25	6.6	6.9	31.1
	専門的・技術的職業	56	14.8	15.6	46.7
	サービス業	20	5.3	5.6	52.2
	現業職	44	11.6	12.2	64.4
	農林漁業	1	.3	.3	64.7
	主婦(パートタイム従業者)	27	7.1	7.5	72.2
	主婦(無職の)	45	11.9	12.5	84.7
	学生	12	3.2	3.3	88.1
	無職	28	7.4	7.8	95.8
	その他	15	4.0	4.2	100.0
	合計	360	95.2	100.0	
	欠損値	システム欠損値	18	4.8	
合計		18	4.8		
合計		378	100.0		

F 4

一日の労働時間

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	7時間未満	45	11.9	17.8	17.8
	7～8時間 未満	60	15.9	23.7	41.5
	8～9時間 未満	76	20.1	30.0	71.5
	9～10時間 未満	43	11.4	17.0	88.5
	10～11時 間未満	13	3.4	5.1	93.7
	11～12時 間未満	5	1.3	2.0	95.7
	12時間以上	11	2.9	4.3	100.0
	合計	253	66.9	100.0	
	欠 損値	システム欠損値	125	33.1	
合計	125	33.1			
合計	378	100.0			

F 5

最終学歴

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	小中学校	33	8.7	9.0	9.0
	高等学校	168	44.4	46.0	55.1
	専修学 校、各種 学校等	21	5.6	5.8	60.8
	短期大学 (高専等 を含む)	41	10.8	11.2	72.1
	大学	95	25.1	26.0	98.1
	大学院	6	1.6	1.6	99.7
	その他	1	.3	.3	100.0
	合計	365	96.6	100.0	
	欠 損値	システム欠 損値	13	3.4	
合計	13	3.4			
合計	378	100.0			

F 6

婚姻

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	未婚	99	26.2	27.2	27.2
	既婚・配偶 者あり	249	65.9	68.4	95.6
	既婚・配偶 者離死別	16	4.2	4.4	100.0
	合計	364	96.3	100.0	
欠 損値	システム欠損値	14	3.7		
	合計	14	3.7		
合計	378	100.0			

F 7

子供の数

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	一人	35	9.3	11.0	11.0
	二人	120	31.7	37.6	48.6
	三人	68	18.0	21.3	69.9
	四人以上	9	2.4	2.8	72.7
	子供はいない	87	23.0	27.3	100.0
	合計	319	84.4	100.0	
欠損値	システム欠損値	59	15.6		
	合計	59	15.6		
合計		378	100.0		

F 7 - 2 (SQ)

一番下の子どもの年齢

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	0～5歳	22	5.8	10.3	10.3
	6～11歳	19	5.0	8.9	19.2
	12～14歳	17	4.5	8.0	27.2
	15～17歳	9	2.4	4.2	31.5
	18～24歳	45	11.9	21.1	52.6
	25～29歳	44	11.6	20.7	73.2
	30～39歳	44	11.6	20.7	93.9
	40歳以上	13	3.4	6.1	100.0
	合計	213	56.3	100.0	
欠損値	システム欠損値	165	43.7		
	合計	165	43.7		
合計		378	100.0		

F 8

家族形態

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	単身	31	8.2	8.8	8.8
	夫婦だけ	77	20.4	21.8	30.5
	夫婦と子ども	143	37.8	40.4	70.9
	夫婦と子どもと親	68	18.0	19.2	90.1
	それ以外	35	9.3	9.9	100.0
	合計	354	93.7	100.0	
欠損値	システム欠損値	24	6.3		
	合計	24	6.3		
合計		378	100.0		

世帯収入

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効 200万円未満	14	3.7	4.4	4.4
200～400万円未満	59	15.6	18.7	23.2
400～600万円未満	65	17.2	20.6	43.8
600～800万円未満	54	14.3	17.1	61.0
800～1,000万円未満	52	13.8	16.5	77.5
1,000～1,200万円未満	35	9.3	11.1	88.6
1,200～1,400万円未満	14	3.7	4.4	93.0
1,400万円以上	22	5.8	7.0	100.0
合計	315	83.3	100.0	
欠損値 システム欠損値	63	16.7		
合計	63	16.7		
合計	378	100.0		

2. 2 質問項目(オリジナル)の度数

以下は、今回の調査にあたって作成した質問項目についての度数である。

Q 1 - 1

入団の容易さ

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効 容易である	284	75.1	75.5	75.5
比較的容易である	69	18.3	18.4	93.9
あまり容易でない	18	4.8	4.8	98.7
容易でない	5	1.3	1.3	100.0
合計	376	99.5	100.0	
欠損値 システム欠損値	2	.5		
合計	2	.5		
合計	378	100.0		

Q 1 - 2

退団の容易さ

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	容易である	238	63.0	64.5	64.5
	比較的容易である	83	22.0	22.5	87.0
	あまり容易でない	39	10.3	10.6	97.6
	容易でない	9	2.4	2.4	100.0
	合計	369	97.6	100.0	
欠損値	システム欠損値	9	2.4		
	合計	9	2.4		
合計		378	100.0		

Q 2

参加への催促

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	よく促す	78	20.6	21.1	21.1
	ある程度促す	149	39.4	40.3	61.4
	あまり促さない	80	21.2	21.6	83.0
	促さない	63	16.7	17.0	100.0
	合計	370	97.9	100.0	
欠損値	システム欠損値	8	2.1		
	合計	8	2.1		
合計		378	100.0		

Q 3

非公式の活動

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	頻繁にある	44	11.6	11.8	11.8
	たまにある	237	62.7	63.4	75.1
	あまりない	33	8.7	8.8	84.0
	ほとんどない	60	15.9	16.0	100.0
	合計	374	98.9	100.0	
欠損値	システム欠損値	4	1.1		
	合計	4	1.1		
合計		378	100.0		

Q 4 (SQ)

非公式の活動への参加

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	よく参加する	166	43.9	52.0	52.0
	たまに参加する	119	31.5	37.3	89.3
	あまり参加しない	24	6.3	7.5	96.9
	参加しない	10	2.6	3.1	100.0
	合計	319	84.4	100.0	
欠損値	システム欠損値	59	15.6		
	合計	59	15.6		
合計		378	100.0		

Q 6

連帯感の有無

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	強い連帯感がある	93	24.6	25.3	25.3
	ある程度連帯感がある	215	56.9	58.6	83.9
	あまり連帯感がない	53	14.0	14.4	98.4
	ほとんど連帯感がない	6	1.6	1.6	100.0
	合計	367	97.1	100.0	
欠損値	システム欠損値	11	2.9		
	合計	11	2.9		
合計		378	100.0		

Q 7

連帯感の理由

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効 同じ趣味をもっているから	25	6.6	14.6	14.6
同じ目標があるから	20	5.3	11.7	26.3
連帯感がないと活動できないから	15	4.0	8.8	35.1
楽しく活動できるから	11	2.9	6.4	41.5
皆仲がよいから	10	2.6	5.8	47.4
その他(プラス)	72	19.0	42.1	89.5
考え方が異なるから	5	1.3	2.9	92.4
世代間にギャップがあるから	5	1.3	2.9	95.3
その他(マイナス)	8	2.1	4.7	100.0
合計	171	45.2	100.0	
欠損値 システム欠損値	207	54.8		
合計	207	54.8		
合計	378	100.0		

Q 8

参加年数1年単位

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効 1年まで	68	18.0	18.9	18.9
2年まで	35	9.3	9.7	28.7
3年まで	37	9.8	10.3	39.0
4年まで	22	5.8	6.1	45.1
5年まで	44	11.6	12.3	57.4
5年以上	153	40.5	42.6	100.0
合計	359	95.0	100.0	
欠損値 システム欠損値	19	5.0		
合計	19	5.0		
合計	378	100.0		

Q 9 入団のきっかけ

Dichotomy label	Name	Count	Pct of Responses	Pct of Cases
知り合いの紹介	Q09_MA1	243	61.8	65.5
この集団の活動を見て	Q09_MA2	54	13.7	14.6
新聞・雑誌を見て	Q09_MA3	19	4.8	5.1
無料地域情報紙を見て	Q09_MA4	32	8.1	8.6
ポスター等を見て	Q09_MA5	4	1.0	1.1

その他	Q09_MA6	41	10.4	11.1
		-----	-----	-----
	Total responses	393	100.0	105.9

7 missing cases; 371 valid cases

Q10

役職の有無

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	役職に就いている	87	23.0	23.5	23.5
	役職に就いていない	283	74.9	76.5	100.0
	合計	370	97.9	100.0	
欠損値	システム欠損値	8	2.1		
	合計	8	2.1		
合計		378	100.0		

Q12

活動への積極的な参加

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	積極的に参加	342	90.5	91.9	91.9
	積極的でない	30	7.9	8.1	100.0
	合計	372	98.4	100.0	
欠損値	システム欠損値	6	1.6		
	合計	6	1.6		
合計		378	100.0		

Q13

活動の前後に人と話すか

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	話す	314	83.1	84.4	84.4
	話さない	58	15.3	15.6	100.0
	合計	372	98.4	100.0	
欠損値	システム欠損値	6	1.6		
	合計	6	1.6		
合計		378	100.0		

Q14

親しい人の数

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	0～1人	75	19.8	22.1
	2～3人	86	22.8	47.5
	4～5人	86	22.8	72.9
	6～10人	60	15.9	90.6
	10人以上	32	8.5	100.0
	合計	339	89.7	100.0
欠損値	システム欠損値	39	10.3	
	合計	39	10.3	
合計	378	100.0		

Q15 所属していて楽しいとき

Dichotomy label	Name	Count	Pct of Responses	Pct of Cases
通常の活動	Q15_MA1	321	61.4	86.8
通常の活動以外	Q15_MA2	181	34.6	48.9
特に楽しいとは思わない	Q15_MA3	6	1.1	1.6
その他	Q15_MA4	15	2.9	4.1
		-----	-----	-----
Total responses		523	100.0	141.4

8 missing cases; 370 valid cases

Q16 所属していて不満なこと

Dichotomy label	Name	Count	Pct of Responses	Pct of Cases
自分の理想と団の目標が異なること	Q16_MA1	41	10.4	11.4
仲間との意見が合わないこと	Q16_MA2	27	6.9	7.5
団内の人間関係がうまくいかないこと	Q16_MA3	20	5.1	5.6
男女が不平等なこと	Q16_MA4	2	.5	.6
団の目標が達成できないこと	Q16_MA5	35	8.9	9.7
特に不満はない	Q16_MA6	241	61.3	67.1
その他	Q16_MA7	27	6.9	7.5
		-----	-----	-----
Total responses		393	100.0	109.5

19 missing cases; 359 valid cases

Q17

活動への参加と生活の満足度

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	関係ある	330	87.3	94.3	94.3
	関係ない	20	5.3	5.7	100.0
	合計	350	92.6	100.0	
欠損値	システム欠損値	28	7.4		
	合計	28	7.4		
合計		378	100.0		

Q18-1

豊かな人間関係・仲間との交流

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	重要である	341	90.2	92.7	92.7
	重要でない	27	7.1	7.3	100.0
	合計	368	97.4	100.0	
欠損値	システム欠損値	10	2.6		
	合計	10	2.6		
合計		378	100.0		

Q18-2

技術・能力の向上

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	重要である	337	89.2	92.3	92.3
	重要でない	28	7.4	7.7	100.0
	合計	365	96.6	100.0	
欠損値	システム欠損値	13	3.4		
	合計	13	3.4		
合計		378	100.0		

Q18-3

趣味に関する情報交換

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	重要である	310	82.0	84.9	84.9
	重要でない	55	14.6	15.1	100.0
	合計	365	96.6	100.0	
欠損値	システム欠損値	13	3.4		
	合計	13	3.4		
合計		378	100.0		

Q18-4

自由時間の有効活用

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	重要である	320	84.7	88.4	88.4
	重要でない	42	11.1	11.6	100.0
	合計	362	95.8	100.0	
欠損値	システム欠損値	16	4.2		
	合計	16	4.2		
合計		378	100.0		

Q18-5

生活に変化を与える

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	重要である	321	84.9	87.7	87.7
	重要でない	45	11.9	12.3	100.0
	合計	366	96.8	100.0	
欠損値	システム欠損値	12	3.2		
	合計	12	3.2		
合計		378	100.0		

Q18-6

異性との出会い

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	重要である	115	30.4	31.9	31.9
	重要でない	246	65.1	68.1	100.0
	合計	361	95.5	100.0	
欠損値	システム欠損値	17	4.5		
	合計	17	4.5		
合計		378	100.0		

Q18-7

同じ趣味をもつ仲間との出会い

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	重要である	347	91.8	94.0	94.0
	重要でない	22	5.8	6.0	100.0
	合計	369	97.6	100.0	
欠損値	システム欠損値	9	2.4		
	合計	9	2.4		
合計		378	100.0		

Q18-8

活動そのもの

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	重要である	344	91.0	94.2	94.2
	重要でない	21	5.6	5.8	100.0
	合計	365	96.6	100.0	
欠損値	システム欠損値	13	3.4		
	合計	13	3.4		
合計		378	100.0		

Q18-9

その他の目的

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	重要である	213	56.3	66.6	66.6
	重要でない	107	28.3	33.4	100.0
	合計	320	84.7	100.0	
欠損値	システム欠損値	58	15.3		
	合計	58	15.3		
合計		378	100.0		

Q19 集団で行う理由

Dichotomy label	Name	Count	Pct of Responses	Pct of Cases
個人ではできないから	Q19_MA1	254	28.6	68.6
話の合う仲間がいるから	Q19_MA2	125	14.1	33.8
仲間と喜びを共有したいから	Q19_MA3	166	18.7	44.9
お互いに刺激を受け、技能や技術が向上する	Q19_MA4	184	20.7	49.7
趣味に関する知識や情報が増えるから	Q19_MA5	150	16.9	40.5
その他	Q19_MA6	10	1.1	2.7
Total responses		889	100.0	240.3

8 missing cases; 370 valid cases

Q20 学生時代の経験

Dichotomy label	Name	Count	Pct of Responses	Pct of Cases
小学生の時、学校のクラブ活動でやっていた	Q20_MA1	29	5.4	8.8
小学生の時、学校以外でやっていた	Q20_MA2	35	6.6	10.6
中学生の時、学校のクラブ活動でやっていた	Q20_MA3	101	18.9	30.5
中学生の時、学校以外でやっていた	Q20_MA4	29	5.4	8.8
高校生の時、学校のクラブ活動でやっていた	Q20_MA5	110	20.6	33.2
高校生の時、学校以外でやっていた	Q20_MA6	19	3.6	5.7

大学生の時、大学のクラブ・サークル等で行っていた

Q20_MA7 56 10.5 16.9

大学生の時、大学関係以外で行っていた

Q20_MA8 15 2.8 4.5

学生時代にやったことはなかった

Q20_MA9 125 23.5 37.8

その他

Q20_10 14 2.6 4.2

Total responses 533 100.0 161.0

47 missing cases; 331 valid cases

Q21

他の団体への所属

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効 所属している	175	46.3	47.9	47.9
所属していない	190	50.3	52.1	100.0
合計	365	96.6	100.0	
欠損値 システム欠損値	13	3.4		
合計	13	3.4		
合計	378	100.0		

Q22

所属団体数

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効 1.00	78	20.6	45.3	45.3
2.00	65	17.2	37.8	83.1
3.00	17	4.5	9.9	93.0
4.00	7	1.9	4.1	97.1
5.00	3	.8	1.7	98.8
8.00	2	.5	1.2	100.0
合計	172	45.5	100.0	
欠損値 システム欠損値	206	54.5		
合計	206	54.5		
合計	378	100.0		

Q22-1

週の活動回数

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効 1回未満	6	1.6	3.4	3.4
1回	26	6.9	14.8	18.2
2回	61	16.1	34.7	52.8
3回	45	11.9	25.6	78.4
4回以上	38	10.1	21.6	100.0
合計	176	46.6	100.0	
欠損値 システム欠損値	202	53.4		
合計	202	53.4		
合計	378	100.0		

Q22-2

週の活動時間

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	2時間未満	3	0.8	1.8	1.8
	2～4時間	25	6.6	14.9	16.7
	4～6時間	63	16.7	37.5	54.2
	6～8時間	33	8.7	19.6	73.8
	8～10時間	17	4.5	10.1	83.9
	10時間以上	27	7.1	16.1	100.0
	合計	168	44.4	100.0	
欠損値	システム欠損値	210	55.6		
	合計	210	55.6		
合計		378	100.0		

Q24

月あたりの費用

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	1000円未満	9	2.4	5.1	5.1
	1000～5000円	69	18.3	38.8	43.8
	5000～10000円	64	16.9	36.0	79.8
	10000円以上	36	9.5	20.2	100.0
	合計	178	47.1	100.0	
欠損値	システム欠損値	200	52.9		
	合計	200	52.9		
合計		378	100.0		

Q37

投票行動

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	投票した	290	76.7	79.7	79.7
	投票しなかった	74	19.6	20.3	100.0
	合計	364	96.3	100.0	
欠損値	システム欠損値	14	3.7		
	合計	14	3.7		
合計		378	100.0		

Q37-2 (SQ)

投票しなかった理由

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効				
正当事由	3	.8	5.3	5.3
面倒・興味なし・分からない	19	5.0	33.3	38.6
適当な人物(政党)なし	11	2.9	19.3	57.9
用事・多忙	19	5.0	33.3	91.2
当該趣味活動	5	1.3	8.8	100.0
合計	57	15.1	100.0	
欠損値				
システム欠損値	321	84.9		
合計	321	84.9		
合計	378	100.0		

2. 3 質問項目 (総理府調査との比較用)

Q25

生活の満足度

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効				
満足している	78	20.6	21.0	21.0
まあ満足している	210	55.6	56.6	77.6
やや不満だ	42	11.1	11.3	88.9
不満だ	17	4.5	4.6	93.5
どちらともいえない	19	5.0	5.1	98.7
わからない	5	1.3	1.3	100.0
合計	371	98.1	100.0	
欠損値				
システム欠損値	7	1.9		
合計	7	1.9		
合計	378	100.0		

Q26-1

収入・所得

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	満足している	42	11.1	11.5	11.5
	まあ満足している	144	38.1	39.5	51.0
	やや不満だ	80	21.2	21.9	72.9
	不満だ	63	16.7	17.3	90.1
	どちらともいえない	25	6.6	6.8	97.0
	わからない	11	2.9	3.0	100.0
	合計	365	96.6	100.0	
欠損値	システム欠損値	13	3.4		
	合計	13	3.4		
合計		378	100.0		

Q26-2

自動車、電気製品、家具などの耐久消費財

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	満足している	76	20.1	20.9	20.9
	まあ満足している	196	51.9	53.8	74.7
	やや不満だ	47	12.4	12.9	87.6
	不満だ	17	4.5	4.7	92.3
	どちらともいえない	20	5.3	5.5	97.8
	わからない	8	2.1	2.2	100.0
	合計	364	96.3	100.0	
欠損値	システム欠損値	14	3.7		
	合計	14	3.7		
合計		378	100.0		

Q26-3

レジャー・余暇生活

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	満足している	71	18.8	19.3	19.3
	まあ満足している	202	53.4	55.0	74.4
	やや不満だ	55	14.6	15.0	89.4
	不満だ	17	4.5	4.6	94.0
	どちらともいえない	17	4.5	4.6	98.6
	わからない	5	1.3	1.4	100.0
	合計	367	97.1	100.0	
欠損値	システム欠損値	11	2.9		
	合計	11	2.9		
合計		378	100.0		

Q27

日頃充実感を感じているか

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	十分充実感を感じている	44	11.6	11.9	11.9
	まあ充実感を感じている	240	63.5	64.7	76.5
	あまり充実感を感じていない	53	14.0	14.3	90.8
	ほとんど(全く)充実感を感じていない	9	2.4	2.4	93.3
	どちらともいえない	18	4.8	4.9	98.1
	わからない	7	1.9	1.9	100.0
	合計	371	98.1	100.0	
欠損値	システム欠損値	7	1.9		
	合計	7	1.9		
合計		378	100.0		

Q28 (SQ) どんなとき充実感を感じるか

Dichotomy label	Name	Count	Pct of Responses	Pct of Cases
仕事	Q28_MA1	151	18.1	42.2
教養	Q28_MA2	84	10.1	23.5
趣味	Q28_MA3	295	35.4	82.4
休養	Q28_MA4	112	13.4	31.3
団欒	Q28_MA5	75	9.0	20.9
友人	Q28_MA6	102	12.2	28.5
奉仕	Q28_MA7	12	1.4	3.4
ほか	Q28_MA8	1	.1	.3
分からない	Q28_MA9	2	.2	.6
		-----	-----	-----
	Total responses	834	100.0	233.0

20 missing cases; 358 valid cases

Q29

日頃不安を感じているか

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	不安を感じている	240	63.5	65.4	65.4
	不安を感じていない	82	21.7	22.3	87.7
	わからない	45	11.9	12.3	100.0
	合計	367	97.1	100.0	
欠損値	システム欠損値	11	2.9		
	合計	11	2.9		
合計		378	100.0		

Q30

ゆとりがあるか

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	かなりゆとりがある	52	13.8	14.1	14.1
	ある程度ゆとりがある	192	50.8	52.0	66.1
	あまりゆとりがない	88	23.3	23.8	90.0
	ほとんどゆとりがない	30	7.9	8.1	98.1
	わからない	7	1.9	1.9	100.0
	合計	369	97.6	100.0	
欠損値	システム欠損値	9	2.4		
	合計	9	2.4		
合計		378	100.0		

Q31

生活水準

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	上	4	1.1	1.1	1.1
	中の上	49	13.0	13.2	14.3
	中の中	188	49.7	50.7	65.0
	中の下	85	22.5	22.9	87.9
	下	19	5.0	5.1	93.0
	わからない	26	6.9	7.0	100.0
合計		371	98.1	100.0	
欠損値	システム欠損値	7	1.9		
	合計	7	1.9		
合計		378	100.0		

Q 32

心の豊かさ・物の豊かさ

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	心の豊かさ	155	41.0	42.6	42.6
	物の豊かさ	56	14.8	15.4	58.0
	一概に えない	128	33.9	35.2	93.1
	わからない	25	6.6	6.9	100.0
	合計	364	96.3	100.0	
欠 損値	システム欠 損値	14	3.7		
	合計	14	3.7		
合計		378	100.0		

Q 33

今後の生活の仕方

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	将来に備 える	61	16.1	16.8	16.8
	毎日の生 活を楽しむ	195	51.6	53.6	70.3
	どちらとも いえない	99	26.2	27.2	97.5
	わからない	9	2.4	2.5	100.0
	合計	364	96.3	100.0	
欠 損値	システム欠 損値	14	3.7		
	合計	14	3.7		
合計		378	100.0		

Q 34- 1

できるだけ新しいものを取り入れる

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	そうだと思う	60	15.9	16.3	16.3
	まあそうだ と思う	157	41.5	42.8	59.1
	あまりそう だと思わ ない	102	27.0	27.8	86.9
	そうだと思 わない	30	7.9	8.2	95.1
	わからない	18	4.8	4.9	100.0
	合計	367	97.1	100.0	
欠 損値	システム欠 損値	11	2.9		
	合計	11	2.9		
合計		378	100.0		

Q34-2

気ままに暮らせればよい

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	そうだと思う	66	17.5	17.9	17.9
	まあそうだと思う	152	40.2	41.3	59.2
	あまりそうだと思う	74	19.6	20.1	79.3
	わない	62	16.4	16.8	96.2
	わからない	14	3.7	3.8	100.0
	合計	368	97.4	100.0	
	欠損値	システム欠損値	10	2.6	
合計	合計	10	2.6		
合計		378	100.0		

Q34-3

信念は貫くよう努力すべきだ

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	そうだと思う	49	13.0	13.4	13.4
	まあそうだと思う	137	36.2	37.3	50.7
	あまりそうだと思う	117	31.0	31.9	82.6
	わない	47	12.4	12.8	95.4
	わからない	17	4.5	4.6	100.0
	合計	367	97.1	100.0	
	欠損値	システム欠損値	11	2.9	
合計	合計	11	2.9		
合計		378	100.0		

Q34-4

自分の願望に忠実に生きたい

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	そうだと思う	101	26.7	27.5	27.5
	まあそうだと思う	197	52.1	53.7	81.2
	あまりそうだと思う	40	10.6	10.9	92.1
	わない	13	3.4	3.5	95.6
	わからない	16	4.2	4.4	100.0
	合計	367	97.1	100.0	
	欠損値	システム欠損値	11	2.9	
合計	合計	11	2.9		
合計		378	100.0		

Q 35

社会か個人か

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	国のことに目を向けるべき	113	29.9	31.0	31.0
	個人生活を重視すべき	104	27.5	28.6	59.6
	一概にいけない	132	34.9	36.3	95.9
	わからない	15	4.0	4.1	100.0
	合計	364	96.3	100.0	
欠損値	システム欠損値	14	3.7		
	合計	14	3.7		
合計		378	100.0		

Q 36

社会のために役立ちたいか

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	思っている	220	58.2	59.8	59.8
	あまり考えていない	111	29.4	30.2	89.9
	わからない	37	9.8	10.1	100.0
	合計	368	97.4	100.0	
欠損値	システム欠損値	10	2.6		
	合計	10	2.6		
合計		378	100.0		

Q 38

収入か自由時間か

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	自由時間を増やしたい	112	29.6	30.9	30.9
	収入を増やしたい	161	42.6	44.4	75.2
	その他	13	3.4	3.6	78.8
	わからない	72	19.0	19.8	98.6
	どちらともいえない	5	1.3	1.4	100.0
	合計	363	96.0	100.0	
欠損値	システム欠損値	15	4.0		
	合計	15	4.0		
合計		378	100.0		

Q 39

人は何のために働くか

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	お金を得るため	87	23.0	24.2	24.2
	社会の一員だから	83	22.0	23.1	47.4
	能力を発揮するため	47	12.4	13.1	60.4
	生きがいを見つけるため	110	29.1	30.6	91.1
	その他	16	4.2	4.5	95.5
	わからない	16	4.2	4.5	100.0
	合計	359	95.0	100.0	
欠損値	システム欠損値	19	5.0		
	合計	19	5.0		
合計		378	100.0		

Q 40

仕事か余暇か

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	仕事より余暇	56	14.8	15.4	15.4
	どちらかといえば余暇	90	23.8	24.7	40.1
	仕事と余暇の両方	174	46.0	47.8	87.9
	どちらかといえば仕事	25	6.6	6.9	94.8
	その他	9	2.4	2.5	97.3
	わからない	10	2.6	2.7	100.0
	合計	364	96.3	100.0	
欠損値	システム欠損値	14	3.7		
	合計	14	3.7		
合計		378	100.0		

2. 4 ジャンル別の有効回答数

ジャンル

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効 将棋	37	9.8	9.8	9.8
コーラス	47	12.4	12.4	22.2
登山	33	8.7	8.7	31.0
エアロビクス	33	8.7	8.7	39.7
ダンス	43	11.4	11.4	51.1
ハードウォッチング	26	6.9	6.9	57.9
野球	30	7.9	7.9	65.9
テニス	38	10.1	10.1	75.9
バレーボール	30	7.9	7.9	83.9
器楽演奏	61	16.1	16.1	100.0
合計	378	100.0	100.0	
合計	378	100.0		

2. 5 サークル別の有効回答数

表中の連続数は調査番号と一致する。

サークル

	度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効 1.00	16	4.2	4.2	4.2
2.00	10	2.6	2.6	6.9
3.00	16	4.2	4.2	11.1
4.00	11	2.9	2.9	14.0
5.00	10	2.6	2.6	16.7
6.00	11	2.9	2.9	19.6
7.00	14	3.7	3.7	23.3
8.00	12	3.2	3.2	26.5
9.00	19	5.0	5.0	31.5
10.00	26	6.9	6.9	38.4
11.00	9	2.4	2.4	40.7
12.00	16	4.2	4.2	45.0
13.00	13	3.4	3.4	48.4
14.00	11	2.9	2.9	51.3
15.00	14	3.7	3.7	55.0
16.00	13	3.4	3.4	58.5
17.00	10	2.6	2.6	61.1
18.00	9	2.4	2.4	63.5
19.00	38	10.1	10.1	73.5
20.00	11	2.9	2.9	76.5
21.00	40	10.6	10.6	87.0
22.00	9	2.4	2.4	89.4
23.00	10	2.6	2.6	92.1
24.00	21	5.6	5.6	97.6
25.00	9	2.4	2.4	100.0
合計	378	100.0	100.0	
合計	378	100.0		

3. 本論の資料

3. 1 各団体における年齢と役職の有無のクロス表（第六章 第二節 p.81）

年齢と役職の有無とサークルBY9 のクロス表

サークルBY9			役職の有無		合計	
			役職に就いている	役職に就いていない		
1.00	年齢	30歳代	度数 年齢の%	1 100.0%	1 100.0%	
		50歳代	度数 年齢の%	7 100.0%	7 100.0%	
		60歳以上	度数 年齢の%	1 14.3%	6 85.7%	7 100.0%
	合計	度数 年齢の%	1 6.7%	14 93.3%	15 100.0%	
2.00	年齢	20歳代	度数 年齢の%	1 100.0%	1 100.0%	
		30歳代	度数 年齢の%	1 100.0%	1 100.0%	
		40歳代	度数 年齢の%	1 16.7%	5 83.3%	6 100.0%
		50歳代	度数 年齢の%	1 100.0%	1 100.0%	1 100.0%
		60歳以上	度数 年齢の%	1 100.0%	1 100.0%	1 100.0%
	合計	度数 年齢の%	1 10.0%	9 90.0%	10 100.0%	
3.00	年齢	40歳代	度数 年齢の%	2 100.0%	2 100.0%	
		50歳代	度数 年齢の%	2 50.0%	2 50.0%	4 100.0%
		60歳以上	度数 年齢の%	3 30.0%	7 70.0%	10 100.0%
	合計	度数 年齢の%	5 31.3%	11 68.8%	16 100.0%	
4.00	年齢	40歳代	度数 年齢の%	2 100.0%	2 100.0%	
		50歳代	度数 年齢の%	1 12.5%	7 87.5%	8 100.0%
		60歳以上	度数 年齢の%	1 100.0%	1 100.0%	1 100.0%
	合計	度数 年齢の%	1 9.1%	10 90.9%	11 100.0%	
5.00	年齢	40歳代	度数 年齢の%	1 50.0%	1 50.0%	2 100.0%
		50歳代	度数 年齢の%	5 100.0%	5 100.0%	5 100.0%
		60歳以上	度数 年齢の%	3 100.0%	3 100.0%	3 100.0%
	合計	度数 年齢の%	1 10.0%	9 90.0%	10 100.0%	
6.00	年齢	60歳以上	度数 年齢の%	1 11.1%	8 88.9%	9 100.0%
	合計	度数 年齢の%	1 11.1%	8 88.9%	9 100.0%	
7.00	年齢	50歳代	度数 年齢の%	1 14.3%	6 85.7%	7 100.0%
		60歳以上	度数 年齢の%	6 100.0%	6 100.0%	6 100.0%
	合計	度数 年齢の%	1 7.7%	12 92.3%	13 100.0%	
8.00	年齢	50歳代	度数 年齢の%	1 20.0%	4 80.0%	5 100.0%
		60歳以上	度数 年齢の%	1 14.3%	6 85.7%	7 100.0%
	合計	度数 年齢の%	2 16.7%	10 83.3%	12 100.0%	
9.00	年齢	20歳代	度数 年齢の%	2 40.0%	3 60.0%	5 100.0%
		30歳代	度数 年齢の%	3 75.0%	1 25.0%	4 100.0%
		40歳代	度数 年齢の%	3 75.0%	1 25.0%	4 100.0%
		50歳代	度数 年齢の%	1 100.0%	1 100.0%	1 100.0%
		60歳以上	度数 年齢の%	1 33.3%	2 66.7%	3 100.0%
	合計	度数 年齢の%	9 52.9%	8 47.1%	17 100.0%	

年齢と役職の有無とサークルBY17のクロス表

サークルBY17			役職の有無		合計	
			役職に就いている	役職に就いていない		
10.00	年齢	30歳代	度数 年齢の%	2 100.0%	2 100.0%	
		40歳代	度数 年齢の%	6 85.7%	1 14.3%	7 100.0%
	50歳代	度数 年齢の%	1 20.0%	4 80.0%	5 100.0%	
	60歳以上	度数 年齢の%	5 50.0%	5 50.0%	10 100.0%	
	合計	度数 年齢の%	12 50.0%	12 50.0%	24 100.0%	
	11.00	年齢	20歳代	度数 年齢の%	2 100.0%	2 100.0%
		30歳代	度数 年齢の%	5 100.0%	5 100.0%	
		50歳代	度数 年齢の%	1 100.0%	1 100.0%	
	合計	度数 年齢の%	1 12.5%	7 87.5%	8 100.0%	
12.00	年齢	30歳代	度数 年齢の%	1 100.0%	1 100.0%	
		50歳代	度数 年齢の%	1 12.5%	7 87.5%	8 100.0%
	60歳以上	度数 年齢の%	2 33.3%	4 66.7%	6 100.0%	
	合計	度数 年齢の%	3 20.0%	12 80.0%	15 100.0%	
13.00	年齢	50歳代	度数 年齢の%	4 100.0%	4 100.0%	
		60歳以上	度数 年齢の%	1 11.1%	8 88.9%	9 100.0%
	合計	度数 年齢の%	1 7.7%	12 92.3%	13 100.0%	
14.00	年齢	20歳代	度数 年齢の%	5 100.0%	5 100.0%	
		30歳代	度数 年齢の%	2 33.3%	4 66.7%	6 100.0%
	合計	度数 年齢の%	2 18.2%	9 81.8%	11 100.0%	
15.00	年齢	30歳代	度数 年齢の%	7 100.0%	7 100.0%	
		40歳代	度数 年齢の%	2 50.0%	2 50.0%	4 100.0%
	50歳代	度数 年齢の%		2 100.0%	2 100.0%	
	60歳以上	度数 年齢の%		1 100.0%	1 100.0%	
	合計	度数 年齢の%	2 14.3%	12 85.7%	14 100.0%	
16.00	年齢	40歳代	度数 年齢の%	1 50.0%	1 50.0%	2 100.0%
		50歳代	度数 年齢の%	2 33.3%	4 66.7%	6 100.0%
	60歳以上	度数 年齢の%	1 25.0%	3 75.0%	4 100.0%	
	合計	度数 年齢の%	4 33.3%	8 66.7%	12 100.0%	
17.00	年齢	20歳代	度数 年齢の%	2 50.0%	2 50.0%	4 100.0%
		30歳代	度数 年齢の%	2 33.3%	4 66.7%	6 100.0%
	合計	度数 年齢の%	4 40.0%	6 60.0%	10 100.0%	

年齢と役職の有無とサークルBY25のクロス表

サークルBY25			役職の有無		合計	
			役職に就いている	役職に就いていない		
18.00	年齢	20歳代	度数 年齢の%	1 25.0%	3 75.0%	4 100.0%
		30歳代	度数 年齢の%	2 50.0%	2 50.0%	4 100.0%
	合計		度数 年齢の%	3 37.5%	5 62.5%	8 100.0%
19.00	年齢	20歳代	度数 年齢の%		8 100.0%	8 100.0%
		30歳代	度数 年齢の%		6 100.0%	6 100.0%
	40歳代	度数 年齢の%	1 11.1%	8 88.9%	9 100.0%	
	50歳代	度数 年齢の%		9 100.0%	9 100.0%	
	60歳以上	度数 年齢の%		2 100.0%	2 100.0%	
	合計		度数 年齢の%	1 2.9%	33 97.1%	34 100.0%
20.00	年齢	20歳代	度数 年齢の%	1 25.0%	3 75.0%	4 100.0%
		30歳代	度数 年齢の%	2 33.3%	4 66.7%	6 100.0%
	合計		度数 年齢の%	3 30.0%	7 70.0%	10 100.0%
21.00	年齢	20歳代	度数 年齢の%	2 9.1%	20 90.9%	22 100.0%
		30歳代	度数 年齢の%	4 40.0%	6 60.0%	10 100.0%
	40歳代	度数 年齢の%	3 50.0%	3 50.0%	6 100.0%	
	50歳代	度数 年齢の%	1 50.0%	1 50.0%	2 100.0%	
	合計		度数 年齢の%	10 25.0%	30 75.0%	40 100.0%
22.00	年齢	30歳代	度数 年齢の%	2 100.0%		2 100.0%
		40歳代	度数 年齢の%		4 100.0%	4 100.0%
	50歳代	度数 年齢の%	1 33.3%	2 66.7%	3 100.0%	
	合計		度数 年齢の%	3 33.3%	6 66.7%	9 100.0%
23.00	年齢	20歳代	度数 年齢の%	1 10.0%	9 90.0%	10 100.0%
		合計		度数 年齢の%	1 10.0%	9 90.0%
24.00	年齢	20歳代	度数 年齢の%	1 11.1%	8 88.9%	9 100.0%
		30歳代	度数 年齢の%	1 33.3%	2 66.7%	3 100.0%
	40歳代	度数 年齢の%	3 50.0%	3 50.0%	6 100.0%	
	50歳代	度数 年齢の%	2 100.0%		2 100.0%	
	60歳以上	度数 年齢の%		1 100.0%	1 100.0%	
	合計		度数 年齢の%	7 33.3%	14 66.7%	21 100.0%
25.00	年齢	30歳代	度数 年齢の%	1 50.0%	1 50.0%	2 100.0%
		40歳代	度数 年齢の%	3 75.0%	1 25.0%	4 100.0%
	50歳代	度数 年齢の%	3 100.0%		3 100.0%	
	合計		度数 年齢の%	7 77.8%	2 22.2%	9 100.0%

3. 2 年齢とゆとりのクロス表 (第六章 第二節 p.83)

クロス表

			ゆとりがあるか			合計
			ゆとりがある	ゆとりがない	わからない	
年齢	20歳代	度数	34	37	2	73
		年齢の%	46.6%	50.7%	2.7%	100.0%
	30歳代	度数	43	21	2	66
		年齢の%	65.2%	31.8%	3.0%	100.0%
	40歳代	度数	38	19	2	59
		年齢の%	64.4%	32.2%	3.4%	100.0%
	50歳代	度数	53	26	1	80
		年齢の%	66.3%	32.5%	1.3%	100.0%
	60歳以上	度数	74	9		83
		年齢の%	89.2%	10.8%		100.0%
合計		度数	242	112	7	361
		年齢の%	67.0%	31.0%	1.9%	100.0%

※ カイ2乗検定による漸近有為確率は.000

3. 3 年齢と一日の労働時間のクロス表 (第六章 第二節 p.83)

年齢と一日の労働時間(3分割)のクロス表

			一日の労働時間(3分割)			合計
			8時間未満	8時間から9時間未満	9時間以上	
年齢	20歳代	度数	19	18	24	61
		年齢の%	31.1%	29.5%	39.3%	100.0%
	30歳代	度数	24	19	13	56
		年齢の%	42.9%	33.9%	23.2%	100.0%
	40歳代	度数	18	19	10	47
		年齢の%	38.3%	40.4%	21.3%	100.0%
	50歳代	度数	17	17	19	53
		年齢の%	32.1%	32.1%	35.8%	100.0%
	60歳以上	度数	25	3	6	34
		年齢の%	73.5%	8.8%	17.6%	100.0%
合計		度数	103	76	72	251
		年齢の%	41.0%	30.3%	28.7%	100.0%

※ カイ2乗検定による漸近有為確率は.002

3. 4 連帯感と不満の有無とのクロス表 (第七章 第三節 p.99)

特に不満はないと連帯感の有無のクロス表

			連帯感の有無				合計
			強い連帯感がある	ある程度連帯感がある	あまり連帯感がない	ほとんど連帯感がない	
特に不満はない	非選択	度数	17	74	22	2	115
			14.8%	64.3%	19.1%	1.7%	100.0%
	選択	度数	19.1%	35.6%	45.8%	33.3%	32.8%
			72	134	26	4	236
			30.5%	56.8%	11.0%	1.7%	100.0%
			80.9%	64.4%	54.2%	66.7%	67.2%
合計		度数	89	208	48	6	351
			25.4%	59.3%	13.7%	1.7%	100.0%
			100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	

※ カイ2乗検定による漸近有為確率は.007